
東方破壊録

Mr.X

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方破壊録

【Nコード】

N3642M

【作者名】

Mr.X

【あらすじ】

前世であることがきっかけでバトルジャンキーになってしまった主人公。ある日交通事故にあってしまい気がつくところは見知らぬ森の中！？しかも身体がすごい事になっている！？まあいい。せつかくの第二の人生、戦って戦いつくしてやるぜ！

初投稿&処女作です。意見・感想・批判等待っています。批判についてはなるべく受け入れる形にしたいと思います。よろしくお願いします。

プロローグ 〱 幻想入りへの序曲 創造神の暇つぶし〱 (前書き)

初めましてMr・Xといいます

今回はこんな駄文を読んでくださりありがとうございます

これからもなにとぞよろしく願います

それではプロローグ 〱 幻想入りへの序曲 創造神の暇つぶし〱を
お楽しみください。

プロローグ　く幻想入りへの序曲　創造神の暇つぶし

世の中には理不尽なことがたくさん溢れている。

必死に努力してもそれが報われない、無茶苦茶なことを押し付けられる、無実の罪をつけられる、親の言う事が自分の力量にあつてないのに、できないと「役立たず」「無能」の烙印を押される、それが原因で家族から無視されたり酷い時には殴られる等バカみたいにあるわけだ。

俺は生まれつきの不幸体質らしい。物心ついた時から上にあげたような理不尽な事を体験してきた。というよりもつと酷い。やっと友人ができたと思ったら裏切られるなんてザラにあったことだ。だから俺は「力」を目指した。他人なんて関係なく自分のことは自分で守り、理不尽な事を突きつけてくる奴を自分の力でねじ伏せる。そんな事をしているうちに喧嘩やらなんやらで最強の位置をしめてしまったらしい。まあ、うるさい連中をより効率的にねじ伏せるために人体の急所なんかを全て覚えたり、どういう攻撃をしたらより大きなダメージを与える事が出来るかとかを身体に叩き込んでいったからな。もちろん独学でだ。どうやら俺はそういった分野に関しての才能があるらしい。

でだ。それまで生きる事に疲れていた俺はその「喧嘩」というものに楽しみを見出した。所謂戦闘狂バトルジャンキーと呼ばれる奴だ。だが俺にはそんな事はどうでもいい。要は俺が楽しめればいい事だ。戦っている時に自分の気分が爽快になってくる。それはより強い奴だにより爽快感が強い。野菜戦闘民族の連中みたいになっているとしみじみ感じる。

まあ、かくして俺は自分が生きる事の意味を見つけた。生まれてから一度も味わった事のない晴れ晴れとした気分だった。さっきみた

いにちよつとだけだがネタを盛り込む余裕もできた。最近さっきの民族が出ていた少年誌にはまっている。某妖怪漫画に出て来ている蜘蛛どのに親近感が沸くのは俺だけだろう。戦って戦って戦い続けて戦いに敗れて死ぬ。そんな人生が送れたらどんなにいいか・・・もう俺は後には戻れないらしい。でも楽しいんだからしょうがないね、うん。

何度も言うが現実には理不尽だ。それが今、俺の目の前にある。どういうことだつて？説明するからちよつとまで。

ある日の学校からの帰り道だった。その日も俺を倒して名を上げようとする連中（三十人ぐらい）を叩き潰した。いやゝ戦うのって楽しいね。最近一対一でやりあえる奴がいなくなつてちよつとつまらないんだけどな。

その後コンビニによつて例の少年誌を買つて、信号を渡つているときにソイツは来やがつた。

所謂信号無視である。・・・トントトラックが。そこで最初の場面に戻る。トラックが目の前までに迫つてくると急に時間が遅くなつたように感じた。

ああ、俺は此処で死ぬのか。ようやく生きがいを見つけたところなのに・・・まあ喧嘩が生きがいつてのもおかしいけどな。もう少しぐらい生かしてくれてくれないんじやないのか？神様。恨むらくは自信の不幸、か。もし神様がいるなら、来世は思いっきり暴れられる身体と世界にしてくれよ・・・

SIDE???

「ほお・・・なかなか面白い奴がいたものだ」

面白い、実に面白い。・・・ネタじゃねえぞ？

まあ、ホントに面白い考え方を持った人間だな。アイツを別の世界に転生させるか？それも空想上の物語の世界へと。

「暇つぶしにもなるだろうしな・・・」

死後の人間に関しては閻魔に任せているし、押し付けている他にもめんどくさい仕事なんかはゼウスやらオーデインなんか人はそれを脅迫とがやってくれていう。ぶっちゃけ暇なのだ。

「となれば、あの人間の願いをかなえてやるかね」

あいつの記憶を探ってあいつが理想とする<暴れられる体>を見つめる。そこに有ったのは赤い髪に般若の面のような顔をした四本腕の大男の妖怪だった。

記憶によると土蜘蛛というらしい。その世界の天災にもたとえられる大妖怪で、神ですら出会ってしまったら最後という真正正銘のバケモノだ。

でも面白そうだからこれに決めた。さすがにずっとこの姿だと流石に可哀相な気がしたので任意で以前の姿と変更できるようにしよう。ただ、本当の姿はさっきの姿だな。

「次は世界か」

暴れられる空想世界なんていくらでもある。それこそ適当に転生させたらけっこうな確率で戦争ありけり、戦闘ありけりな世界に転生するのだ。まったく、人間はバトル物が好きらしい。

「どうするか……そうだ！」

用意したのは

「創造神様の全世界ダーツの旅」

ハイ、所さんのアレです。一度やってみたかったんだよね。」

「パジエロ！パジエロ！とりゃー！」

某友達公園の賞品獲得時の掛け声をいながらダーツを投げる。

「さ〜てどこに当たったかな〜？」

刺さったところには……

「東方の世界ねえ。まあ妖怪化して転生させるからいいか。……
この場合憑依といったほうが正しいか？」

手順としてはこうだ。まず創造神の権利を^{乱用して}使ってその世界に土蜘蛛の肉体を作る。肉体だけなので魂はこもっていない。その魂の役割をするのがあいつの魂というわけだ。

「じゃあ、取り掛かるとしますかね……」

さあて、頑張って俺を楽しませてくれよ？

プロローグ く幻想入りへの序曲 創造神の暇つぶしく（後書き）

どうでしたでしょうか？

小説を書いたのは初めてだったのでへたくそでは有ると思います。

此処まで読んでいただきありがとうございました。

ついでに感想や意見、批判等をくださると作者のテンションとやる気がうなぎのぼりになるので、気分が向いたらでいいのでよろしく願います。

では次回の第一話 く知らない森だ、うん？なんか違和感が・・・
妖怪・土蜘蛛化くであいましょう。

ではノシ

第一話　く知らない森だ、うん？なんか違和感が・・・　妖怪・土蜘蛛化（前

どうも、Mr．Xです。

こんな文才皆無な作者の小説を読んただきありがとうございます。

ではく知らない森だ、うん？なんか違和感が・・・　妖怪・土蜘蛛化くをお楽しみ下さい。

第一話 知らない森だ、うん？なんか違和感が・・・ 妖怪・土蜘蛛化

「知らない天じ・・・森だ」

おk、現状を整理しよう。

まず俺は都会の道路でトラックに撥ねられた。それは間違いない。だって衝撃が来た瞬間周りの景色がいきなり回転したんだぜ？ソレを撥ねられた以外でどう説明しろと。

その後、地面が迫ってきて衝突。グシャツという音とともに視界が暗転して意識が吹っ飛んだと思ったたら現在に至る。

「まずは・・・」

この状況にぴったりの言葉を探し出し、ソレを口にする！否！叫ぶ！！

「ここ・・・どこじゃあああああああ！！！！！！」

おもいつきり叫んだおかげで気分がすっきりした。っていうか俺って叫ぶキャラだったけ？そもそもこんなに軽かったか？俺はよく言えば寡黙、悪く言えば根暗なんていう感じだったはずだ！・・・自分で考えて鬱になったぜ・・・。っーかさつきから全身に違和感があるんだがなあ。特に肩のところとか。・・・まあいいか。

「まずは起き上がるかね・・・よいしょと」

右腕を地面に立てて上半身を起き上がらせる。

ズズン

「・・・はい？」

ちよつと待て。ふつう腕で支える時に出る音はこんなに質量を持つた音だったか？何より音がひとつ多い気がしたぞ今。しかも上体を起こしてみた景色が普段よりも高いのだが？

俺は違和感の正体が気になりつつ恐る恐る右腕があるところへ目を向ける。

「・・・」

結果から言うと右腕はある。それも自分の物ではないと自信を持って言える腕が二本。・・・二本！？

「ちよつと待て、人間というのは右腕が二本も無かつたはずだ！」

天津飯？あいつは第三の目を開眼しているから人外のカテゴリーでいいんだよ！

って言うかなんか嫌な予感がするぞ。具体的に言うと左腕的な意味で・・・

「まさか！？」

どうか外れていますように！

現実是非常である

「マジかよ……」

あれから腕の存在を四本確認した俺はしばらくの間呆然としていた。いやだって腕が四本だよ？しかも俺が普段見慣れている腕じゃなくて、もうなんかプロレスラーも真っ青な太さと長さだよ？どう考えてもおかしいじゃん。視野からいって背の高さも高くなっているはずだし、何よりこの状況で比較的冷静な自分に驚いているのよ。普通の感性だったら叫び声をあげても不思議じゃないはずなんだがね

え・・・。

「俺ってやっぱりおかしいのかね？」

そう、やはり以前の経験がこの状態を作り出していると俺は思う。あれだけの事を体験しておかしくならない奴なんていないだろ。いたらいたらでメツチャクチャ怖い。「怖い」という感情が既に「自信に恐怖を感じさせる相手がいたことに対する歓喜」という感情に変わっている俺ですら純粹に恐怖を覚えるほどだからな。

え？お前の方がよっぽど怖いって？

しょうがねえだろ。それ位の相手が全然いなかったんだから。“戦闘狂”である俺にとっては地獄だぜ？やっぱ自分と張り合える相手と本気で戦うのが一番だな！

「って俺は何を考えている・・・おろ？」

ふと目を向けた所に紙が落ちていた。

「手紙・・・か？」

なぜこんな所に手紙が落ちているのか興味をそそられる。俺は心がおもむくままに手紙を開けてみることにした。

「転生おめでとう」

は？転生？

今此処で転生という言葉が出てくるといことは・・・

「これってば・・・神からじゃね？」

「『事』はだ。神が俺の願いを聞いてくれた事になるのか？それにしてもこの身体は何だ？」

「とりあえず読むか」

「<よう、戦闘狂いの人間よ。俺は創造神様だ。まあ、簡単なことを言えばお前を生き返らせた。っていうか魂だけだけどな。それでもお前の願い事を聞き届けてくれたこの俺様に感謝するがいい！ふはははははは！」

さて、まずお前の身体について教えてやろう。お前の願いである「暴れる事が出来る体」はお前の理想とした存在そのものだ。（ちなみに土蜘蛛な。お前の頭の中の）もちろん精神は生前のお前だ。だが転生の過程でちと魂がおかしくなったみたいでな？感性が妖怪よりになってしまった。けど前のお前自体が人間らしくなかったからな。元から妖怪寄りだったから精々人を殺すことに嫌悪感をいだかないだけだ。それ位だったらお前だったらわかるだろう？

次に世界についてだがこれは簡単だ。東方の世界だ。この世界には既に「土蜘蛛」という種族がいるがお前とは別物だから安心してくれ。

では良い第二人生を送ってくれ>

「偉大なる創造神様より」

「ということとは、さっきから身体の中の違和感ってもしかして妖力？けっこううれしいんですけど」

自分が人外になっても冷静な俺。マジで狂ってるな。

ん？もうちょっと何かないのかって？

そりゃビックリしたよ？俺があのだ土蜘蛛になっっているなんて驚きだ

よ。え？そんなことじゃないって？人殺しに關してだって？

・・・けどなあ、確かに人殺して嫌悪感をいだかないのっていかんと思うよ？だけどそれは日本という平和な国でしか通用しないわけだよ？

妖怪

考えてみるといい。この身体に生まれたからには人と戦う事になるわけだよ。その時に殺す事をためらったらそれは自分の死を意味する。嫌だよ？自分が死ぬ時の感覚は。それにせつかくまた喧嘩できるのにそんなくたらないことで死んだらつまらないじゃない？せつかくの夢の「戦いに生き、戦いに死ぬ」という人生を棒にふる事だけは絶対にしたくないね。

っていうか東方って何？俺喧嘩ばかりしてたからよくわからんのだが・・・まあいいか。そのうちわかる。

「しかし土蜘蛛ねえ・・・」

俺の想像が間違っていなければ般若のような顔で背丈がメチャ高いはずだ。さすがに永遠にこの姿だとちと嫌だ。

「どうにかならんかね・・・うお!？」

突如視界が変わった。さっきまで木々の先位までが目線にあっただが、今はだいぶ低くなっている。しかも今まで見慣れた高さに目線がある。それにさっきまで四本有ったはずの腕がこれも見慣れた二本の腕に変わっている。

「どういうことだ？」

おそらく今の姿は今まで過ごしてきた人間の形だろう。どうやら自分の意思で以前の俺と土蜘蛛の姿は変えられるらしい。まあ服装は土蜘蛛の服を今の俺のサイズに合わせたような奴だがな。服装は変わ

らないようだ。試しに土蜘蛛の姿をイメージしてみる。・・・どうやら推測は間違っていないらしい。確認をしたところでまた人の姿に戻る。

「しっかしこつからどうするかね。」

選択肢としては二つ有る。

一つ目はこの森の中ですぐす。妖怪というものは年月を経るごとに妖力が増していくはずだ。だから此処ですぐせばいずれ大妖怪になれるだろう

「だが俺の性格に合わない。パス」

二つ目はこの森を出て旅をする。そうすればいずれ強い奴と戦えるはずだ。採用。問題は

「どうやって出る？方向がわからなければどうにもならないし、かといって」

動き回るのもなあと言いかけた瞬間三つ目の選択肢がでた。今此処で暴れる。標的は周りにいる殺気を飛ばしている奴等。ざっと二十匹位かね。ったく、奇襲するつもりならもつと気配を消せよ。じゃないと日夜いたるところで奇襲や闇討ちされかけてきた俺を襲えるわけねえだろ。殺気からいって妖怪だろう。今までつぶしてきた連中相手とは違う、本物の命のやり取り。だが俺はそれに歓喜している。ひさびさの集団対一という構図に興奮している俺もいる。どうやら俺は根っからの戦闘狂らしい。

相手は妖怪、されど俺も妖怪。ならするべきことは？

「心のおもむくままに・・・全てを叩きつぶす!!」

第一話 知らない森だ、うん？なんか違和感が・・・ 妖怪・土蜘蛛化（後

どうでしたでしょうか。

相変わらずの駄文ですいません。

意見・感想・批判等大歓迎です。ぜひぜひ、よろしくお願いします。

それでは第二話 戦闘は最高。異論は認めない 土蜘蛛無双
でお会いしましょう

ではノシ

第二章　く戦闘は最高。異論は認めない　土蜘蛛無双　（前書き）

どうも、Mr. Xです。

ちよつと遅くなつてすみません。

それでは、第二章　く戦闘は最高。異論は認めない　土蜘蛛無双　をお楽しみ下さい。

第二章　く戦闘は最高。異論は認めない　土蜘蛛無双く

まずは土蜘蛛の姿に戻り、一番近くにいた妖怪に肉薄する！

「オラアアアアア！！！！」

奇襲するはずだった獲物がいきなり向ってきたら驚くだろう。案の定そいつはその場に固まってしまい、俺の拳を顔面で受け止めてしまった。

グシャアアア！

軽い牽制程度の力で殴りつけた拳が当たった瞬間、背筋がゾワリとする音がしてそいつの頭が吹っ飛ぶ。

首から上がなくなった妖怪がその場に崩れ落ち、他の妖怪共が呆然とするのがわかる。

「・・・」

その中で俺も呆然としていた。命を奪った事に本当に嫌悪感がない事に対してではない。自分の力に対してだ。今までと同じように牽制程度のジャブでひるませてその後全力で殴りつける、そういうイメージを思い浮かべていたがそれが実現する事はなかった。なんせ牽制打で既に相手は息絶えてしまったからだ。普通だったら今までとは違う、強大すぎる力におびえることになったであろう。

だが俺は

「はは・・」

普通ではない

「ははははは・・・」

既に狂つた

「は は は は は は は ・ ・ ・ ・ ・ 」

化け物だ

[illegible]

俺を支配する感情は「歡喜」

圧倒的力を手に入れた「歓喜」、人外の化け物共ですら蹂躪する事が出来る「歓喜」、そして本物の殺し合いが出来るという「歓喜」。周りにいた妖怪達は突然笑い出した俺を見つめていた。俺は辺りを見回す。そこには異形の妖怪が俺を囲むようになり、どいつもこいつも怯えたような表情をしていた。

「どうだ、三下共。狩る側から狩られる側になった気分は？」

俺の言葉に妖怪たちは自分達の置かれている立場に気付いた。それは、この森に来た愚かな食料を喰い散らす側ではなく、自分達が食料と誤認していた妖怪に逆に喰い散らされる側だと。

「どうした？来ないのか？」

俺は満面の笑みで相對する。これから始まる蹂躪劇の様相を思い浮かべて……

「なら……こっちからいくぞおおおお！！！」

俺は次の標的に向って大地を蹴る。妖怪共の方もヤケクソになったらしく、いつせいに飛び掛ってくる。さあ……この世界に来て記念すべき一回目の大喧嘩の始まりだ！

それは文字どおり喧嘩という名の蹂躪だった。俺は向ってくる奴らを四本の腕で片っ端から叩き潰し捻りつぶし握りつぶし殴り飛ばしていき、逃げようとする奴は正面に回って踏み潰し、命乞いをするものは笑って半身を吹き飛ばした。

半数ぐらい殺した時だろうか、俺の頭をある考えがよぎった。それはこの身体の本質についてだ。確か作中では、妖怪は“おそれ畏”というその妖怪の象徴が具現化した力を持っていたはずだ。なら今、土蜘蛛という妖怪になった俺なら使えるんじゃないか？そう心に思い浮

かべた瞬間、頭の中に何かが突如浮かんできた。まるで俺がそう思うことを待っていたかのように

「・・・」

俺が暴れる事を止めたのを好機とみて、残りの妖怪全てが一斉に飛び掛ってくる。それら全ての瞳にはかつて俺と相対し、ワザと隙を作ってやった時に突撃してくる奴のような一縷^{いちる}の望みにかけた悲壮感のような決意があった。だが俺はその決意をねじ伏せてきた。それは今も昔も変わらない。

俺は“力”を振るう。土蜘蛛の存在意義を、そして「俺」^{土蜘蛛}の本質を

「我、すなわち之“破壊”なり」

口にし、“畏”を解放する。それだけで妖怪は吹き飛ばされ、死に絶える。辛うじて残った奴らも既に虫の息だ。それは土蜘蛛の“畏^本”である“破壊”が引き起こしたものだ。いくら妖怪になったからって元人間の俺が頭に思い浮かんだ事をやっただけでここまで出来るとはな・・・想像以上だ。そんなことを考えながら俺は近くに行つて止めをさす。

「足りないな・・・」

そう、相手が人外の化け物共であってもそれ以上の化け物になった俺にとつてはただの雑魚だ。量が量だからもう少し満足できるかと思つたら瞬殺だったからな。俺の一撃を耐えられる奴がいらないとはちよつと驚きだった。あいつらが弱いのか、それとも俺が単に強すぎるのか。おそらく後者だろう。雑魚といつてもそこそこの妖力を持つている奴も何匹かいたからな。

つていつの間にか相手の妖力を確認できてしまっている俺。だいぶ

この身体に馴染んできているようだ。あれだけ暴れまわったから当然といえるのだろうが、妖力を感じたのは暴れる前だから少なからず俺の魂はこの身体と相性がいいようだ。思う存分暴れることに喜ぶべきか、自分が元から人外への適性があつたことに落ち込むべきか。考える間もないな。もちろん前者だ。わかるだろう？

「んなことよりもこれからどうするかだ。」

選択肢一 ここで暮らす・・・却下。

選択肢二 この森の強い奴片っ端から潰す・・・却下。おそらくめばしい奴らはさっきの戦闘で殺したと思うからな。いまさらどうにもなるまい。

選択肢三 森を出て旅に出る・・・どうやって？ けっこう広そうだな。保留。

選択肢四 自分の力を把握するために修行・・・これが一番無難だな。完全に使いこなせればより強い奴と戦えるからな。そう思うだろう？ え？ 俺だけだって？・・・否定しきれないな。悔しくないけど

「まだよくわかんないからな。この機に完璧に把握するとするかね」

さてと・・・本物の俺を探す旅に出かけるかねえ。

第二章 く戦闘は最高。異論は認めない 土蜘蛛無双く（後書き）

どうでしたでしょうか。

戦闘描写がへたくそですみません。

見てくださっている皆様！たくさんの感想をありがとうございます！
これを糧にしますます頑張って行きますので、この駄文を作者と
共によりしくお願いします。

意見、感想、批判等随時受け付けておりますのでこちらもお願いします。

では、第三章 くもしかして俺って最強じゃね？ 修行&能力発現
くでお会いしましょう。

ではノシ

第三話 ーもしかして俺って最強じゃね？ 修行&能力発現ー（前書き）

まいど、Mr.Xです。

遅くなって申し訳ございません。言い訳は致しません。

あ、それと十六夜神月さんからのアドバイスで第ー章 第ー話に変
更しました。感謝です。

それでは、第三話 ーもしかして俺って最強じゃね？ 修行&能力
発現ーをお楽しみ下さい。

第三話　くもしかして俺って最強じゃね？　修行&能力発現く

「まずは俺の力の把握としますかね」

己の力に目覚めるなら瞑想がいいって爺ちゃんが言ってた！

・・・ふざけるのは置いといて。実際自分の中の力について効率よく把握するには、精神を集中させて体内でその力をイメージし、循環させる事が一番だ。それが世に言う瞑想。爺ちゃんはおいというのだ。

「さてと、無心になりますか。・・・」

まずは“畏”を少し解放する。いきなりさっきの殺し合いの時の規模の力を循環させようとすると絶対に体がはじけ飛ぶ。確信できるそれは、土蜘蛛の“畏”の性質の問題だ。「破壊」、それは全ての物を壊していくという概念そのもの。ハッキリ言ってこの概念自体を循環させるなんて矛盾している。循環とは、循環させる力と自らの体を調和させて一体化させることを言うのだ。この場合の力は“^{破壊}畏”になる。普通の妖怪だったら循環させようと試みた時点で体が“畏”に飲み込まれてその場には「破壊」という概念しか残らない。どうということだって？簡単に言えば“畏”が暴走して体が爆発する。

だが、俺は普通じゃあない。原作で“畏”を思いのままに扱い、暴れまくってきた「土蜘蛛」だ。根拠はない。だが確信はある。なぜならそれは土蜘蛛の本質であると同時に「俺」の本質なのだから。

「・・・」

解放した“畏”を自分の体内に押さえ込み、一体化させる。一步間

違えば即ドカンの危険な行為だ。だが俺はそれをやりとげる。
体の中に異質でいて心地よい「力」があるのを感じる。第一段階は
クリアだ。

「ふう・・・次だ」

今度はその「力」を体の細部まで浸透させる。イメージとしては、
血流に「力」をのせて足の先から髪の毛の先まで流すような感じた。髪
の毛には血はかよってないって？細かい事はいいんだよ。

「上手くいった・・・か・・・？」

感覚としては上手くいっていると思う。後は動かした時に暴走しな
いかどうかだ。俺は恐る恐る手を動かしてみる。・・・成功のよう
だ。

「はあ・・・メチャ神経使うなコレ」

ただでさえ扱いづらい「概念」を完全に制御するやり方だ。破壊疲れる
ことこの上ない。しかも、現段階で相当量な許容量キャパシティーを持つ大妖怪の
俺でも一度に扱える量が少ないときた。

「こりゃ完全に扱えるまでにメチャクチャ時間が掛かるな・・・
まあ、妖怪になったんだしそれほど問題にもならないかな」

問題なのは食料だ。他の妖怪でも殺して喰うか？それともこちら辺
にいる獣けものでも喰うか？人間は・・・さすがに元同族を喰うのはな・・・
。殺す事に嫌悪感を示さないにしても喰う事には気が引ける。
ま、そんな事は後々解決するだろう。今やっておかなければならな
いのは・・・

「さうて、無制限耐久瞑想の時間だぜコノヤロー」

あれから数百年ぐらいたつだろうか、ようやく完璧に制御できるようになったぜ。^{キャパシティ}許容量もそんじょそこの妖怪が千匹集まっても補えないぐらいでかくなつた。え？手抜きだつて？お前、瞑想 力を体全体に纏わせる その場で暴れる or 暴発（爆発） 再び瞑想の無限ループを数百年間生放送でお送りしろつてか？無理があるだろ。しかも爆発した時の描写なんてどうすりゃいいんだ。グロすぎんぞ。例？制御に失敗して上半身吹っ飛んだりしましたが何か？それにありえない位の生命力で復活する所を公開しろと。なんのプレイだよ。あと、暴れたり爆発したりで山の中にひらけた場所ができたぜ。山？ああそうそう、修行中にわかつたんだがここは山らしい。俺が森と勘違いしたのはその山の中の比較的平らな場所だったからだ。

さて、話を戻そう。俺は今最終段目標である「自分の力の完全把握」の段階までできている。やり方は、まず“畏”を最大出力で放出して瞑想をする。体内で循環させたら今度は“畏”を体全体に纏う。その状態ですくと瞑想。文字通り“畏”と一体化し、自分の「力」を心底から浮き上がらせる。コレが中々難しく、後ちよつとで全部出てきそうなんだが出てこない！というもどかしい状況が現在まで続いている。

「……………（もう少し……………あと少しで出てくる……………）
……………『一体化が切れた音プツン』だああああああ！！！！上手く
いかねええええええええええ！！！！コレで何回目だコンチクショ
ー！！！！253回目だこのやるおおおお！！！！」

この通り失敗続きなので自暴自棄になりかけです、ハイ。制御する
ための鍛錬はやつたらやつた分だけ成果があつたから持てたけど、
こんだけできないとなると持ちそうにない（精神的な意味で）

「次こそ……………次こそお……………」

コレがまた無限ループになりそうで怖いな……………

全ての終りはあつけないものだ。命にしろ、難しい問題にしろ、だ。
特にそこに至るまでが困難な道だとよりあつけない。何が言いた
かっていうとあれから数時間後にポツと出てきた。あんだだけ苦労し
て来たのが何だ？っていうぐらいあつけなく。それで出てきたのが

「破壊を司る程度じかひていどの能力」

とかいうわけのわからん能力だった。いや、俺の土蜘蛛ことだから破壊に

関する力だとはわかってはいたけれどどうにも抽象的でつかめない。

「あれか？何でも破壊出来るとかそんなもん？」

何だそりゃ。自分で言ってハチャメチャなのがよくわかる。だが物は試し、だ。

「うーんと、どんな感じだ？対象を握りつぶすかんじ？それが殴つてぶち壊すかんじか？」

標的は・・・あの木でいいか。」

まずは握りつぶすかんじでいってみよう。木に手をかざし、自分の掌てのひらの中におさめるようにイメージし、一気に握り潰す！

グシャアアアアアアアア！！！！

「・・・・・・・・・・」

何だコレ。怖い。だってそんなに力使った覚えなのに木が一本丸ごとほじけとぶってどうよ？

「・・・まさか俺ってトンでもない力を手にしたんじゃないの？」

神よ、これだけはあんたを恨ませてもらうぜ・・・。

何故か？簡単なことだ・・・。

「俺とガチで張り合える奴がいんのかあああああああああ！
?!?!?!?」

そつだ。唯でさえ土蜘蛛になったおかげで本気で戦える相手が少な

くなつた上に、修行しまくつたせいで“畏”がほとんど自分自身と化してしまったから身体能力や妖力が当社比十倍ぐらいに跳ね上がっている。その状態でこの能力は最強にもほどがある。

「はぁ・・・はぁ・・・こんな事なら修行しなければ良かったぜ・・・。」

・・・しかし、やつちまつた事はしょうがない。こうなりや^{ヤケ}自棄だ！ いったそのこと限界までやってやろうじゃねえかああああ！！
「！」

だが俺は気付いていなかった。それらの話は“土蜘蛛”の時の話であつて、“人間”の状態の時ならば力がけっこう制限される事を・・・。何が言いたいかつて？ 要するに“人間”の時なら満足できるぐらいならば暴れられるという事だ。

知らないっていつになっても怖いものだね。つくづく感じたよ。

第三話 　もしかして俺って最強じゃね？　修行&能力発現（後書き）

どうでしたでしょうか。

相変わらずわけのわからない小説ですみません。

若干ご都合主義になっているかもしれませんが。その辺はご了承を。

毎度毎度こんな駄文に感想を下さっている皆様、本当にありがとうございます。
ございます。すっごくうれしいです。これからもよろしく願います。

まだ下さっていない読者の方も、意見・感想・批判等を気が向いたらいただけたらそれだけで作者は天国にいける気がします。

では、第四話 　名前ってどこの世界でも大切だよね　四話越しの
改名&山の主々でお会いしましょう。

ではノシ

第四話　く名前つてどこの世界でも大切だよね　四話越しの改名&山の主く（前

どうも、M r . Xです。

P V 1 0 0 0 0 突破あああああ！！！！！！

ありがとうございます！ほんとにありがとうございます！

こんな駄文をここまで見てくれる人がいるとは・・・作者の足元には嬉し涙の水溜りができております。感謝のキワミであります。マジで。

さて、嬉し泣きしたところで、第四話　く名前つてどこの世界でも大切だよね　四話越しの改名&山の主くをお楽しみ下さい

第四話　く名前つてどこの世界でも大切だよね　四話越しの改名&山の主く

俺が真実（前話の最後）に辿りつく前の話だ。俺は「破壊を司る程度の能力」を把握するためにヤケクソになつて試行錯誤した結果・

・
・
・
バカみたいに強力で、けつこう便利な能力だという事が判明した。

俺の能力は文字通り“破壊”を司る。具体的に何が破壊できるのか、それを追求した。

結果からいうと“何でも”破壊できる。そう、“何でも”だ。

例えば、“空間”や“概念”を破壊することが出来る。“空間”を破壊するのはメチャクチャ便利だ。何故かつて？例えば二本の木があつたとする。その間には空気云々の前にまず“空間”がある。それを破壊すれば？木と木の間には何もなくなり、その間はない状態になる。ぶつちやけた話、瞬間移動みたいなものだ。自分と目的地の間にある“空間”を破壊すれば瞬時に目的地にいけるからな。

次に“概念”の破壊についてだが、これが一番強力で一番恐ろしい力だと思う。“概念”というのはいろある。不老不死や時間、果てには種族的な概念まである。俺はそれらを破壊する事が出来る。どういうことかつて？例えば、人間に対し「人間である」という“概念”を破壊すると、破壊された人間は「元人間」になる。「人間の存在意義」をもたず、唯^{ただ}そこに存在するだけの人形と化す。怖い

だろ？それに加え、俺は「存在している」という“概念”すら破壊できる。どんな事かは自分で想像してほしい。ヒントは「存在」だ。ちなみに木やらなんやらの「物」や「生物」も破壊できる。妖怪や人間も例に漏れず、だ。試してみたのかつて？そりゃ試さなきゃわからんでしょうが。前も言ったとおり、生きていくためにはかつての同族も殺して喰わなきゃいけないんだよ。

ちよいと話がずれるが、この世界の妖怪と人間の間には一種の“理^{こと}”がある。それは、「妖怪が自らの存在意義のため人間を襲い、人間は自らの繁栄のために妖怪を討つ」という言わば「殺し、殺される関係」がある。

もし、妖怪が増え過ぎて人間が食い尽くされたら？妖怪たちは存在意義を失い、やがてその妖怪すら姿を消し、地上には動植物以外何も残らなくなる。

もし、人間が増えすぎて妖怪が討たれすぎたら？人間は繁栄への抑止力を失い、暴走し、拳句の果てには自らのした行いで自らを破滅へと導くだろう。

人間と妖怪のバランスが取れているからこそ、どちらも行き過ぎることなく安定するのだ。もし、どちらかがその“理”を破壊しようとするのならば、俺はそいつを殺す。妖怪として在るために、また、自らの命のために。前も言った様に、俺は「戦いに生き、戦いに死ぬ」つもりだ。それ以外の「死」を持つてくる奴はたとえ神だろうとぶち殺す。

「さ〜て、次は何をする………あ！」

しまった。大切な事を忘れていた。何かつて？名前だよ！名前！前の奴を使えばいいって？それが、この数百年間自分の名前を使う機

会がなく見事に忘れてしまったのだよ。忘れるって怖いね。能力使って「忘れたという事実」を破壊すれば思い出すんだろうが、いかんせん自分に使った事がない。ハッキリ言って自分自身すら破壊されそうな気がする。

「いつそのこと新しい名前にでもするか。」

土蜘蛛になったせいか人間の時の髪の毛が赤くなつたし、身長も結構高くなった。もはや俺は別人だろう。これを機に名前も変えて心機一転するいい機会かもしれない。

だがどうする？元の名前を参考にしようにも記憶のどこかに行方不明になっちまったしな。妖怪の名前？何か創造神？の手紙には俺は土蜘蛛ではないとか書いてあつたしな。もしかして俺って一人一種の妖怪？

「だとしたら俺の名前〃妖怪の名前でいいか。
でも土蜘蛛ではないんだし、どうするかな。」

俺はけつこうこの「土蜘蛛」という響きが気に入ってる。特に「蜘蛛」のところが。だからそんなに変えたくはない。だとしたらどうしたらいいか……。

「狂ってるから狂蜘蛛？……何かやだな。土だから逆に空蜘蛛？……なんだそりゃ……天？読み方はどうなるんだ？あまぐもか？却下に決まってるだろ。」

俺の性格……戦闘狂で、相手には容赦しなくて。そうだ、鬼蓄とか呼ばれたりしてたな。……鬼？

「鬼蜘蛛……いいんじゃない？よし、今日から俺は鬼蜘蛛だ！」

某炎の妖精の富士山宣言みたいに叫ぶ。なかなかいい響きだったぜ。

大妖怪鬼蜘蛛^{すなわち俺}の誕生であつた。

自分でつけた名前に有頂天になっていた俺は、気のおもむくままに山にいる妖怪を張り倒していった（殺してはいない）結果、この山の主人的存在になってしまった。どうやら妖怪の世界は強者が弱者を支配する弱肉強食の世界らしい。っていつかそれ以外だったら俺の妖怪へのイメージが崩れ去るぜ。

今？今は手下の妖怪どもと宴会の真っ最中だ。今回は、近くの村を襲つて手に入れた食料や酒でバカ騒ぎをしている。

「鬼蜘蛛様！貴方に飲み比べ勝負を申し込む！」

「やめとけて！この中に飲み比べでウチの大將にかなう奴なんかいねえって！」

「やってみなければわからないじゃないですか！」

「お前、この前もおんなじこと言つて俺にボロ負けしたじゃねえか

「大将は俺の倍は飲むぞ！」

「おい、それは違うぞ夜天丸。俺はお前の十倍は飲む」

「なら、楚天丸に勝ち目はねえな！」

ギヤハハハハハハハ！！

紹介しておこう。こいつら、夜天丸と楚天丸は牛鬼ぎゅうきの兄弟で俺が来る前はこの山を支配していたらしい。だが、俺がこいつらを張り倒したために俺が山の支配者になったわけだ。ちなみに夜天丸が兄で、楚天丸が弟だ。夜天丸は筋骨隆々のワイルドな男といった感じで、楚天丸は無駄の無い体つきのさわやかイケメンといった感じだ。

まあ、俺にはかなわないにせよ、こいつらは相当な強者だ。能力持ちじゃないのにそこらの半端な能力持ちなら軽く潰せるだろう。なんせ俺がちよつと本気を出したくらいだからな。まあ、人間状態の時の話だが。さすがに土蜘蛛めうしひよんで本気を出すと山が崩れかねん。

「だあああもう！勝負です！今度こそ貴方に勝っている所を見せてやるんですからねええええ！！！」

「ハッ！いいだろう。負けたら俺たちの前で裸で踊ってもらうぞ。」

「よっしゃ！俺は大将に賭けるぜ！」

「兄さん！弟には賭けてくれないんですか！この薄情者！」

「賭けるも何も、既に負けが決まっているお前にかける奴がいるのかどうか心配だぜ、兄は」

違いない！

ヒヤハハハハハハハハハハ！！！！

「むきいいいいいい！！！！」

楚天丸は見た目に反して負けず嫌いだ。ちなみに楚天丸のリベンジには負けたことが無い。当り前だ、生まれて百幾つしかたってない若造がもう数百年を過ごした俺にかなう道理など無い。

夜天丸は俺を「大将」と呼呼んでついてきてくれる、手下どもの纏め役だ。もう既に俺の右腕といっても過言じゃない。・・・楚天丸も充分有能だが。

今までに味わった事が無い、「仲間」という関係。生前の関係はほとんど暴力だとか恨みだとかで構成されていた。だが、今はどうだ？ それらに比べるとなんと良い事か。今まで俺は「独り」が一番いいと思っていた。馴れ合うには、世界は俺に理不尽すぎると。しかし、この世界は俺に理不尽ではないらしい。何より今まで一番遠ざけ、一番欲しかった「仲間」ができたのだから・・・。

ちなみに飲み比べは俺の圧勝だった。その後、楚天丸の裸踊りでまた全員で爆笑していた。

第四話　く名前つてどこの世界でも大切だよね　四話越しの改名&山の圭く（後

どうでしたでしょうか。オリキャラ登場です。

ちよいと後半シリアスっぽくなっていましたが気にしないで下さい。

さて、もし読者の皆様の中で

「このキャラを出してくれ！」

「こいつを鬼蜘蛛とからませて！」

なんていうオリキャラがいましたら、どしどし書いていってください。物語の中で何とか捻じ込む様に努力しますので。

意見・感想・批判等、待っております。このへボ作者にボロクソ言っても構いませんのでどうかお願いします。

それでは次回の　第五話　くえ？本気出しているの？マジで？　鬼蜘蛛VS鬼神くでお会いしましょう

ではノシ

主人公紹介（前書き）

朱さんの要望がありましたんでプロフィール的なものをのせときます。

主人公紹介

この内容は、最新話の鬼蜘蛛さんの概要です。ネタバレが嫌いな方は、『嫌いなこと』の次にある『最近』を飛ばすことをおすすめします

〈主人公紹介〉

名前：鬼蜘蛛

性別：男

種族：妖怪・鬼蜘蛛（土蜘蛛の亜種）

容姿：赤い髪の毛に射殺するような眼をしている。そのせいでクールに見られがちだが、そうでもない。割りとイケメン。妖怪化の影響で背丈まで高くなった。（190位）髪の毛の色もその影響

格好：ぬらりひよんの孫の土蜘蛛の着物がそのまま人間サイズになったようなもの。

性格：自他共に認める“バトルジャンキー戦闘狂”。酒と煙草キセルが好き。

前世で異常なほど理不尽な事にあつてきたため、精神は割りと頑丈。どこか達観している様子もある。

戦いが好きでしょうがない。毎日妖怪達と喧嘩している。
鈍感である。

趣味：酒 煙草 喧嘩 楓いじり

好きな事：喧嘩 宴会 酒 煙草

嫌いな事：永琳の薬の実験台になる事 楓に泣かれる事

最近：自分と結構歳が離れているものに対して、心が読めるようになったらしい。要は年の功

鬼神の、娘を自慢したい気持ちがあるものすごくわかったらしい。

主人公紹介（後書き）

これについては、話が進むほど増えていく予定なのでそのたびに随時改訂していきます。

第五話　くえ？本気出しているの？マジで？　鬼蜘蛛VS鬼神（前書き）

どうも、Mr.Xです。

時間が取れない＋書きたいことが多かったために此処まで長引いてしまいました。本当にすみません。

では、そんなダメ作者が死に物狂いでかいた　第五話　くえ？本気出していいの？マジで？　鬼蜘蛛VS鬼神　をお楽しみ下さい。

第五話　くえ？本気出しているの？マジで？　鬼蜘蛛VS鬼神く

あれから結構過ぎた。今、俺は日課である手下の妖怪＋牛鬼兄弟と山全体で喧嘩をしている。もちろん人間verでだ。構図は俺一人VS牛鬼兄弟と妖怪達だ。それでも俺は負ける気はしないがな。ちなみに俺が山の支配者になったときから続けているが、負けたことがない。今でも、既にあらかたの妖怪はぶっ飛ばし、牛鬼兄弟だけだ。その牛鬼兄弟も俺の攻撃に防戦一方となっている。

「おらおらあ！その程度なのかあ！？」

「その程度ってなんですか！貴方が強すぎるんですよ！」

「大將はどっかおかしくなってるかい？いまさうだけどなんでこんなに強いのか？この人」

「そんな事はいから集中してよ兄さん！」

「そら、余所見は禁物だぞ」

「うぎゃ！？」

夜天丸に注意が言った楚天丸に蹴りの一撃を加え、体勢が崩れた所にもう一発拳を叩き込もうとする。
が、

「どおりやあああ！！！！」

夜天丸がその隙を付いて俺の顔面めがけて殴りかかってくる。無視

するわけにもいかずそれを防ぎ、お返しにと腹に一発。夜天丸が吹っ飛んだところで視界の端に体勢を整えた楚天丸が映る。

「なかなかやるようになったじゃねえか。面白れえ。」

「そりや今までこれと同じことをやってくれば嫌でもこうなりますよ」

そうだろうな。こいつは、いわば超ハードすぎる修行を毎日毎日ずくっとやっているようなもんだ。そのおかげで夜天丸と楚天丸は二人がかりといえども俺とやりあえるようになり、そのほかの雑魚だった妖怪達は俺の一撃を最低でも一回は受け止められるようになった。要するに、雑魚ではなくなったということだ。その辺の有象無象の奴らだったら一捻りできる。

「鬼蜘蛛様。重ね重ね言いますが……お願いですから少しは手加減してください！こっちは必死にならなきゃいけないんですよ！？これじゃいつ死ぬかわからないじゃないですか！」

だろうな。俺との喧嘩は命がけだ。少しでも気を抜いて臨んだりしたら、開始数秒後には潰されるだろう。物理的な意味で。

だが

「馬鹿野郎！手加減したらつまらないじゃないか！」

そうだ。殺し合……。失礼。喧嘩は楽しむためにあるんだ！つまらなかったら意味がない！

「この鬼畜！」

久しぶりに鬼畜と呼ばれたな。確か、最後に呼ばれたのが前の世界で……何人だったかな？とにかく集団で俺に向ってきて、返り討ちにして、土下座してきた奴の頭を思いっきり踏んづけた時だったかな。

「楚天丸、大将にそんなこと言っても無駄だということが何時^{いつ}になつたらわかる？このやり取りは何回目だと思ってるんだ？」

昔の事を思い出していたら、いつのまにか夜天丸が起きてきて楚天丸の隣に立ってそんな事を言い出した。けっこう力入れて殴ったつもりだったけどな。前だったら絶対そのまま気絶していただろうな。つか数えてたのか？

「何回目だ？」

「今のでちょうど750回目ですよ、大将」

マジで数えてやがった。どんだけ暇だったんだよ。

「まあいい。750回記念だ、俺の本気「御館様^{おやかたさま}、お耳に入れたいことが」……なあ鬼童丸よ。喧嘩の最中に能力使っていきなり出てくるなって前も言ったよな？」

「ええ。しかし緊急の用件ですので」

こいつは鬼童丸。つい最近この山に来た妖怪であり、俺と同じく種族と名前が一緒だ。能力持ちの妖怪であり、能力名は

「どこにでも存在する程度の能力」

俺程ではないが、充分強力な能力だ。普段は能力を使って山全体の監視をしている為あまり見る事は無いが、俺との喧嘩のために存在を一点に集中させた時の力は強大だ。どれくらいかというと、ちょっと本気を出した俺と単独で張り合える。牛鬼兄弟ですら二人がかりでやっと張り合える位なのだから、その強さはわかると思う。

じゃあ、なぜそんなに強い奴が俺のところにいるかだ。（俺は喧嘩できるから万々歳だけど）鬼童丸位だったら、自分が他の妖怪達を束ねる立場に簡単になれるはずなのだ。

何でも、鬼童丸は「束ねる立場」よりも「仕える立場」の方が性に合っているそうだ。どこの武士だよと俺は思うね。

それで自分が仕えるに値する主を長年探して旅をしていた結果、俺のところに来て、ボコされて、それ以来俺に忠誠を誓っている。ちなみに、長い間旅をしていたためか知識が豊富だ。そのため俺の相談役的な位置にいる。比較的新参でも実力は俺に次ぐので、手下どもは言う事を聞いてくれるからやり易いだろう。

容姿はぶつちやけた話、あの鬼童丸とそっくりだ。つかそのものだ。

「で？用件とは何だ？わざわざ俺の楽しみを中断させる程重要な事なんだろうな？」

「はい。鬼神が率いる鬼達がこの山に向ってきています」

「鬼神？鬼の王が一体何のようだ？」

「御館様と単純に戦いに来たか、この山を奪いに来たのでしょうか。どちらにせよ、御館様は戦う事になるでしょうね」

戦うのはいい。妖怪の中でも生粋の戦闘種族である鬼が相手なら満足できる可能性がある。あくまで可能性だな。

「その鬼神つてのは強いのか？」

「たしか、歴代の鬼神の中でも最強といわれていたはずですよ。」

ほう、最強ねえ。可能性が100%に一気に近くなったな、面白そうだ。だが、俺が支配する山に入れるかどうかは別問題だ。

「鬼童丸」

「はっ」

「いつも通り“理”について問え。正解なら入れろ」

「不正解ならば？」

「お前に任せる」

「御意」

返事を残し、また存在を拡散させる。便利だよな、あれ

さて、今宵は祭りだ。存分に楽しむとしよう。

SIDE鬼神

ある日、俺の耳に噂が入ってきた。その噂とは

「向こうの山に強大な力をもった妖怪の王が現れ、山周辺の妖怪達を瞬く間に支配した」

というものだった。

いつもなら噂程度なんか見向きもしないが、このときばかりは違った。噂はそれだけではなく、事実を伴って流れてきたのだから。

「鬼童丸が妖怪の王に降った」

鬼童丸といえば、幾多の実力を持った妖怪達を悉く葬り去った「放浪する妖怪將軍」の二つ名をもった真正正銘の大妖怪だ。その鬼童丸を倒し、そのうえ自分の配下に納めたのだ。是非とも戦ってみたい。

それに、今住んでいる山は先代から受け継いだものであつて自分で勝ち取ったものではない。その王と戦って勝てば、王が所有している山が俺の物になる。やはり、自分のものは自分で取ってこそ価値があるというものだ。

「お前ら、妖怪の王とやらに会いに行くぞ。ついでに山を貰いに行く。」

俺は四天王の前で宣言する。どうやらこいつらも興味があったらしく乗り気だ。最年長の四天王が

「この山はどうするつもりだ？」

と聞いて来たもんで

「捨てる。負ける気は無いから、貰った山にそのまま住む。」

といったら納得してくれた。俺が歴代最強の鬼神だということも根拠のうちに入ってるんだろう。さて、そうと決まればすぐ行こう。

「全員を集める。妖怪の王と戦争しに行くぞ」

どちらが最強か決めようじゃないか。

鬼達をつれて歩く事一日。ようやく目的地である山に着いた。着いたまではいいんだが、何か得体の知れない気配がまるで侵入者を拒むかのように二山全体を包んでいるため、入る事を躊躇っているのが現状だ。

「どうするのですか？」

四天王の一人が聞いてくる

「どうするも何も此処まで来たならいくしかねえだろ。俺は行くぞ」

そういつて、山に足を踏み入れる。他の鬼達も続いて入ってくる。

「っ!？」

すると、途端に今まで得体の知れなかった気配が明確でいて莫大な妖気となって俺達を包み込む。おそらく、何者かが山の至る所にいるのだろう。そして、同時にこんな巨大な山の周りに存在できる奴を俺は一人しか知らない。

「鬼童丸か・・・」

<その通りですよ、八ヶ岳の鬼神殿>

俺の呟きに答えが返ってきた。鬼童丸の声は四方から響くように聞こえてくる。やはり俺の推測は正しかったようだ。

<して、この山になんの用ですか？>

明らかにこちらの考えを見透かした上での質問だ。鬼が来るといえば目的なんざすぐわかる。

「お前さんの考えている通りだ、妖怪將軍。お前達の王と戦いに来た。ついでに山も貰いに」

「そうですか。ではまずこちらの問いに答えてもらわなければこの先に行く事はなりません」

「問い？」

「ええ。貴方にとって、人間と妖怪とはどんな関係でしょうか？>
関係？人間と妖怪との？

「御館様が何よりも大事になされている“理”のことですよ」

“理”だと？そうすると世界のあり方の事か？そんなもの決まっているだろう。

「妖怪は人間を襲い、人間はいつしか妖怪を越える。だから我ら鬼は人間を攫い、人間に討たれている。それだけの話だ」

これは、先代から受け継がれてきた鬼の意思。誰であろうと覆す事は出来ない鋼の掟だ。俺はそう断言する。

すると、山全体を覆っていた妖気が俺の目の前に集中し、いつの間にか存在感を湛^{たた}えた一匹の妖怪と化した。

「合格です。では、御館様の所に案内しましょう」

そう言つて、鬼童丸は俺達を先導するように歩き出した。

SIDE三人称

鬼蜘蛛は奮えていた。何よりも、完璧といえる答えを出した本物の妖怪の魂を持った鬼がおり、それに加え、これから出会うことがあるかどうか知らない位の強者ときた。自然と体が、魂が、血が全て奮えている。山の広場にある切り株に座つた、人間の姿をした妖怪の王は早くこいと言わんばかりの威圧感を醸^{かも}し出している。

「早く戦いてえなあ……。鬼童丸はまだ来^こねえのかあ？」

鬼蜘蛛の狂気を湛えた眼を向けられた牛鬼の弟は震える。その眼はかつて自分達兄弟と戦つた時の眼であつたからだ。その戦いは、軽く彼のトラウマになっている。それを思い出し、頭を抱えてブツブツ言い出した弟に代わつて兄が答える。

「もうそろそろですよ。大将、興奮するのはわかりますがあまり楚天丸と眼を合わせないでやって下さいよ」

「なんでだ？」

「俺らが大将とやったときの光景が頭の中に出てきて押しつぶされそうになるんですよ、楚天丸は」

冗談抜きで大将は怖いんですよ、と続け苦笑する。

「お前は？」

「俺は楚天丸と違いますからね。凶太いんですよ、ここが」

そついいながら心臓の部分を親指で指す。周りにいる妖怪達が笑いを漏らし、雰囲気が多少軽くなった。が、その雰囲気はすぐに破られることになる。

「御館様、お連れ致しました。」

「お前がこの山……いや、妖怪の王か？」

見れば、いつの間にか鬼蜘蛛の傍らには鬼童丸ひこぎわがおり、十メートルほど離れた場所には無数の鬼を従えた一際大きな体躯をした鬼がいる。その事に気がついた夜天丸以下全員は一気に緊張を走らせる。
・・相変わらず楚天丸は頭を抱えたままだが。

「妖怪の王なんてもんは知らねえが、この山の主と同義なら俺のこ
とだ。」

「お前と戦いに来た。ついでに山も貰いに来たぞ」

「そつかい」

そう答えた鬼蜘蛛は立ち上がり、一気に妖力を解放する。

「我が名は鬼蜘蛛。万物の破壊を示す者也」

鬼神もそれに呼応して自らの力を高める。

「我は鬼神。八ヶ岳の鬼の王也」

そこには、久方ぶりに本気を出せる事に喜んでいる王と、同じくこれから始まる戦いに歓喜している鬼がいた。両者の目には既に他の妖怪達は映っていない。映るのは、自分と同等の強者のみ。

「いざ」

人の形の妖怪王が

「尋常に」

比類なき鬼の王が

「勝負っ！！！！」

ぶつかり合う宴の幕が上がった。

「ヒヤハハハハハハハハハハ！！！！！！」

ズガアアアアアン

「うわはははははは！……！」

ドゴオオオオン

辺りに王達の哄笑と、彼らが撒き散らす破壊の音が響き渡る。一撃で大地を削り、声が響き渡る度に妖怪達は身を震わせる。

そこには、既に「化け物」という枠ですらぶち壊した者同士の壮絶な「戦争」だった。

「ひつつさしぶりだぜええええ！！！！こんなに楽しいのはよお
おおおお！！！！」

「俺もだあああああ！！！」

両者の拳が交差し、互いの顔面に突き刺さる。圧倒的な物量がある拳を受けても平然としている化け物達は、普通そのまま吹っ飛ばはずなのにそこで打ち合いを始める。

「うおおおおおらああああ！！！！」

拳が、足が、頭が、悉く相手に当たる。やがて押し負けた鬼神が吹っ飛ばされる。妖怪側から歓声が、鬼側からは唸り声が聞こえてくる。しかし、何事も無かつたかのように起き上がってくる鬼神を見る。

て今度は逆に鬼たちが歓声を上げる。

そんな中、鬼蜘蛛と鬼神は眼を合わせ、互いにニヤリ、と笑う。再び両者は地を蹴り、肉薄する。

宴はまだまだ終わらない

SIDE 鬼蜘蛛

あれからどれ位打ち合っただろうか。やはり歴代最強というだけあって強い。さすがに全力を出したら負けるだろうが、そんな事をするつもりが無い。あつたなら開始直後に終わっている。

俺と鬼神は、壮絶な打ち合いをもう何百回もやった。たいていは俺が押し勝つのだが、鬼神も負けじとやってくるおかげで二人ともボロボロの状態だ。

「面白れえなあ。やっぱり喧嘩はこうでなくちゃなあ。」

「同感だ」

同じようなやり取りをもう何回しただろうか。お互いボロボロにできるほどの相手がいなかったせいだろう。一気にこの場でその不満を晴らしている。

「らア！」

俺は距離を詰め、鬼神の急所に蹴りを叩き込む。鬼といっても体の構造は人間と同じだ。急所に最小限の力で最大限の力を発揮できるように攻撃を叩き込むなんざ簡単なこつた。

「グウ！？」

既に俺以上にボロボロになっている鬼神は避け切れずモロに喰らってしまい、仰向けに横たわる。最初の方なら簡単に避け切れたはず何だかな。

「これで終いだ」

地面に横たわった鬼神の顔面に思いつきり拳を振り下ろす！

（勝った！）

そう思った瞬間、鳩尾辺りに強烈な衝撃が来る。俺はそのまま吹っ飛ばされ、背中から満足に受身もとれずに地面に衝突した。

「ガハッ」

鬼神の方に眼を向けると、どうやら仰向けの体勢から蹴りを喰らったらしい。足を振り上げた状態から起き上がるのが見えた。

「最後、大振りになってたぜ鬼蜘蛛。喧嘩するなら最後まで気を抜いちゃいかんぞ」

「カツ、鬼に説教されるたあな。俺も落ちたもんだ」

そうだ。昔なら最後まで気を抜く事は無かったんだがな・・・

「まあいい。お互いボロボロだろう？次の一撃で勝負を決めようや」

「もうちょつと続けたかったけどな・・・こんなんじゃ無理だろう。乗った」

お互いの拳が届く所まで歩を進める。そして、射程圏内に入ったところで歩を止める。暫くの間、鬼神と眼を合わせる。そこには、俺と同じく歓喜の色が見て取れた。

「鬼神んんんんんんん！！！！！！！」

「鬼蜘蛛おおおおおおお！！！！！！！！」

互いの全力で互いの顔面に拳を突き出す。拳が鬼神の顔面に当たった瞬間、俺の顔にも衝撃が来る。

「「おおおおおおおおお！！！！！！！！」

顔に拳が刺さったままで、鬼神を殴り飛ばそうと力を込める！次の瞬間、顔に当たっているはずの拳の感触が無くなる。

ドガアアアアアアア！！！！

盛大な衝撃音と共に鬼神が吹っ飛ばされる。そのまま十数メートルほど吹き飛び、地面を転がる。起き上がっては・・・こない。

「・・・・・・・・」

暫く俺は殴り飛ばした直後の格好のまま硬直していたが、そこから構えを解く。久々の充実感が俺の体を支配している。
俺は大きく息を吸い込み、そして

「うおおおおおおおおああああああああああ！！！！！！！！！！」

吼えた。

第五話　くえ？本気出していいの？マジで？　鬼蜘蛛VS鬼神（後書き）

戦闘描写については突っ込まないで下さい。あまりにも酷いと自覚しているのです。

そして、投稿するまで長引いてしまったのにこんなに駄作ですみません。もう土下座者です。

意見・感想・批判・批判・批判等待着っておりますので、よろしくお願いします。

では次回の　第六話　く戦闘狂に効く薬なんてあんのかな？　賢者と王く　でお会いしましょう。

ではノシ

第六話　く戦闘狂に効く薬なんてあんのかな？　賢者と王（前書き）

どうもMr.Xです。

親の目をかいくぐり、時間を見つけて書いたのであんまり内容が濃くない　第六話　く戦闘狂に効く薬なんてあんのかな？　賢者と王　くをお楽しみ下さい。

本当に長引いてすみません。土下座物です。

第六話　く戦闘狂に効く薬なんてあんのかな？　賢者と王く

鬼神との大喧嘩から十数年がたった。俺は凄まじいまでの回復力で、翌日にはまた喧嘩をしていたが、鬼神のほうは結構時間がかかった。完治するまで山においておくという約束で鬼達を山に帰らせようとしたんだが、どうやら鬼神は山を捨ててきたらしい。俺相手になんていう自信だよ。あ、そんな時はまだしらねえか。

主が居なくなつた山の様子を一度鬼童丸に能力で見てもらつたんだが、何者かによつて爆破されたらしい。鬼童丸によるとどうやら神が絡んでいるらしい。・・・創造神じゃねえだろうな・・・。

そんなこともあつて鬼神率いる鬼たちは俺の山に住んでいる。俺の配下の妖怪達ともだいぶ打ち解けてきた。なんせ自分達の主同士が毎日酒を酌み交わしているからな。打ち解けないとやってられんだろう。

「鬼蜘蛛、鬼蜘蛛！見てこれ可愛くね？俺の娘！」

「可愛いのはわかつたから落ち着けコラ」

最近の事だが、鬼神に子供ができた。あいつには勿体無いくらいの美人な嫁さんとの間にだ。それ以来、俺に一日一回は見せに来るし、多い時なんか十回くらい自慢された。いい加減うつとおしくなってきた今日この頃。

「だってよお、お前、娘に『父様大好き』っていわれたら俺、俺、」

「いい加減にしろ。その娘がビクリしてるじゃねえか」

「なに！？おい鬼蜘蛛！お前何をした！」

「お前だろーが！」

「ち、父様？兄様？あにさま」

俺たちの似非漫才（鬼神は本気）を見てオロオロしている十四歳くらいの美少女。名前は楓。かえでなぜだか俺のことを兄様と呼んでいる。ちなみに鬼童丸は「おじ様」だ。俺の方が歳をくっているのにな、見た目が俺よか老けてるからな。その事を笑って指摘していた楚天丸がいつの間にかスタボロになっていたのはいい思い出だ。

「なんだ？楓。父さんはこの馬鹿蜘蛛にお仕置きしなきゃいけないんだ」

「アホか。お前、俺に勝てたことあんのか？つゝか元はお前だろ？」

「うるせえ！そんなことはど「なにをしてらっしゃるの？あなた」
・
・
・」

いつの間にか鬼神の後ろに笑顔で立っている嫁さん。だがその眼は笑ってない。おそらく今、鬼神はかつて俺が一回だけ本気で殺しかかった時と同等かそれ以上の恐怖を感じているだろう。

「ナ、ナンデモアリマセンヨ？」

「あら、そう。実は私、あなたにお話があるの」

鬼神の体に冷や汗が滝のように流れている。視線だけで俺に助けを

求めているが、当然無視。楓が俺の着物の裾をつかんでくっついて
いるのを見て、俺に殺意のこもった眼差しを送ってくるが、すぐに
嫁さんの声に怯えた色が映る。

「楓を勝手に連れ出して、この山の主である鬼蜘蛛さんに迷惑をか
けて、ほ・ん・と・うに何にもしてないの？」

「……………退却！」

「うお！？」

俺が一瞬見失うほどの速度で山の奥に駆け出す鬼神。虚を突かれた
せいで反応できなかった俺に対して、嫁さんはそれはもう驚きの速
さで回り込んだ。

「フツ！」

「<ドスウ！>フギヤ！？」

綺麗に正拳突きを鬼神の腹に叩き込み、一発で気絶。正直鬼神よか
強いんじゃないの？

「それでは、失礼します。」

「はいよ」

「あ、母様待つて！」

鬼神を肩に担いだ美人鬼嫁そのまんまとすぐそばについていく少女。うーん、
シニールだ。後姿が山の奥に消えていくのを見計らったように一匹

の妖怪がそばに現れる。

「鬼童丸か」

「はい。言いつけなされた事に関しての報告でございます。」

言いつけ、というのは俺の“狂気”に関してだ。知つての通り、俺は戦いに狂っている。その狂気は、戦いに満足すれば発散されるんだが、満足するほどの力を持つ相手が鬼神だけという現状の中で、着々と狂気が俺の中に溜め込まれている状況にあるのだ。以前、溜め込みすぎて鬼神との喧嘩の時に俺の意思が狂気に飲み込まれた事件があつた。死者は出なかったが、相当な被害を自分で作り出してしまったのは事実だ。

俺は喧嘩が好きだが、それは自分の意思で戦うから面白いんだ。狂気に支配されて喧嘩するというのは癪だ。かといって他の妖怪達が急激に強くなるわけでもない。そこで考えたのが、外部からの干渉で狂気を抑制するというものだ。簡単に言うと、薬かなんかでストレス発散！みたいなかんじだ。

「この山、及び周辺にはそのような物は有りませんでした。」

「そうか・・・」

これくらいの規模の山だったらあつたかと思つたけどな・・・

「しかし」

「ん？」

「最近、異様な速度で発達している人間の村・・・町といったほうが正しいでしょうか、ともかくそこに「天才」と呼ばれる医師がいるらしいです。その医師に頼めば、どうにかなるかと。」

天才、ねえ。期待させてくれるじゃないの。ちなみに、俺が転生者ということとは鬼童丸だけに教えた。異様な速度、という表現も俺が元いた世界について話してやったからだ。どうやらこの世界は元の世界と酷似、あるいはそのものかもしれないな。

「じゃあ、そこに行くかね。思い立ったが吉日だ。鬼童丸、お前は此処に残って夜天丸の補佐と楓の教育をやつてろ。鬼神には俺の代わりをやらせとけ。楚天丸は・・・まあ、適当にこき使え。」

「承知。……どれ位離れるおつもりで？」

その疑問はもつともだわな。たかが薬を貰いにいくだけで細かい指示をするなんざ訳わからんだろうな。しかし！特に理由は無い！

「これを機会に最近の人間のやり方をみてくる。そうすりゃ襲うときに楽だからな。」

「建前は宜しいですから、御館様の真意を」

やはり鬼童丸は優秀だな、俺の思考が読めるとは。俺ビックリだよ。

「気が向いたら帰ってくる。」

はあ、という溜息をつく鬼童丸。妖怪って存在は、常に自らの気分で動くものだよ。なんとなく、きまぐれに。それが恐怖を根本とする妖怪の本質なのさね、だてにお前さんよりも長い事生きてな

いよ。

歩く事半日。ようやく「天才」がいるという町に着いた。着いたんだが・・・

「これ町っていうか都市じゃね？」

なにこれ、発展しすぎだろ。三百年前ぐらいには竪穴式の住居だったのに今では平成もビックリみたいな街並みが並んでやがる。具体的に？手塚治虫が書いた某ロボット漫画の舞台みたいな都市だ。もうこれ未来都市だな。

「さて、噂の天才に会いに行くとしますかね。」

自らの妖力を一時的に破壊し、一般ピーポーに成りすます。案外上手くいったみたいで、怪しまれずに済んだぜ。

町中を歩く人間に尋ねると、一人目で簡単にわかった。どうやら結構有名らしい。

「ここか・・・」

周りの家よりも一際大きい家。表札には「八意」とある。町で聞いたのと同じだ。

インターホンのものを押し、暫く待つと中から一人の美人さんが出てきた。

「なんでしょうか？」

「ちよいと薬を貰おうと思ってね。あんたの噂を聞いて遠くからやってきたのさね。」

「そうですか。　なら中に入って下さい。」

家の客室と思われるところに通される。そこで暫く待っていると、なにやら弓を持ったさっきの美人さんが俺に矢の先を向け、殺気をぶつけてくる。・・・ばれたか？さすが天才。

「もう一度聞くけど、何のよう？妖怪。嘘をついたら・・・」

殺す、と無言の圧力をかけてくる。そんじょそらの妖怪ならたまらずに逃げ出すぐらいの圧力だ。だが、俺には通じない。

「さっきも言ったとおり、薬を貰いに来ただけだ。別に襲おうなんて考えてねえよ。」

俺の言葉に嘘の気配が感じられないのか、若干殺気が弱まる。だが、俺が妖怪ということも手伝ってかまだ警戒の気配は解かれない。

「本当に？」

「本当さね。第一本当に襲うつもりならばれた瞬間に殺そうとする

だろう？」

俺の言葉に納得した様子の美人さんは、弓を下ろして謝ってくる。

「ごめんなさいね、誤解して。」

「いやいや、普通妖怪が尋ねてきたらああいう反応を示すだろう。別に気にしてない。」

「ならいいけど。私は八意永淋、見ての通り薬師よ。」

鬼童丸め、医師じゃなくて薬師じゃねえか。まあそんなことはどうでもいい。名乗られたら名乗り返さなくちゃな。

「俺は鬼蜘蛛。見ての通り妖怪さね。」

俺が名乗ると、永淋の目が見開かれる。何にそんなに驚いてるんだ？

「鬼蜘蛛・・・もしかして妖怪王鬼蜘蛛？」

妖怪王？俺ってばそんなに大仰な二つ名がついちゃってるのか？まあ、王というのもあながち間違っではないがな。この辺に住んでいる妖怪達はほとんど俺の配下になっている。原因は、俺が強い妖怪どもに悉く喧嘩けんかをうり、勝利してきたからである。

「ああ。それたぶん俺。」

答えてやったら、何か危ない目つきになった。詳しく言うと新しい研究対象を見つけた科学者みたいな・・・。

「そう・・・で、貰いに来た薬というのはなに？」

永淋に此处に來た理由を話す。俺が狂っていることも包み隠さず、全部。まあ、隠す事なんざ無^ねえんだけどな

「・・・というわけで、狂気を抑制するための煙草を作ってくれ！」

煙草？と思う奴らもいると思うが、何を隠そう俺は煙草が大好きだ！土蜘蛛も作中で煙草を吹かしてたろ？あれを引き継いだかなんかしらねえがとにかく煙草が好きなんだよ！煙草が出来るとはおもわねえけど。ちよつと無茶だったか？

「出来るとは思うけど・・・どれ位使うつもり？」

出来るんだ・・・。

「死ぬまで。作るのは最初の一個だけでいい。後は考えがある。」

「考え？」

つまり、吸い終わった煙草に対して「吸い終わったという事実」を破壊して半永久的に使い続けるという事だ。俺って天才じゃね？

「・・・わかったわ。代金は・・・これくらいね。」

どれどれ・・・！？

「おいおいおいおい！これ0が二つくらい多くねえか！？」

高すぎんだろこれ！とても俺に払えるような金額じゃねえぞ！？

「いいえ、間違っていないわよ。計算したらそれくらい掛かるのよ。それとも？払えないの？」

「うぎっ」

痛いところを突かれる。マジで想定していた金額よりも多かったため、払えるだけの金が手元にない。・・・どうしょ。

「払えないなら・・・体で返してもらうわよ？」

「・・・」

口元に恐ろしい笑みを浮かべる永淋。これって役割逆じゃね？ってそんなことはいいい！このままじゃ俺の体がやばいことになる！（実験的な意味で）かといって煙草を手放すのは嫌だ。どうすりゃいいんだ！？

「どうなの？ん？」

めっちゃ怖い笑顔でにじり寄ってくる永淋。こんなに恐怖を覚えたのって初めてじゃね？

「・・・どうにもしゃがれ」

妖怪の王が一人の人間の女に負けた瞬間であった。

第六話　く戦闘狂に効く薬なんてあんのかな？　賢者と王く（後書き）

どうでしょうか。賢者の正体は八意永淋でした。

ほんとにこんなダメ作者の小説にお付き合いいただきありがとうございます。
ざいます。涙物です。

意見・感想・批判等お待ちしています。

あ、主人公紹介のところ少しばかり付け足しておきましたので気が
向いたらみていって下さい。

次の題名は未定です。もしかしたら一ヶ月以上更新できないかもしれ
ないので、ご了承くださいませ。

第七話　く人生で決意する事はたくさんある。それが重いか軽いかの違いだけだ

どうも、M r . X です。

前回であんな事をいつときながら割りと早く更新できました。

それでは　第七話　く人生で決意する事はたくさんある。それが重いか軽いかの違いだけだ。　賢者の決意　少女と王　をお楽しみ下さい。

第七話　く人生で決意する事はたくさんある。それが重いか軽いかの違いだけだ

俺が永淋の実験道具になってから早一年、八意家に居候し思い出し
たくないくらいの日々が続いたぜ。正直死にそうになったこともあ
ったくらいだ。今？今は数少ない自由時間だ。一日の大半が新薬の
実験やら俺の力の解析やらに消えている今の俺の生活の中では貴重
すぎる時間だ。

「すうゝ・・・ぷはあゝゝゝ。やっぱり煙草はうまいな、気分がす
つきりする。」

屋敷の縁側でのんびりと煙草を吸う。さっき飲まされた変な薬の不
快感が煙と共に体内から出て行くような心地よい感覚がする。実際
は吸っている煙草の効能なんだけどな。

「ふふつ、貴方って本当にあの鬼蜘蛛なの？信じられないわ。」

いつの間にかお茶を持って隣に来た永淋が微笑を浮かべながらそん
なことを言う。何をいまさら。

「信じるも信じないもお前さん次第だ。少なくとも俺は、俺以外に
鬼蜘蛛の名前を持った妖怪は知らねえよ。」

「そう」

また微笑を浮かべる。ここだけみたらすごい魅力的な女性なんだ
が、俺にしてみればこの笑顔の裏になんかがあると疑わざるをえな
い。

「ときに永淋、俺の薬代の代金はいつになったら完済できるんだ？
もう解放してくれてもいい頃合じゃないのか？」

「あら、まだまだよ。それとも脱走してみる？」

これもまた笑顔でのたまう永淋。怖すぎる。その笑顔が俺には怖すぎる。

「俺はどこぞの妖怪と違って約束は守る。それに、お前から逃げ出したら後が怖い。」

これは本心だ。なまじその辺の妖怪なら簡単に殺せる位の力量があるから、俺の山に突撃して来ないとも限らない。つかまったら最後、死ぬまで実験台になるしか道はないだろう。・・・自分で言つて寒気がしてきたぜ。

山といえば、あいつら元気かな？楓は鬼童丸が目付け役をやってくれているから大丈夫だし、夜天丸もしっかりしている。鬼神は嫁さんが抑えているだろうし、楚天丸・・・まあ大丈夫だろう。よっぽどアホな事しとらん限り心配はない・・・と思いたい。

「ふふふつ、そう。でも、まだまだといっても今作っている薬が完成したらそれで終りよ。」

「・・・不死の薬ねえ。いつ出来上がるかねえ？」

「さあ？貴方のおかげで大分進んではいるけれど、まだ不死の力を得るには至つてないのは確かね。」

不死の薬・・・俺の超回復力に目をつけた永淋が俺の細胞からその

力を抽出して、さらに昇華させて、飲んだ人間に不死の力を宿らせるといふ薬つーかもはや霊薬と言った方がいい代物しろものを今永淋は作っている。俺からすれば、そんなもんがつけられたら人間と妖怪のバランスが崩れるからあまり気分がいいものではない。でも、永淋はそんなことには使わないだろう。以前俺が聞いた“理”の問いにも満点に近い回答をしたからな。この天才なら大丈夫だろう。

ま、今のところは飲んだ対象の生命力を死んでなければ全快まで回復するまでにとどまっている。むしろこの辺でもういいと思うが、永淋は最後までやりたいのと言う。いくら永淋が天才で、俺が規格外の化け物だとしても自然の法則を捻じ曲げるような物を作る事にはいささか無理があるというものだ。俺も、能力でそれを支援する気はさらさらないからな。

「ずずうゝ・・・ふう。酒もいいが、お茶もたまにはいいものだ。なかなか美味い。」

「そうでしょう？これは私が淹いれたんだもの。不味いなんていったら、それこそ薬漬けにするわよ。」

「冗談だとしても笑えねえよ」

「私は本気よ？」

「・・・」

やっぱりこいつ怖い。むっちゃ笑顔だけど目が笑ってないもん。前に一度だけ永淋の言う「薬漬け」にされた事があつたんだが、あれは酷いぞ？逃げられないように強力な麻酔を打たれて動けないところにこれでもかというくらいの新薬を打ち込まれるんだぜ？体が熱

くなったり、頭が真っ白になったり、とんでもない激痛が走ったり、妙に感覚が鋭敏になったりと。とにかく酷い。

・・・ま、ちよいと真面目な話に入りますかね。いつの間にか、月が俺たちを照らしている。早いねえ、もう夜かい。

「はあ。・・・んで？」

「？」

「お前さんらはいつ頃月に行くんだ？」

俺がそういった瞬間、永淋の顔に驚愕の色が映る。その次に警戒したような気配、わずかな殺気。・・・なるほど、よっぽど重要な事みたいだねえ。

「何のことかしら？」

「そういうことは殺気を全て押し殺してから言いやがれ。そんなもん子供でもわかる。」

「・・・なんで貴方が知っているの？この計画は貴方の前では話したことは無いはずよ。」

「永淋、俺が誰だか忘れたのか？小娘一人の考えなんざすぐに見抜けらあ。それとも何だ？たった十数年しか生きてない小娘に俺が出し抜かれるとでも？」

「……そうね、そういえば忘れてたわ。貴方が最強の大妖怪だということを。」

長い沈黙の後に溜息と共に出された言葉。諦めた様な気配。正確には、今までとは違う空気を出し始めた永淋を不審に思った俺が、能力を使って「永淋の全てを知らない」という事実を破壊し、永淋の文字通り「全て」を知った。その中に「月移住計画」という真実を知ったから、俺はあんな事を言っただ。おそらくそれが、変わった空気の真実だと確信したから。

「どこまで知ってるの？」

確認するような口調で話しかけてくる永淋。そこには、さっきの驚愕の気配は無く既に落ち着き払った気配があるだけだ。この頭の切り替え、やはりこいつは天才だ。

「計画を提案した奴、信頼の置ける連中もつれていく事、後は・・・月に移住する理由が、“穢れ”・・・妖力の事だな。それが寿命を自分達にもたらずから。この辺までだな。」

「もうほとんど知ってるじゃないの。」

「いんや、日時とか細かい所は知らねえよ。」

「日時は、来月の最初の満月の日よ。」

「教えていいのか？」

「あら、小娘一人の考えは見抜けるんじゃないの？」

この状況で軽口を叩くかね？俺相手に。やっぱりこいつ可愛くねえな。美人だけど可愛くない・・・仕切り直した。

「永淋、こつからが本題だ。」

俺が真面目な顔をして話しに入る。すると永淋も表情を引き締めて向かい合ってくる。

「なにかしら？」

さて、今からは「居候」としてではなく「妖怪の王」として喋らせてもらおうか。

「月に行くのならば、これまで発展させてきた科学者も連れて行くか、殺せ。」

妖怪王としての圧力を込めた有無を言わせぬ一言。できないのならば、今ここで殺すと言外に言っている。永淋なら容易く読み取れるだろう。

案の定、落ち着いた切り返しをしてくる。

「・・・なぜ？何の理由で？」

「理由？そんなもの簡単だ。人間達は「発展しすぎた、でしょ？」わかつてるじゃねえか。」

「私を甘く見ないでほしいわね。」

発展のしすぎ。それは人間と妖怪とのバランスが崩れる一歩手前の状態。“理”が外れる兆候。それほど今の人間の科学力は行き過ぎたのだ。

「大丈夫よ、その辺もカバーしてある。科学者達は皆月へ連れて行くことがこの前の会議で決まったわ。貴方が恐れているような事は起こる。」・・・え？」

滅多にみられない永淋のキョトンとした顔。どうやら、まったく辿り着いていないらしいな。

「起こるよ。少なくともお前らが月に行く限り絶対に起こる。保障してやるよ。」

「なん・・・で・・・？」

啞然としてやがる。・・・こりゃマジだな。まったく、天才が聞いて呆れるぜ。

「考えてみる、今現在の俺たちの状況を。今、辛うじて人間が“理”を外す一歩手前で踏み止まっている理由を。」

「それは、私達が止めて・・・あっ！」

「そうだ。そのお前達が月に行ってみろ、この地に残された人間は簡単に“理”をぶち壊すぞ。そうしたら、俺は人間どもを皆殺しにしまきゃあ“理”は元には戻らない。それほどの責任を、お前達は背負って行こうとしているのか？」

「・・・」

「・・・その様子じゃあ違うみたいだな。大方、自分達がしてきた事に耐えられなくなって月に逃げ出そうとしてるんだろ。“穢れ”がどーのこーの言うのはただの都合のいい建前。お前さんは騙さ

れてるんだよ、その・・・月夜見たっか？そいつに。」

「じゃあ・・・私はどうすれば・・・？」

真実を知った天才・・・いや、一人の少女は涙目になって俺にすぎるような目で見てくる。まあ、自分達がやろうとしている事の大きさに押しつぶされないだけいいかね。今、初めてこいつが可愛いと思ったな。不謹慎だけど。

そして、こつからは「八意永淋の友人」として喋るかね。

「簡単だ。罪を自覚して死ぬまで責任をもって生きていけ。それしかないね。・・・月に行かないという選択肢は無いんだろ？」

「ええ・・・。」

「俺は、お前に感謝している。お前を殺したくない。」

「なんで？」

「そりゃあ、お前が俺の友人だからだ。」

「・・・ふふっ」

すっきりしたような顔で笑う目の前の少女。・・・どうやら吹っ切れたみたいだな。これでこの話は終り。・・・さて遅くなったから寝るとするかね。

「俺は寝る。」

「どうぞ。私はもうちょっとここに^どいるわ。」

「そうかい、おやすみ。」

「おやすみ」

一日が終わる。早いようで長い一日。また明日から、実験体の日々が来るか・・・鬱だ。

「友人・・・ね」

月明かりの元。一人の女が誰ともなしに呟く。

「私は、それ以上になれるのかな・・・？」

罪を背負う事を決意した美しい女の呟きは、誰に聞かれることも無く、月明かりが照らす町並みに消えていった。

第七話　く人生で決意する事はたくさんある。それが重いか軽いかの違いだけだ

どうでしょうか。

鬼蜘蛛さんの説教回でした。

感想・意見・批判等大歓迎です。

よろしく願います。

第八話　く鬼蜘蛛は大変なものを盗んでいきました。貴女のうわ何をするやめ

ども、M r . Xです。

割かし早めに出来上がりました。
ちよつと短めですがご了承下さい。

それでは　第八話　く鬼蜘蛛は大変なものを盗んでいきました。貴
女のうわ何をするやめr . . . 別れ、旅立ちく　をお楽しみ下さ
い。

第八話　く鬼蜘蛛は大変なものを盗んでいきました。貴女のうわ何をするやめ

人間にすりゃあ長い月日も、悠久の時を生きる俺にとれば一瞬のことだ。その中で、始まりもあれば終わりもある。何が言いたいかつて？友人と暫ししばしの別れということだ。

「そろそろか……。どうだ？前人未到の地を踏みしめる期待感はある？」

「んー、そんなに。それよりも、貴方に会えなくなるのが寂しいわ。」

「そりゃあ嬉しいね。」

永淋が上目づかいで言ってきた軽口を軽く流す。なんかブツブツ言ってるが無視。ヘタに首を突っ込むと色々とめんどくさい事になる事はこいつと暮らしてきて十二分にわかってる。

「……………結構本気なのに……………鈍感？……………」

「なんか言ったか？」

「なんでもないわ。……………はあ。」

「？」

何を溜息をついてんだ？まったく、こいつの思考はよくわからん。俺が首を捻っていると、それを見た永淋がまた溜息をついた。？？？

「それよりも、はい。」

再び首を捻った俺に何かを渡してくる。差し出されたのは小瓶に入った透明な液体。それからは、微かに俺自身の妖力が感じられる。・
・なる。置いていくものが薬とはこいつらしいな。

「いいのか？まだ作りかけなんだろう？」

「いいのよ。月にもって行く分はちゃんとある。絶対に完成させてやるわ。」

「そうかい、頑張れよ。・・・そういえば」

「なに？」

「俺の貸しはどうなったんだ？もう俺は借金なしの綺麗な体か？」

そうだ。永淋が月へ行くという事は必然的に貸しを返す事が無くなるということだ。仮に月で薬が完成したとしても俺が知ることは無いだろうし、その辺はどうなのだろう？

「言っただでしょ？完成するまでだって。」

「なら実際は借金なしだな。」

「いいえ、完成しても貴方の貸しはまだ残るわよ。」

「は？」

「私が言ったのは、「完成するまで私に付き合う」という意味よ。」

私が月に行ってから完成するまでの年月分、再開した時に払ってもらうわよ？」

「何だその理屈。」

「あら、事実を言ったまでよ？それとも貴方ほどの大妖怪が、人間の小娘との約束を守らないとでも？まさかそんなことは無いわよね？」

「ぐ・・・」

確かにこいつとの約束を破る事は俺の大妖怪としての自尊心を傷つけることになるんだが、こいつは以前俺が言った事を逆手にとりやがった。可愛くねえ。なんで俺は一瞬でもこいつを可愛いと思ったんだ？俺は馬鹿か？

「今、何か言った？」

「いや、な～んにも。」

しかもやけに鋭いし。

「できるだけ、家に未練を残さないでおけよ。」

普通の奴なら「なんで？」と思うところだろうが、こいつなら意味を汲み取れるだろ。案の定「わかってるわよ」と返してくる・・・寂しそうな顔で。いざとなった時にすぐにはぶち壊せなくなるだろうが、そんな顔されたら。

「ねえ」

「ん？」

表情を崩さないままで聞いてくる。

「本当に起きるの？」

あの夜の問答から続いてきた質問。どんなに才女といっても、さすがに割り切れなかったらしい。割り切れたら割り切れたで二度と友人とは認識しなくなるところだったがな。

俺は今までと同じように返す。

「起きる」

言った瞬間に顔が僅かに歪む^{わず}。それは、注意してみないとわからない位の微々たる物だったが、俺は見分けがついた。妖怪なめんじゃねえぞ。

「だから言っただろうが、後悔せんように行けと。この先、確実に人間は“理”を自然の法則から外す。そうなったら人間を皆殺しにしなけりゃ“理”は元には戻らんと何回も言ってるだろうが。」

そこまで言った所で、懐から煙管^{キセル}を取り出して吹かす。吐き出された煙が、夜を照らす月明かりに消えていく。なかなか素晴らしい光景だったな。

「いまさら言った所で変わらない、それはお前だってわかってるだろ？」

「・・・ええ。」

「だったらその罪の意識を忘れんように心に刻み付けとけ。お前ができるのはその辺までだ。」

「・・・はあ、私も落ちたものね。どうにもできないことに未練を持ってるなんて。」

「それが普通の反応だ。いかに天才と呼ばれても、この地で人間として生まれたからにはそうなるのが普通。逆に未練を持ってなかったら殴つてるところだ。」

「妖怪として？」

「いや、友人としてだ。」

そういうと、幾分か表情が柔らかくなった。微笑、それもいつも見せている黒い部分が見え隠れする微笑じゃなくて、ただ普通に笑っているだけ。・・・危ねえ危ねえ。この顔を一番最初に見せられていたら、俺は陥落していたかもしれん。あくまで可能性だが、めっちゃ確率が高い。気を取り直すために煙管を深く吸う。・・・よし、落ち着いたぜ。

「これは、ある人物の言葉なんだが」

「？」

「『人生は重要な選択肢の連続』、今ここで言った意味が分かるか？」

「わからないわ。」

「要するに、お前さんが月へ行くと決めた事は、重要でありながら何度もあるような選択という事だ。これからお前は、これ以上に重要で、これ以上に残酷な選択肢を迫られるときが来る。いまさら元来た道を引き返すような事はできんだろ？ だったら、自分の選択に誇りを持って進みやがれ。」

そこまで言い切って再び煙管を深く吸う。永淋は少し驚いた顔をしてから、俺の言った事を反芻はんすうしているのか考えるような仕草をし、またあの微笑を浮かべながら・・・顔が近ちけえよ。

「わかったわ。私は、月に行く事を選択した事に誇りを持ち、」

「持ち？」

貴方に恋したことを誇りに思うわ

「は？」

「持ち」までは聞こえたんだが、その後に小声で囁かれた声は聞こえなかった。何？なんていったのこいつ？めっちゃ気になるんですけど。

「もっぺん言ってくれ、小さすぎて聞こえなかった。」

永淋は、さっきとは違う笑みを浮かべて……

「イヤよ」

即答しやがった。

賢者は己の罪を思い

王は理を戻さんとする

少女は伝わらない想いを抱き^{いだ}

妖怪はただ、友人の無事を願う

第八話　く鬼蜘蛛は大変なものを盗んでいきました。貴女のうわ何をするやめ
どうでしたでしょうか。

急展開ワロタになり気味です。すいません。

批判・意見・感想等お待ちしております。

それでは 第九話　く楽しむんじゃなくて殺意をこめて全力出すな
んて今後ねえだろうな・・・ 王たる所以^{ゆえん}で会いましょう。

ではノシ

すみません。メチャクチャ遅れました。

いや、理由はあるんですよ！？4日にいきなりパソコンが起動しなくなつて、理由が分からないもんだから業者さんに頼んで直してもらつて昨日帰ってきたんですが、すぐに投稿できるはずだった九話が見事にぶっ飛んでて（データの意味で）この有様になったんですよ！

・・・いや、言い訳ですね。本当に迷惑をおかけしました。

それでは、こんなクソ作者が書いた駄文　第九話　くえ、マジで！？そんな話聞いてねえよ！？　帰還　王の絶望　をどうぞ見てやってください。

第九話　くえ、マジで！？そんな話聞いてねえよ！？　帰還　王の絶望く

目の前でまばゆい光を放ちながら、時代はずれの科学の結晶が夜の闇の中に消えてゆく。今後月人と呼ばれるであろう人間を乗せた口ケットは瞬く間に見えなくなる。

「行つたか・・・」

人間の友人に心の中で別れを告げ、俺はその場を離れる。あいつ、最後まで教えてくれなかったな・・・ま、いいか。そのうちわかる。

「永淋も月へ行つた、家には未練なし、じゃあ帰るかね。」

そういつて町を出る支度をする。まあ、支度といっても煙管のスペアと酒虫が住んでいる瓢箪ひょうたんと永淋がくれた薬が入っている小瓶を懷に詰め込むだけだな。どうやって詰め込んでるだつて？実はこの着物の懷部分がなんか四次元懷になっているのよ。さすが土蜘蛛さん。

支度が済み、後は町を出るだけになった。しかし、今の時間帯に外に出るとなると怪しがられるだろう。そこで、俺の能力で一時的に自分の「存在」を破壊し、町を出たところで元に戻す。完璧だ。もし能力が「司る」のではなく「操る」であつたら、存在を破壊してハイ終了なんつー笑えない結果になつただろう。その辺は感謝だ。何につて？・・・さあ？

街中を歩き、外に通じる門の前まで来た。後は門をくぐるだけなんだが・・・能力で俺は「存在していない」事になっているので、勿論門は開かない。バカス。すぐそばに門番がいるので今ここで元に

戻ったら怪しまれるなんてもんじゃない。蹴散らせばいいって？バカヤロー、そんなことしたら面倒くさいだろうが。俺は強い奴と戦う事が好きなんであって、そこら辺の雑魚共となんざやりたくねえよ。つまんねえだろ。

しゃーない。こうなったら最終手段だ。まあ、それもこれも俺が後先考えずに行動した結果だがな。

「10mくらいか？余裕だな。」

門から50mほど離れて、軽く準備体操的な事をする。何？離れすぎ？別にしなくてもいいんだが、こういうのは楽しまなければな。気分だよ、気分。なんとなくだ。

「すうう……フツ！」

息を大きく吸い込み、腹に力を込めて走り出す。一步目、右足を前に出し、全力で大地を蹴ってスピードに乗る。この時点で20mほど進む。二歩目、左足にさらに力を込めて加速する。門がでかく見えてくる。三歩目、右足に能力を付与して足元を爆発させ最高速度に達する。もう目と鼻の先に門がある。四歩目、左足に溜め込んだ力を真下に向って一気に放出する！

「アイ！キャン！フラアアアアアアアアアアアイ！！！！」

地面がどんどん遠のいていき、俺の体はあっという間に門の高さを越えた。それに加えてさらに10mほど上空に上がる。俺は今現在

「存在していない」ため、他の奴らの前では爆発「していない」し、声も「出てはいない」。ただ、爆発の跡が「いつのまにか」目の前に現れるだけ。しかもまったく不思議に思わないオマケ付き。メツチャ便利だなこの能力。

「さて、空に上がったついでに空中散歩でもするかね。」

どうやるかって？簡単な事だ。「空は歩けないという常識」を破壊すればあら不思議、空を歩けるようになってちやいます！いまなら気付かれる事も無く自由に楽しめるオプション付き！気になる妖力おの消費量は、なんと！総量の100分の1！今が使い時！ご連絡先は妖怪將軍鬼童丸まで！今すぐご連絡を！

「やっと帰る気になりましたか、御館様」

「おおー！？」

ビックリした。ふざけて鬼童丸の名前呼んだらホントに来てるんだもん。ま、「どこにでも存在する」から不思議じゃねえんだけどな。

「いきなり出てくんなよ、心臓に悪いぞ。」

「失礼しました。御館様に呼ばれた気がしたので。」

「確かに呼んだけどよ、もうちょっと気を使ってくれてもいいんじゃないねえのか？心臓止まったらどうすんだ。」

「御館様が死なれる事なんてのは、未来永劫訪れないと思いますのでご安心下さい。」

「何に安心するって？」

「貴方の不死性にですよ。」

「そんなこたあ……ある……かな……？」

納得してしまう自分が悔しい。否定できない。

「まあいいや。今から帰るからあいつらに伝えといてくれや。ここから走って帰るから。」

「承知いたしました。」

そういつて消える鬼童丸。本当にどうかしてくんねえかな……マジで。

「さて、急ぐか。」

歩いていけば半日だが、走っていけば十分程度で着くという妖怪クオリティ。素晴らしいね。つーわけで、鬼蜘蛛！行きまーす！

「被害は？」

「人間が攻めてきたと思われる地域の同朋は全滅。ズタズタに引き裂かれたり、全身に穴が開いていたりなど元の形をしている同朋が1匹も居ない有様でした。」

近年、襲われる対象だったはずの人間は突如妖怪を襲うようになった。手に持つのは、今までのような鍬くわや鋤すきなどではなく、強悪な破壊力を放つ大筒や、弓よりも殺傷力が遥かに高い鉄製の飛び道具などになり、攻めてくる人間達を追い払うどころか皆殺しにされる始末。これまでの妖怪と人間の関係にはなかった前代未聞の出来事だ。

「そして・・・」

「なんだ、まだあるのか？」

顔を曇らせながら、凄惨な現場を確認しに行った妖怪に続きを促す。

「人間達の次の標的はおそらく・・・この山でしょう。」

この事実には、山を束ねる立場の妖怪達はあまり驚かなかった。博識な鬼童丸と、以外に頭がまわる楚天丸がこれまでに示唆してきた事だったからだ。しかし、だからといって対策が練られているわけでもない。理由は簡単。この問題に関わる事が日ごろから自分達の主が気にかけている事であり、下手に行動すると主から制裁をくらう事になるかもしれないからだ。

「そうか、ご苦労。下がっていいぞ。」

「はっ」

小妖怪が下がり、残ったのは五匹の大がつく妖怪のみ。中には一際大きい鬼の姿もある。

「はぁ・・・楚天丸、これで何回目だ？」

「今年に入って・・・99回目ですよ、兄さん。」

「んで、ちょうど100回記念にこの山を落とそうってのか？人間は。」

「俺は楽しそうだからいい「あなたは黙ってて。」・・・はい。」

その風格を湛えた鬼は、隣に座っている女鬼に睨まれて小さくなる。これじゃどっちが鬼神だかわからんな。

「なににせよ、大將が戻らんと話にならんからな・・・。」

「兄様は、どこへ行つたんでしょうか？あれからまったく音沙汰ないし・・・もしかして!？」

「楓、それは無いわよ。想像できる？鬼蜘蛛さんが人間に殺される所。」

「・・・できないです、母様。」

「なら待ちなさい。いつか帰ってくるから。」

「その通りですぞ、楓様。」

「ひゃっ!？」

母娘の会話に割り込んできた、先の鬼神とはちよつと違う風格をもつた妖怪はそういつた。ビックリした楓が胸を押さえて「おじ様は・・・やっぱり・・・怖い・・・」といている。それを見て、鬼童丸は楓に微笑む。孫を見る祖父みたいな目で。

「鬼童丸か？いままでどこに行つてたんだ？」

「そつえば見ませんでしたね。」

「御館様のところに行つてきた。」

「本当か!？」

夜天丸が身を乗り出して鬼童丸に迫る。顔が顔なので、気の弱い妖怪だったら確実に気絶ものだ。だがそれを見返し、さらに続ける。

「いまから走って帰られるそう。御館様なら、あと数分ほどお着きになれるだろう。」

「おじ様、本当!？」

「本当ですとも。ふと、御館様に呼ばれた気がしたので行ってみたら帰る途中でしたので。」

「それで今どこに？」

「いまごろ、宙を走っているでしょうな。」

「・・・は？」

「え？おじ様？私の聞き間違いじゃなかったら宙を走ると？地を走るんじゃないって？」

「はい。」

「飛ぶんじゃなくて？」

「はい。」

「んな馬鹿な・・・飛ぶならまだしも走るなんて!？・・・いや、鬼蜘蛛様ならやりかねない・・・あの人は僕達のものさしで測ってはいけないんだ・・・いやだ、やめてください!お願いですから・・・え?そこ?そこはダメですってば・・・う、うわあああああああ

あ！！？！？！？」

「おゝい、夜天丸。弟が昔を思い出して自分の世界に入ってしまったぞ。」

「ああ、そいつは腹を殴れば元に戻りますから殴つといてください。」

「はいよ。フンッ！！」

「<ドスツ>ふぎゃ！？」

「あれ？おゝい、夜天丸。こいつ泡吹いて白目剥いてん「あなた！強すぎです！」<ドゴオツ！！>ギヤラパツ！？」

「そうです！楚天丸さんが死んじゃいます！」

「<バキヤツ>ふごあ！？・・・か、楓よ・・・お前もか・・・」

「はあ・・・んで、こっちに向ってきてるっつーのは本当なんだな？」

「ああ、本当だとも。」

「なら、下っ端の奴らにも言っとかんな。大將を初めて見る奴らも居るだろうし。」

「まあ、そうでしょうね。」

「なら、行く「夜天丸様ー！大変ですー！」どうした？」

「向こうの方から人間が空を飛んでこっちに来ていま・・・す・・・?」

何か報告を持ってきた妖怪は、この場のなんともいえない状況に絶句している。当の本人達が、まだおかしなことをやっているせいだ。

「あつちは気にするな。で?何人だ?」

「確認できたのは一名のみです!千里眼の話によると、赤い髪の毛をした大男だそうです!」

「ああ、そうか。・・・ってええもう!?早くね!」

「それが御館様ですよ。」

「?とにかく、指示を!」

「ああ・・・絶対に手を出すな。それと、年寄り連中(鬼蜘蛛が山を乗っ取ったときからいた妖怪達)に伝えろ、“大將が帰ってきた。”と。」

「へ?迎撃しないのですか?それに大將って・・・?」

「いいから、いけ」

「?了解しました。」

報告をしに来た妖怪が指示を伝えに行き、残るは混沌とした集団と実に冷静な二人だけが残った。

「それじゃ、迎えに行くか。」

「ええ。」

空中全力疾走してから数分。あっという間に山が見えてきた。正直ここまで速いとは思わなかった。ま、どうでもいい事だ。とりあえず地面に下るか。

「よつと。久しぶりの山だ。うゝん、空気がうまい。」

帰還した余韻に浸っていると、山から何匹かの妖怪が出てきて俺を取り囲んで威嚇する・・・あるえー？

「あれ？俺ってこの山の主人だよね？なんで囲まれてるの？」

当然の疑問を口にしたら、回りに居る妖怪の中でも比較的妖力が大

きい奴が俺に向って叫んでくる。

「何をほざいているのだ！この山は、妖怪王鬼蜘蛛様の山！貴様のような人間が鬼蜘蛛様のはずが無いだろうが！」

「いや、だから俺が鬼蜘蛛だつて。」

「まだ言うか！貴様なぞ、我ら「ようやく帰りましたか、大将。」
夜天丸様・・・？」

「おお、夜天丸！久しぶりだな！こいつらどうにかしてくれよ！」

「自業自得ですぞ。」

「酷いなあ。まあいい、とりあえず今後の事について話し合つぞ。」

「承知しました。」

「あの、夜天丸様？これはいつたい？」

俺たちのやり取りについて来れてない妖怪が疑問を夜天丸にぶつける。そうか、こいつらは俺が居ない時に来たのか。なら俺が分からのも納得だな。

「ん？ああ、この人が鬼蜘蛛様。俺らの大将だ。」

「な！？それは本当ですか！？」

夜天丸から真実を聞かされて、途端に怯える妖怪達。ま、威嚇してた相手が自分達の主だったんじゃないやあビビルわな。そして全員そろつ

た綺麗な土下座。日本の文化の原点はここにあった！

「すみませんでした！まさか貴方様が鬼蜘蛛様とは露知らず・・・」

「別にいいぞ。間違いはある。次やったら殺すがな。」

「ありがとうございます！」

土下座のまま喋る連中を尻目に、夜天丸と山の議場的なところに向う。道中に、懐かしい面々が挨拶してくる。なかなかいい奴らばかりだな、ここ。

そんなこんなで目的地に着く。そこには・・・

「なんとというカオス。」

が広がっていた。OK、状況整理だ。まず、鬼神がうずくまっている所を嫁さんが足蹴にし、楓が鬼神の腹を殴っている。うわっ、あれは綺麗に入ったな。角度も位置も完璧に急所を捉えてやがる。で、その近くには白目むいた楚天丸が大の字になって転がっている。そして、それら全てを眺めている鬼童丸。なんだ？何が起こったんだ？

「夜天丸、何だこれは。」

「気にしない方向でお願いします、大将。」

「あ、ああ・・・」

「あ！兄様！」

楓が気付いたらしく、声を上げてこっちに走ってくる。そしてその

勢いのままに・・・

「どこ行つてたんですかー！！」

「ぐふう！？」

腹に突撃された。いきなりだったから防御もクソもあつたもんじゃない。どういうことかって？要するに悶絶しているという事だ。にしても攻撃力高すぎじゃね？これが世に言う補正とかいうやつか？

「心配したんですからね！」

そういつて頭をぐりぐりと腹に押し付けられる。ちょ、やめて！痛いって！角が、角があー！刺さってるから、刺さってるからあー！

「わかつたから、落ち着け。それ以上したら死んじやう。」

「兄様は死なないので大丈夫です！」

「え、なにそれ。」

俺も一応死ぬ事は死ぬぞ？ただ寿命で死なないだけで、外からの攻撃では一応死ぬからね？誰？ガセネタ教えたの。

そう思いながら回りを見渡すと、鬼童丸が微かに笑つてやがる。こいつか！そついやさつきも同じような事言つてたしな。確信犯だろ。

とりあえず、まだ引つ付いている楓を引き剥がす。なんか膨れっ面ふくらされた。そんなに俺に突撃したかったのか、こいつ。

「鬼童丸・・・」

「なんでしょう?。」

堂々としらばつくれる鬼童丸。こういう態度に出られると追求しにくくなる。

「・・・まあいい。それよりも、夜天丸!状況を教えてくれ!おら、お前も起きろ!。」

楚天丸に近づき、頭を引つ叩いて起こす。

「はっ!?僕は一体!? あ、鬼蜘蛛様。お帰りなさい。」

「遅いわ。」

「では、近況報告いたします。」

弟説明中・・・

牛鬼兄

「なるほどねえ・・・やっぱり予想していた通りかね。」

大方考えていた通りの状況だった。真剣な空気が伝わったのか、それまで一方的な夫婦喧嘩をしていた二人は楓と一緒に座って俺たちの話を聞いている。鬼神たちは俺の客扱いになっっているので、この山に関することに口出しするのは遠慮しているのだろう。

「予想していた？それなら、対策出来たはずなのでは？」

「対策なんざ意味ねえよ。あれか？俺がそんなことも分からずに放って置いたとでも？」

「いえ、そういう訳では無いのですが・・・」

「しかし大将、どうするんですか？このままじゃあ俺たちは人間に
皆殺しにされますよ？」

「そんな事分かってらあ。打つ手はある。」

「「どんな？」」

「題して『殺られる前に殺っちまえヒッター！作戦』だ。」

「「・・・」」

おろ？二人して沈黙しやがった。でも、これしか無いんだよね。

「大将、一応聞きますが、それはどんな作戦ですかい？」

「名前の通りだ。」

「・・・」

「鬼蜘蛛様？確認しときますが、それしか方法は無いんですか？」

「無い。」

そう断言すると、諦めたような表情になる兄弟。案外諦めるの早い
のなお前ら。

「はあ。まあでも俺ら妖怪は強いものに従うというのが掟。つきあ
いましょうや。」

「さすが夜天丸。分かってるじゃねえか。」

「・・・わかりました。その作戦で行きましょう。」

「作戦も何もあったもんじゃないけどな！」

そういつて俺は笑う。すると釣られたように皆笑い出す。これから戦争だから血が疼いてんじゃねえのか？こいつら。え？俺だけだつて？違う違う、絶対に鬼神はそうだって。

しばらく笑っていると、楚天丸が思い出したように俺に言った。

「そうだ、鬼蜘蛛様。妖怪達が話してたんですが、「最近妖力が少なくて感じる」といつていました。これって人間の仕業なんですかね？まあ、話しているのは小妖怪クラスくらいなので心配は要らないと思います。」

「
．．．．．は？嘘だろ？え、ちよつと待て。
．．．．．ふ
ざけんじゃねえぞ．．．．．」

『それは、俺を驚愕と絶望の谷底に突き落とすには十分な言葉だった。』

本当はこのまま戦争まで行きたかったんですけど、投稿が最優先と
いうことでここで区切らせていただきました。

次の話から鬼蜘蛛さんの本気が出るわけですが、ここで一つ読者の
皆様にご協力お願いしたいと思います。実は、鬼蜘蛛さんのスペカ
が全然決まってるんです。二つ三つは有るんですが、作者の貧弱
な脳では限度が有るのです。

そこで、もしよければ鬼蜘蛛さんのスペカを考えていただけないで
しょうか？　よければ、の話ですので考えてもらわなくても全然OK
です。

意見、感想、批判×100、オリジナルスペカ等お待ちしております。
す。

第十話　く楽しいけどコレ戦争なのよね　人妖大戦く（前書き）

どうも、M r . Xです。

たくさんの方の応援ありがとうございます！おかげですごく助かります！

これから質問があれば、あとがきでお答えすることにしました！キヤラへの質問や、このヘタレ作者への質問でも何でもいいです。質問があれば、ぜひ聞いてください。

それでは、ちょっと長いですけど　第十話　く楽しいけどコレ戦争なのよね　人妖大戦く　をお楽しみ下さい。

第十話　く楽しいけどコレ戦争なのよね　人妖大戦く

クソツタレが!“理”が壊される事は分かっていたが、まさかこんな形で壊されるとは思わなかった!畜生め、考慮しておくべきだった・・・いや、まだそうと決まったわけじゃない。確認しなければ・

「?どうしたのですか、鬼蜘蛛様。」

「・・・いや、なんでもない。これで解散する。各自備えておけ。」

「「「はっ」「」」

帰ってくる返事には、いささかの疑問や恐怖が伝わらない。やはり、疑っているのは俺だけか……。やばいな、俺たち妖怪の今後に関わってくるかもしれん。

「夜天丸と鬼童丸は残れ。話がある。」

「はっ」

「了解」

向こうでは騒ぎ声が聞こえる。どうやら宴会を開いているらしい。だが、今ここには俺と夜天丸、鬼童丸の三人しか居ない。楓が残りがったが、何とか説得して向こうへやった。あれは疲れたぜ・・・

二人とも、俺が喋るのを待ってるからなんとも静かだ。しかし、こいつらも忠臣振りが板に付いてきたな・・・。

呼び出されたものの一向に喋らない俺に痺れを切らしたのか、夜天丸が話しかけてくる。

「大将？その・・・話したいことってえのは・・・」

鬼童丸も同じ意見らしく、頷いてこちらを見てくる。

「その前に確認しておきたいことがある。」

「なんででしょう？」

「本当に、小妖怪の妖力がいきなり減りだしたのか？そいつらの寿命ではなく？」

俺の質問に夜天丸が怪訝そうな表情をしながら返してくる。

「ええそうです。最近まで元気にバカ騒ぎしていた連中の妖力が少なくなっています。楚天丸が言った通り人間達の仕業でしょう。」

「仮に人間がやったとして、なぜお前達の方を優先させない？なぜ、小妖怪共だけ妖力が減る？普通は上を弱体化させるだろう。」

「それは・・・むう・・・」

俺の質問に答えが詰まったのか、唸り声を上げる夜天丸。そこへ、今までじつと聞いていた鬼童丸が助け舟をだす。

「おそらく、私達大妖怪に干渉するほどに強力な物では無いのでしよう。作ってみたはいいが、自分達の力を過信し、私達の力を読み誤った結果でしょう。私達に効いていると思ひ込み、無謀にも攻め込んでくるでしょうな。人間のやりそうなことです。」

「そうだ！それですよ大将！心配するほどには及びません！俺たちが奴らを叩き潰せばそれで終りですよ！」

「俺はそうは思わん。」

「？なんでですか、大将。」

「俺の思い過ごしかもしれん。詳しい事は、それが現実だった時に話す。」

そうだ。まだ予測の段階だ。決定的なものが見つかるまでは、説明する必要は無い。もし見つければ・・・ダメだ、考えちゃいかん。こういうときほど、考えた事が当たるもんだ。しかし、とにかく確認だけはしておかなくちゃいかん。

「人間共に襲われ、皆殺しにされた場所はわかるな？」

「はい。全て覚えてあります。しかし、何をするのですか？」

「能力を使つて、最近襲われた場所に残っている妖力を、そこに居た妖怪の数に換算してくれ。」

「了解しました、御館様。」

そういつて鬼童丸は遠い目になる。こいつが同時に違う場所に存在している時はいつもこんな目になる。はつきり言つて、面白い。最初に見たときはメツチャ笑いそうになって困ったときがあったな。そのとき楚天丸が大爆笑して全方向から衝撃をくらっていたのはいい思い出だ。

そんなことを思っている間に、鬼童丸が喋りだす。襲われたところに居る鬼童丸が見ている風景を見ているのだらう。

「結構酷い有様です。死体はありませんが、まだ血の臭いがきついです。」

「で、肝心の妖力は？」

「まだ襲われてまもないらしく、完全に近い形で妖力の名残なごりがあります。それに加え、怨嗟の念がそこらじゅうにこびりついてます。数は・・・そうですね・・・大体500から600くらいでしょうか。」

「確かか？」

「妖力が風に流れた形跡がありませんし、何より怨念がすごく強い
ですからね。誤差はあるかもしれませんが微々たる物でしょう。」

「そこはどの辺だ？」

「ちょっとお待ち下さい。・・・山から北東に3キロ行った地点で
す。」

「おかしいな・・・」

鬼童丸が言った事にそう反応する夜天丸。もう、嫌な予感がバンバ
ンする。仕方ないので聞いてみる。その、俺を絶望に叩き込む言葉
を。

「何がだ？」

「いや、その辺に居た妖怪の数は少なくとも800は居たはずな
んですよ。それが500から600?いくら誤差といってもそこま
で外れるものですかね？」

・・・ビンゴ。

「そうか・・・やはりか・・・。」

「大将? 一体どうしたんですか? さっきから。」

「御館様? どこか具合でも?」

「いんや・・・はあ。」

首を捻っていた夜天丸と、向こうから帰ってきた鬼童丸が俺の顔を覗き込む。鬱陶しい。これが美人だったら喜んだかもしれないが、男二人、しかも片方はいかつくて片方はオッサンとか、吐き気しか出てこんわ。

・・・やめよう。現実逃避しても仕方ない。

「いいか、これから重大な話をする。聞け、そして理解しろ。」

雰囲気を変えろ。そうすると、自然に目の前の二人の雰囲気も変わる。やっぱり、よく出来た部下だよなあ。

「まず、質問に答えろ。俺たち妖怪の力の原点はなんだ。」

「原点・・・生きた年月と喰らった人間の数、ですかね。」

・・・質問がおかしかったか。合っているが。

「夜天丸・・・合っている。合っているがそうじゃない。・・・聞き方を変えるか。俺たちの“存在”の原点はなんだ。」

「存在・・・ですか？」

「ああ。」

考え込む夜天丸を尻目に、それまで黙っていた鬼童丸が答えを返してくる。

「人間の恐怖です、御館様。彼らが万物の事象に恐怖を抱き、それが具現化したものが、我々妖怪でございます。」

「その通りだ、鬼童丸。満点をやろう。」

「しかし大将？それがどういう関係なので？」

「最初に言った、俺たちの力の原点・・・妖力も人間たちの恐怖に関係してくる。まあ当然だ。存在に関わるという事はそれ自体の力に関係するからな。・・・ここまでは理解できたか？」

俺の問いに頷く二人。しかしまだ疑念を持っているのだろう、顔に？マークが浮かんでいるようだ。

さて、こっからが本番だ。

「今言ったとおり、人間の恐怖と俺たち妖怪には密接な関係がある。そもそも、俺たち妖怪が人間を襲うという行動をごく当り前にする

のも、俺たちの生存本能が働いているからだ。

人間とは忘れる生き物だ。多大に訪れた幸福感も、体を支配するほどの驚愕も、一時身を投じる快樂も、身近な存在の死も。無論、恐怖とて例外ではない。かといって、忘れられるように作られた人間に『忘れるな』と強要することは出来るはずがない。だから、恐怖を忘れられないようにするには逐一襲っているわけだ。

だが、『忘れる』という結果にもいくつかの過程が存在する。まあ一般的なのは年月だな。月日がたてば記憶を薄れさせる。中には一切忘れる事の無い『不変の存在』がいるがそれは置いておこうか、関係ないし。

今回はその過程のうち、もつとも厄介でなおかつ恐ろしいものだ。それは、『恐れる必要が無くなった』ということだ。必要が無いから、結果的に忘れられる。妖力が少なくなったのも、妖怪達自身が消えたのも、全てそのせいだ。」

「必要が無い・・・それは人間達による“発展”ですか？“発展”によって我々よりも強い力を入れたからと？」

「その通りだ。」

「しかし大将？それなら俺たちが直接出張って、奴らを壊滅させればいいんじゃない？」

「夜天丸、よく考える。俺たち妖怪は人間の恐怖が根本にある。それは、『この世界』の人間全てだ。本来なら、あの程度の数が恐怖を忘れたとしても、まだ大多数の人間が恐怖を持っているから妖力が減る事なんぞ起こるわけが無い。言っている意味が分かるか？」

「・・・？よく分かりませんが・・・」

「まさか・・・」

「言ってみろ、鬼童丸。」

「・・・その大多数の人間も我々に対する恐怖を忘れたという事ですか？」

「正解。」

「そんな！？」

「本当だから仕方あるまい。元になった人間が、他の人間達と何の繋がりも無かったと思うか？おそらく、あいつらの技術力が他の連中にも伝わったんだろう。力を得て、妖怪達を襲いにかかる。皆殺しにしたら、恐怖が薄れる。恐怖が薄れるから、また妖怪達を襲う。悪循環もいいところだ。」

「打開策は・・・？」

「・・・あることはあるが、確率は極めて低い。」

「なら・・・」

「さつきも言った通り、質が悪い忘れ方をした人間に再び恐怖を抱かせる事は相当キツイ。生半可な恐怖じゃあ憎しみに押しつぶされる。徹底的に、骨の髄まで、恐怖を叩きこまなきゃあいかん。なにせ、奴らの力を圧倒的な戦力差で真正面から余裕を持って叩き潰さ

なきやいかん。ただの一つの損害もなく、だ。」

「・・・」

「鬼童丸はおるか、鬼神ですら出来るわけがないだろう。それほど、今の連中はおかしくなつとる。まったく、どっちが化け物だかわかつたもんじゃねえな。」

「ならばどうするんですか！？このまま、俺たちが殺されるのを待てと言うのですかい！？大将！」

「御館様、夜天丸の言つ通りでございます。このままでは我らだけではなく、この先に生きるはずの妖怪達も存在しない事になります。」

「・・・」

「大将！」

「御館様！」

「んなことわかってらあ……。俺が出る。他にはいらん。死ぬかもしれないが、まあ大丈夫だろう。規模の大きい喧嘩をしに行くと思えばどうって事ねえ。あいつらに俺を……。妖怪の王を敵に回した事を後悔させてやる。鬼童丸、お前は他の大妖怪達に俺の言葉としてこう伝える。『徹底的に壊せ』と」

「すうゝ・・・はあゝ。喧嘩の前の一服は美味いねえ、これで酒があればいいんだが、置いてきたしな。いまさらどうにでもなるまい。」

早朝。静寂が辺りを支配し、なんとも静かだ。俺が能力で「音」を破壊したんだけどな、後悔するとは思わなかった。だって、音が一切しないんだぜ？歩いてても無音、地面を碎いても無音。怖い。

「しっかし、これが喧嘩と言えるのかねえ？俺一人対超科学力をもった人間多数。どうしよう、負ける気がしねえ。」

そつだ、一切負ける気がしない。なんでかな？

「俺がそれだけの化け物一つーことか。なるほど、納得。」

そうこう言ってるうちに、こちらに向ってくる集団が見えてくる。あれだよ？見えてくるといっても俺のアホみたいな視力のせいだからね？まだ数十キロ以上あるよ？

「敵さんのお出ましかね。ほんじゃあ一丁、全力で叩き潰しますかね。」

そして唱える。俺が持つ最強で最恐で最狂の力を解放する言霊を

妖怪王鬼蜘蛛

「ん．．．ふう。しっかし久しぶりだな、この姿に戻るのは。」

そこに居るのは、般若の顔をした四本腕の化け物．．．つまり俺。
やばい、人間の時の妖力がカスに感じるほど妖力が多い。なんだこれ？しばらくたってないうちにこんなになっちまった。いつとくが、この姿が俺の本当の姿だかな？人間の姿は仮だぞ？間違えるなよ？

「だが、こんなじゃあすぐに殺されるな。量が量だし．．．しやーないな。」

そしてもう一つ、口にする。妖怪の王たる由縁を。

よつかいおうひやくまんきおんりきうぐん
妖怪王百万鬼怨霊軍

それは恐怖 闇を形作る『負』の受け皿

それは虚無 全てを飲み込む果てのない『負』

それは怨念
古いにしえより根付く『負』の統合

それは絶望
際限無き『負』の泉

それは死 万物全てが行き着く真の安息 真の『負』

それら全てが混ざり合い、王の意思の元に姿を変える

王の 王による 王のための 王にしか尽さない

最強で 最狂で 最恐で 最凶の軍隊へと

そこにあるのは忠誠を誓う最強の軍と、それを率いる最強の妖怪王

のみ

そして妖怪にとっては最高の、人間にとっては最悪の戦争が始まる

『人妖大戦』

後に人はそう呼んだ

「怨むなら怨め。呪うなら呪え。それでも俺は、俺の道を行く。お前達の怨みつらみを全部背負って生き抜いてやる。たとえそれが破壊の道であろうとも、道を捻じ曲げて生きてやる。道を塞ぐのであれば、神だろうとこの手で破壊してやる！」

妖怪討伐軍の士気は高かった。なにせ、次の標的は妖怪の総本山で

ある『妖怪の山』だからだ。そこには自分達が負けるかもしれないという懸念はない。あくまでも、自分達の勝利のみ。それもそうだろう、それだけの力を彼らはもっているから。おそらくこの遠征も確実に成功するだろう、それも人間の勝利という形で。

だが違った。

ほどなくして、妖怪の集団だと思われる影が現れる。その時も自分達がどんな活躍をするのか、妖怪の親玉をいち早く取る奴は誰だの、戦う前から勝利しているかのようなお気楽な雰囲気だった。

だがしかし、そのような考えが実現する事はなかった。

目の前にあるのはなんであろうか？そこにあるのは、自分達の華々しい活躍などではなく、妖怪達の蹂躪であった。それも、剣できつたり、銃で打ち抜いたりしてもまったく応えない化け物達。しかもそこには、自分達が以前殺したはずの妖怪の姿もあった。

そこまで確認した兵士は、狂気の嗤い声を聞いたと思ったら、瞬時に意識が吹き飛ばされた・・・

*
*
*
*
*
*
*

[illegible]

笑う、
晒う、
嗤う。

笑いながら腕を振るい、晒いながら群がる人間を殺し、嗤いながら戦車を潰す。

周りでは、俺の妖力で姿を作った妖怪達がその憎しみを晴らしている。なかなかスプラッタだな。こいつらは冥界に居る怨嗟の念をもった靈魂で出来ている。怨霊ともいうな。そこに俺が妖力を与え、隷属させる代わりに現世に存在させている。ちなみにこいつらに殺された奴らも同じように俺に隷属する仕組みなので、殺せば殺すほ

ど増えていくという鬼畜。すばらしいね。

「ははははは！それだけか？それだけかあ！？！？もつと足掻きやがれええええええええええ！！！！」

俺は、自らの衝動のままに叫び、潰し、踏み潰し、握りつぶし、吹き飛ばし、引き裂き、貫くなど、殺戮の限りを尽す。もち、狂つてます。アレ使うと強制的にタガが外れるから、こんな時にしか使われない。ま、宝の持ち腐れにならなくて良かったよ。

戦い（といっても半ば蹂躪と化している）が長引けば長引くほど怨霊妖怪（俺の妖力で動いている妖怪）の数が増えるため、徐々に後退していく。しかし、どれだけつれてきたんだ？殺しても殺してもキリがない。その分楽しめるけど。

「死ねえ！」

そばに居た人間が、俺の左下腕を狙って剣を振ってくる。そんなもので俺を斬れるとでも？放っておこう。

ズバン！！！！

おりよ？何だ？斬れやがったぞ？

「ははあ！どうだ、妖怪！この剣には、貴様ら悪しき物を斬り裂く力がついている！おとなしく死にやがれ！」

そういつて、そのなんだか斬れやすそうな剣を振ってくる。・・・つまり。いいのは剣だけか・・・

「うおお《グシャア！！》」

まったく、弱いくせに突っかってくんじゃねえよ。

ぶつくさいいながら地面に落ちた腕を斬り口に押し付ける。それだけで腕が引つ付くとかどんな化けもんだよ。あ、俺妖怪か。

「さあて、お次はどいつだ？全員纏めてぶち殺してやらあ！！」

近くに居た人間を踏み潰し、ひるんだ人間を握りつぶし、斬りかかって来る奴を叩き潰し、銃を構える間に殴り飛ばし、仲間をかばっているのを一緒に吹き飛ばす。これらを同時に行えるってすごくない？腕が四本あるからだけど。

「死ね死ね死ね死ねえ！うわははははは！」

ズドン！

高笑いしていると、轟音とともに腹と右上肩に痛みが走る。見るとドデカイ穴が開いている。ああなんだそれだけか。

そうやってちよつと考え事をしているところを怯んだと見たのか、一斉に槍やら剣やらを突き立ててくる。全身に痛みが走り、ちよつとよるめく。どうやら妖怪達に効くとかいうのは嘘じゃないらしいな。だがそんなもので俺を止めれたら右半身がレーザーで吹っ飛ばされた時に死んでらあ。

「く、この化け物め！いい加減死にやがれ！」

「化け物で結構。それに死ぬのは貴様達だ」

斬られようが突かれようが吹っ飛ばされようがすぐに再生する俺。
永淋が実験台にしたのがわかる気がする今日この頃。いい加減つま
らなくなってきたな、作戦変更。手っ取り早く効率的に皆殺しにす
る作戦で行こう。よし、アレを使おう。

その前に下ごしらえ。ちょいと溜めがいるから、まずは周りの連中
をぶち殺してスペースをこじ開けるかね。

イメージするのは、自分を中心に描いた大きな円。そして、圧倒的
なまでの“破壊”の概念。

破壊者の領域

次の瞬間には周りに居た兵士の全てが「破壊」される。要するに、
何かに叩き潰されたかのように弾け飛んで粉々になったっつーこと

だ。見る！人がゴミのようだ！実際にゴミなんだけどね。

よし、下ごしらえOK。あとは、呆然としている奴らに向ってぶっ放すだけだ！

鬼哭砲

俺自身の妖力で作り上げた超特大の漆黒の砲撃。わかりやすく言えば、真つ黒な極太レーザーだ。それが人間達に向って薙ぎ払われる。『破壊者の領域』と合わせて一気に消し飛んだな。え？怨霊妖怪は、だって？大丈夫大丈夫。あいつら俺の能力で「外部からの自身を殺傷する力」を破壊してあるから。簡単に言えば無敵。素晴らしいね。

どんなに攻撃しても倒れない怨霊妖怪達に恐れをなしたのか、頭や半身が吹き飛ばされてもすぐに再生して暴れまわっている俺が怖くなったのか、人間達は撤退を開始した。

だが、まだ恐怖が足りない。まだ悲鳴が足りない。まだ絶望が足りない。

敗走する相手の背を碎き、首を跳ね飛ばし、体を引き裂いていき、ついにはあの町まで来てしまった。

だが、まだ足りない。俺の狂気がそう言っているのではなく、理性がそういつている。どう言う事かって？・・・それだけ重いことになったという事さね。

人間が町へ逃げ込む。逃げ込めば安心と思っているのだろう。門は堅く閉ざされている。だがそんなもの屁でもない。俺が一発殴ればそれで壊れる。だが、今回は一人の生存者も許されない。そこで、この町の周りの空間に「内側からによる空間干渉力」を破壊し、外に出られなくする。完璧だ。

「おら、てめえら。これが最後の仕事だ。・・・いくぞ！」

そついい放ち、門を殴り壊す。中から悲鳴が聞こえてくるがそんなものは関係ない。次々に怨霊妖怪達が襲いかかる。皆殺しになるのも時間の問題だろう。

皆殺し。悪いとは思わない。なにせ自分達の存在意義がかかっているのだから。自分が死ぬとわかっていて、その元凶に情けをかけるつもりなんざ毛頭ない。これが終われば、楽しいけど胸くそ悪い戦争も終わる。ここの恩恵を受けた他の都市は鬼童丸たちが何とかしてくれているだろう。

やがて悲鳴が聞こえなくなる。もはや人間の気配は微塵もなく、あるのは禍々しい妖力に満ちた多数の妖怪。つっても元々の妖力は俺の妖力だがな。殺す過程で喰ったりしたから、妖力が闇色に染まった。黒ではなく、闇。どんだけだよ。

あたりに人間の気配がしなくなったところで、怨霊どもを冥界に帰らせる。自分の中の狂気が薄れるのを感じる。同時に、酷い脱力感が襲ってくる。殆どの妖力をあいつらに与えたせいだ。軽く万は居ただろうな、途中から増えていったし。それだけの数に妖力を与えようと思ったら、消費する妖力の量はバカにはならない。現に、途中で妖力が底を突きかけたことが何度もあった。そのたびに、永淋が残した薬を飲んで事なきを得たんだがな。あれはやっぱりスゴイしかし、いかんせん量が少ない。あつという間に無くなってしまった。

人間の姿に戻る。また一段と脱力感がすごいな、こりゃ。やはり人間の時とくらべて全力を出した時の妖力量が桁違いだという事が改めてわかった。人間の状態だとあれだけの再生力と戦闘力が出せない。一応、人間の時でも全力を出せるっちゃあだせるが、疲労感がハンパない。辛うじて残っている妖力を、町の周りを覆っている俺製の結界・・・概念結界とも呼ぼうかね？それを解除するために使ったためにもうスツカラカンだ。

「アレ、まだ残ってたかな？一滴でも残ってれば・・・」

懐に手をつまむ。ちよつと探っているとお目当てのものが指に触れたので、それをつかんで目の前に引つ張り出す。

「・・・あることはあるが一滴程しかないな。少ししかくれなかった永淋を恨むか、残ったことを喜ぶべきか。しかたないな。」

小瓶の蓋を開け、逆さにして中に入っている薬を口の中に入れる。液体特有の喉を通り過ぎる感覚がしたと同時に、妖力が回復する。大体二割程度か？これでちつたあましになったな？

さて、最後の仕事だ。これが終わって初めて今後の憂いを絶つことが出来る。

「妖力が少なえから、上手く練れないな。・・・よし」

能力を使い、「発展しすぎた科学技術の存在」を破壊する。“何か”を握りつぶした瞬間に、無数に立ち並ぶ建物や放置された砲台、持ち手の血がこびりついた光線銃などが一斉に弾けとび、無数の破片となった。それらの設計図なんかは、おそらく文字が見えないくらいに細かくなっただろうな。他の連中はビックリしているだろうな。なにせ、自分達が使っていた武器がいきなり爆発。しかも、次の瞬間にはそれが何だかわからなくなるんだからな。混乱するだろう。

ま、俺の仕事は終わった。後は他の奴らに任せるとしますかね。

「さて、帰るかね。あいつらも心配してるだろうしな。・・・楓の奴、また突撃してこねえだろうな。」

完膚なきまでに破壊され、もはや朽ちるのみとなった『時代はずれの科学都市』の中を悠然と進む。歩いてみると、地面に横たわる人間が目に入る。老若男女関係なく一様に恐怖に染まった顔で死んでいる。普通の奴だったら嫌悪感を示すか、こんなことをした奴を恨むだろうが、俺は普通じゃない。むしろこの顔を見ることで、今ここに生きているという実感を得るのだ。人間に恐怖を与えるのが、俺たち妖怪のあるべき姿。そうするのが当たり前。鬼？悪魔？なんとも言いやがれ。それが俺の道だ。

「ん？」

歩いている中で、なんとも場違いな光景を目にする。周りの建物がボロボロになっていく中で、それだけが異色な雰囲気を持って建っている。それには妖怪が襲った形跡はなく、俺の能力が及んだ形跡もない。

ふと、唐突に思い出す。

家に未練を残さないでおけよ

「ハハッ どうやら、未練が残っていたのは俺の方だったようだぞ？」

聞き手に届くはずもない、ただの独白。俺はどつやら、ちょいとだけ人間に近づいてしまったらしいな。

「・・・また、いつの日か会おうじゃないか。その時には、いい物件を用意してやるよ」

そういつて、目の前の建物に掌てのひらをかざす。それが閉じた時

戦争が終わった

第十話　く楽しいけどコレ戦争なのよね　人妖大戦く（後書き）

どうでしたでしょうか？

それでは質問の受け答えをしたいと思います。

Q　えーりんの「りん」って違わなかったっけ？

A　いや、淋であつてると思います。・・・あれ？違ったっけ？もう一度調べてみます。

Q　鬼蜘蛛って死ぬの？

A　鬼蜘蛛さんは以上に生命力が強いため、首を切られてたりしてももすぐくつつきますが、バラバラにされると死にます。劣化不死ですね。

Q　この時代からスペカだと不味いんじゃないあ・・・？

A　原作まではスペカというより「鬼蜘蛛固有の技」という位置で使わせてもらいます。もちろん、原作にはいったらスペカとしてそのまま使います。

他に要望があれば、出来る限り反映したいと思います。

質問、意見、感想、批評などお待ちしております。

どうぞよろしく願います。

第十一話　くむ？私の主観で進めるのですか？御館様ではなく？

鬼童丸主観く

ども、M r・Xです。

なんという難産・・・！時間がアホみたいにかかったくせにクオリティも低い・・・！もう最悪です。

感想への返信もできず、またこんなにも時間がかかってしまい、本当に申し訳ございません。それでも見てくださっている方々、本当にありがとうございます。こんなバカ作者にどんな罵声を投げかけてもらってもかまいません。それだけのことをしてしまいました。

それでは　第十一話　くむ？私の主観で進めるのですか？御館様ではなく？　鬼童丸主観く　をお楽しみください

『徹底的に壊せ』

御館様はそう言われた。何を？ と聞くほど、私や夜天丸は馬鹿ではない。そんなものはわかりきっている。御館様が壊せというなら、壊すだけだ。それ以外はない。

先程、自身が「死ぬかもしれない」と言われた。・・・失礼な話だが、私はそれを聞いたときに『誰が死ぬって？ なにを仰っているのかサッパリわからない』と思ってしまった。夜天丸のほうに目を向けたら、彼も私と同じ考えをしていたと一目でわかった。目が猜疑心まみれだったからだ。

御館様は、基本的に死ぬ事はない。同じ妖怪の観点から見ても驚異的な再生能力と、それを支えている莫大な妖力がそれを可能にしている。日ごろから死合い・・・文字通りの意味だ・・・で傷を受けても、受けた端から再生する。まさに不死身。厳密に言えば、死ぬ事は死ぬが、細切れにならなければ死ぬ事はないだろうとの事。私の頭の中で、御館様を細切れに出来るほどの力をもったものは存在しない。・・・抵抗できないとするならば、楓様を上げようか。

御館様は、いろんな所に頭が回り、最強といっても差し支えない力をお持ちなのだが・・・いかんせん、女性関係には疎い。御館様に気付かれないように、しばしば町へ見に行っていたのだが・・・彼女も、御館様に気があると見ていいだろう。あれを、自覚してやっているのか、無意識なのか・・・御館様のことであろうから、無意識だろう。このことを楓様にご報告したらどうなるやら・・・十中八九突撃を敢行されるところが目に見えかねてくる。

それを思つて溜息を一つ。御館様に不審がられたが、なんでもないと流す。夜天丸が目の端で苦笑いしている。・・・やはり考えている事は同じらしい。

「つーコトでだ、お前らは他の連中に発破をかけて周囲の人間を襲え。・・・まあ、他の連中といつてもあいつらだけで充分事足りるだろ。東と西の協力を得るにはそれが一番だ」

「東と西・・・それでは」

「ああ、ぬらりひよんのクソガキと羽衣はしろもに手を貸してもらつ」

東のぬらりと西の羽衣

羽衣というのは羽衣狐様のことであり、ぬらりひよんは言わずとも知れているだろう。どちらも強大な妖怪であり、拠点としている地域が正反対に位置することからそんな通り名がつけられた。ちなみに、ぬらりひよんと羽衣狐様は敵対関係にあり、長いこと争っている。そんなようなことから通名由来はきている。ちょうど中間地点にいる御館様が、何とか取り繕つて今のところは争いは起こってはいないが、仲はいまだ険悪である。

ちなみにだが、ぬらりひよんは楓様のことを気に入っているらしく、楓様が直接『お願い』すれば大抵のことは聞いてくれるらしい。羽衣狐様は・・・御館様が気になるらしい。ぬらりひよんは、自分の口から『気に入っている宣言』をしているが、羽衣狐様はそうではない。あの方は、普段は見るものを惑わしてしまうほどの妖艶さを見せているが、こと御館様の前だと途端に初心な少女同様な反応をするという、言つては何だが面白いお方だ。そのため、側近の方々

は彼女を応援したり、普段見せない姿ににやけたり、なかなか前に進まないことにやきもきしているとか。

さっき言った御館様の取り繕いというのも、少なからず関係してくる。ぬらりひょんは楓様に『お願い』されれば頷くし、羽衣狐様も御館様に言われればブツブツ言いながらも了承するわけだ。惚れた弱みという奴なのか。

御館様と羽衣狐様とぬらりひょん この御三方が互いに拮抗した勢力を持ち、妖怪のパワーバランスをとっているわけだ。まあその中でも御館様が一番強い事には変わらない。

「で、だ。鬼童丸はこいつらの所に行つて説得して来い。夜天丸はその間に妖怪をかき集める。おそらくは長丁場になる筈だから多い方がいい。俺は夜明け頃に先に行つて、先行している人間もろとも本丸を叩き潰してくる。さっきも言ったとおり、俺は単独でいく。お前らは他の人間の事だけを考えてろ」

そこで、夜天丸が御館様に聞き返した。

「ですが、本当に宜しいので？少しは率いていったほうがいいのでは？」

夜天丸が懸念していることは尤もではある。御館様が負けるなんて微塵も考えてはいないが、やはり数はあつたほうがいい。その分自身の負担が減るからだ。しかも今回の人間の数は今までよりも遥かに多いことはわかつている。私自身が確認してきたため、間違いはない。そこに単独で挑むということは自殺以外の何者でもない。まあ、御館様に常識を当てはめて良いもののかはわからないが。

「心配すんなって、今回ばかりは本気で行くからな。俺だけのほうが都合がいい」

御館様の言う『本気』の意味を悟ってか、夜天丸が若干引き気味になる。・・・かくいう私でも寒気を覚えた。

夜天丸が、半ば恐々としながら問う

「するつてえと・・・アレですかい？」

「ああ、アレだ。だから俺だけが行くと言ったんだ。アレは俺以外無差別に攻撃するからな。攻撃されなくとも、生半可なやつじゃあいつ等に吞まれるだけだ」

アレ 以前御館様が見せてくれた口に出すのも憚られる技。冥界の住人、また冥界に行くべき者を御館様の妖力という名の鎖でつなぎ、隷属させるという恐ろしいモノ。御館様は、それらを「怨霊妖怪」と言っていたが、アレはまさしく怨霊だ。それに命を奪われたものは同じ運命をたどる。発動したら最後、さながら疫病のように広がり、後には数が獲物の分だけ増えたそれらがいるだけ。

それを理解した夜天丸の顔には恐怖がありありと浮かんでいる。多分、私の顔も同じようなことになっているだろう。

夜天丸が口を開く

「・・・それなら納得でさあ」

「だろ？わざわざ死に行くようなもんだからな

・・・楽しいだろうなあ」

御館様の口の端が上がり、笑みが張り付く。いつものような楽しそうな笑みだが、そこに含まれる感情がいつもと異なることに私は気づいた。

背筋が凍る

血の気が引く

すぐそこで宴会をしている鬼神達の声が酷く遠のいた気がする

笑みだけでここまでの恐怖を植えつけることができるのは御館様ぐらいではなかるうか？

この恐怖の最中さなかにこんなことを考えることができた自分を褒めたいぐらいだ。

「・・・なぐにをびびってやがる」

御館様のその一言で、私たちは我にかえった。夜天丸の方から安堵のため息が聞こえる。私も、ため息こそしなかったが心底安堵している。

「・・・申し訳ございません」

「・・・すみません」

「謝る必要なんか無^ねえんだがな。まあいいや、俺は宴会に混じってくるから説得宜しく」

そういうと御館様は疾風のごとき速さで向こうの妖怪たちの輪に入っていく。混じった直後から御館様の声と周囲からの歓声が聞こえてくる。

「ひゃっはー！酒じゃ酒じゃあ！飲め飲めえ！」

「鬼蜘蛛！飲み比べだ！今度こそ「参りました」って言わせてやるぜえええええ！！！」

「ほーう、いい度胸じゃねえか鬼神よお。いつものように、お前が地面に突っ伏しているところを笑いながら眺めてやんよおおおお！！！」

「おにいぐもしやま！おれもしゃんかしましゅ！こんろこそあにやちやにきやあああつ！！！」

「お前、結構酔ってるだろ。何を言ってるかさっぱりわかんねえよ。しかもそれ、女が言つと可愛いことをお前が言っても気持ち悪いだけだぞ」

「がんばれー！あなた」

「あ、ああ兄様がんばりや・・・あう、噛みました・・・」

「ああ！噛んでる楓も可愛い！でも父さんには応援してくれないのね！？」

「当たり前です」

「んな！？・・・だが！今回の鬼神は一味違っぜ！楓への愛の力を駆使して飲みまくってやる！」

「うるせえ！この親馬鹿（変態ver）が！！一応突っ込んでおくが、飲む量と愛の力なんつーものは無関係だ！ドアホ！」

「うるせえわ！お前にはこの気持ちがわからんだろうな！この、楓に対する熱き思いが！」

「わかりたくないわ！このボケ！」

「え・・・兄様・・・？」

「うらあああ！てめえ楓になんて顔させてんだあああ！！死ねええ！！！！」

「上等だコラア！前哨戦じゃあああ！！！」

ギャーギャーと喧騒が聞こえてくる。御館様は、本当に自由だ。

「だからこそ、あの方についていくのでしょうか・・・」

「だろうな」

夜天丸と二人で、その喧騒を眺める。相変わらずの、光景。これを守るためかどうかはわからないが、すべては御館様の意思。私たちの役目は、御館様が進む道を支える事。それは、未来永劫代わりは

しない。

「さて、大將が行ったとおりにやるか。俺は周辺の妖怪をかき集めてくる」

「では私は、羽衣狐様のところに行くとします。あそこは簡単ですからね。といつても、別の私に行かせるので、この私自身は向こうに混ざりに行きますが」

「・・・いいなあ。じゃあ俺の分の酒も残しといてくれよ」

「わかりました」

「畜生、俺も大將と酒、飲みたかったな・・・」

どうでしたでしょうか

これは、鬼蜘蛛が戦争に行ったときの妖怪の山側の観点で進めています。おそらく、この話が前編扱いになって、次が中編か後編になる予定です。書いてみないとわからないものですから。

それと、感想をいただいて、自分でも調べてみた結果、見事にえーりんの字が間違っておりまして。感想で指摘してくれた昇龍銀行さん、教えてくれた夜籬さん、ありがとうございます。修正はしましたが、まだ直していない部分があるかもしれませんので、誤字脱字等がありましたら指摘してください。よろしくお願いします。

その他細かいところも、感想を参考にして修正しましたので、最初から見直してみると面白いかもしれません。

ここで報告。主人公紹介を更新しました。結構東方の世界に関わってくる設定が地味に追加されましたので、ご覧になってください。『最近』のところです。狐、ただけ言えば皆さんはわかると思います。

感想へ完全に返信することができていません。重ね重ねお詫びを申し上げます。本当にすみません。

こんな作者で宜しければ、次の話でまたお会いしましょう

ではノシ

お詫び

どうも、M r . Xです

御免なさい。本当に御免なさい。

半年以上音信不通のまま、この小説をほったらかしてしまつて申し訳が立ちません

受験という邪魔者がいても、活動報告ぐらいはするべきでした

その結果、今こうして見てくださる読者様方の気分を害してしまつたかと思うと、本当に申し訳ないです

こんな作者では、小説を続けることが許されないかもしれませんが、私自身はこの小説を続けていきたいと思つております。途中で打ち切りということは絶対にありません。

読者の皆様、本当に申し訳ありませんでした。

最新話は、目下のところ製作中です。

こんな作者の小説で宜しければ、なにとぞ、これからもよろしくお
願いします。

それでは、次話でお会いいたしましょう。

第十二話　「おい、まだお前なのか？　ええ、その様です　羽衣狐　交渉」

ども、Mr・Xです

こんな筆者の駄文を待ってくださってありがとうございます

さて、今回は「さろつ二世」様の投稿キャラ『回天』を出させていただきました。さろつ二世様、ありがとうございます。

では、第十二話　「おい、まだお前なのか？　ええ、その様です　羽衣狐　交渉」をお楽しみください。

第十二話　くおい、まだお前なのか？　ええ、その様です　羽衣狐　交渉く

く西方　にしがた　羽衣狐の住処く

何時ぶりだろうか？此処に訪れるのは。最後に来たのが、御館様と一緒に宴会に呼ばれた時だったから・・・

「百年ほど前か？」

我々妖怪の間では、宴会の規模というのが、勢力誇示の方法の1つになっている。他勢力を宴会に招待することで、自分に付き従う妖怪の数を見せ付け、無防備な状況に招き入れることができる余裕を見せつけることで、力の大きさを誇示するというものだ。しかし、最近はこのような解釈はされなくなり、単純に楽しむ事が主流になってきている。

「いずれにしても、相も変わらず大きな屋敷だな」

森の中にある、自然と一体化しているように見える屋敷を眺めながら呟く。私の目の前には屋敷の大きさに見合った巨大な門がある。なんでも、生半可な力では動かすことすらできないらしい。

一見して門番がいらないようだが・・・おそらく土の中にでもいるのだろう。そう思い、門の手前まで近づく。

んあゝ？客人かあゝ？

どこからか間延びした声が聞こえてくる。

「まあ、客人だろうな」

そう返事を返す。

その声、どうかで聞いたことあるんだけどなあ？
気のせいかな？

「気のせいではない。百年ほど前、御館様と一緒にあったはずだと思うのだが？」

百年前？御館様？・・・ああ！

その声が聞こえた少し後に、私と門との間にあった地面が盛り上がり、地中から大きなしゃれこうべが飛び出してくる。一抱え以上ある目玉が動き、私を捉える。

「鬼童丸だったのかあゝ！久しぶりだなあゝ」

「百年ぶりだな、がしゃどくろ」

そう、この地面から出ているしゃれこうべはがしゃどくろという妖怪だ。妖怪の中でも、比較的力量が強い。本当は全身があるのだが、たいていこいつは地面に埋まっている。それで、用がある時はこうして頭だけがでてくるというわけだ。

「んで、今日は何の用だあ？」

「ああ。御館様から、羽衣狐様に話がある。門を開けてくれないか？」

「旦那からあ？もしかして、人間のことだったりするのかあ？」

余談だが、ここでは御館様は『蜘蛛の旦那』と呼ばれている。

「ま、そういうことだ」

「わかったぜえ。今、門を開けるからなあ」

そういった直後、がしゃどくろの両側の地面が盛り上がり、今度は腕が飛び出してくる。これも白骨だ。

「よいしょおー！」

その両腕で、門がゆっくりと開かれる。何でも、がしゃどくろでしか門は開けられないのだとか。

がしゃどくろは、小さな山ぐらいたったら持ち上げられる怪力を持っているらしい。嘘かどうかは定かではないが、それほどの力を持つがしゃどくろが、両腕に目一杯力をいれて初めて開くというのだから、この門の凄さがわかるというものだ。

御館様は片手軽々と開けていたが、あの方は規格外だからか。もはや驚くことも無くなってしまった。

門を通った後、すぐに妖怪ができて案内をしてくれた。要件を聞かなくてもいいのか？と考えたが、ある結論に辿り着く。がしゃどくろの声は大きい。おそらく、私との会話を聞いたのであるう。確認してみると、やはりそうらしい。羽衣狐様は、すぐにあってくれるとの事。

案内されたのは、見覚えのある大きな広間。以前宴会をしたところだ。広間には一段高い場所があり、そこには百年前と少しも変わらない美貌をもった妖怪がこちらを見下ろしていた。彼女こそが、羽衣狐である。

「お久しぶりで御座います、羽衣狐様」

「うむ、久しぶりだな。百年ほどか？」

「ええ」

そのあと他愛のない雑談をする。羽衣狐様は、御館様のいう「せえらあふく」なる着物を羽織っていらつやる。たまに御館様は意味の分からない発言をなさることがある。「せえらあふく」

というのは、御館様が羽衣狐様に初めて会ったときに漏らした意味不明な言葉のひとつである

『馬鹿な・・・！？ 漫画そのままの上にセーラー服だと！？』

あの時の御館様の驚愕した顔は今でも忘れられない。それ以上に

『でも胸はちっこいのな・・・』

という、隣にいた私ですら辛うじて聞こえたくらいの御館様の呟きに、羽衣狐様が異常なまでに反応して御館様を吹き飛ばした時の光景が忘れられない。

「で、雑談をしに来たわけではないだろう？要件はあらかじめ聞いてはおるが、詳しいことを説明してくれんか？」

「はっ では、現在の私たちの状況と御館様の考えですが・・・」

將軍説明中・・・・・・・・

「ふむ・・・要するに最近でしゃばってきた人間どもを殺したい。だが、そのためには外からの協力が必要・・・それで妾のところに来たというわけか」

「おっしゃる通りでございます」

多少ばかり違う所もあるが、今は『協力が必要』ということさえ理解していただけたらいい。

「ところで・・・鬼童丸？」

「はっ」

「ここに来たのは・・・その・・・お前の独断なのか？それとも・・・いや・・・」

そこまでいって、若干顔を赤らめながら言葉を濁す。・・・なるほど、言いたいことはわかりました。

「御館様は、羽衣狐様を名指しで選ばれましたが？」

「そうか！・・・あの方が、直々に、私を必要としている！・・・うふ、うふふふ」

さっきまでの威厳は何処へやら。いまやその顔は隠しきれないほどに緩み、両の手のひらを頬に当てながら夢見心地にいる。こんなところを部下に見られたらどうなるのだろうか？

（ああ～羽衣狐様幸せそうだな～）

（馬鹿！大きな声を出すな！）

（蜘蛛の旦那も幸せだな。羽衣狐様にあんなに思ってもらえるなんて）

（そうそう。俺だったら昇天するね、幸せすぎて）

・・・その心配はいらなかったらしい。後ろの襖の向こうから声が聞こえてくる。羽衣狐様は、当分の間「あっち」に行つて戻つてこないだろうから、こちらの話に耳を傾けてみる。

（でも旦那は気づいていないっぽいぞ？）

（旦那って鈍感っぽいからなあ）

っぽいのではなく鈍感だな

（なぬ！？羽衣狐様の気持ちも知らずにいるだと！？）

（しょうがないだろ？旦那は自力で気づかないし、羽衣狐様は旦那を前にすると何言つてんだかわからなくなるんだから）

（なら！蜘蛛の旦那を引きずり倒して、耳元で言い続けられ）

（いや、無理）

（力づくつてのが前提である時点で無理）

（・・・だよなあ。仮に俺たち全員で襲いかかっても、笑いながら

ぶん殴られて終わりだよな)

正確には、狂った笑いをあげながら全員残らず叩き潰されて地面に埋まる、だがな。さすがに殺しはしない。

(なら、俺たちに出来ることは?)

(決まってるだろ)

(羽衣狐様の幸せそうな表情をみて)

(あの美しい笑顔を見て)

(((悶えることである!)))

後ろの三匹が新しい世界を開いている時に、ようやく「あっち」から戻ってきた羽衣狐様の目の焦点が合う。・・・いや、戻らされたと言っべきか。焦点が合った目が真っ直ぐに私の後ろを捉えているのだから。

(((・・・あ)))

羽衣狐様の顔が見る見る内に赤くなっていく。その、怒りと羞恥心

と殺意に満ちた赤みが顔全体を覆った所で

二尾の鉄扇

羽衣狐様が、自身の尻尾から取り出した巨大な鉄扇を襖に向かって投げつけた。轟音と共に襖と三匹の妖怪が吹き飛ばされていくのが背中越しにも分かる。

三尾の太刀

ヒタリ、と私の首筋に抜き身の刃が添えられる。そこまで認識したところで、背後から声が聞こえる。

「・・・分かつておるな？鬼童丸」

「分かっています。私は何も見ていません。御館様に手をひかれて野原を歩いている所を想像して身悶えて

そこまで言ったところで、本気で身の危険を感じ、即座に存在を別のところに移す。さっきまで自分の首があった場所の後ろには、太刀を振りぬいている体制の羽衣狐様がいた。本気で殺すつもりでし

たね？今の。

一瞬驚愕の表情を浮かべたが、私が存在を移動させたことを悟ると周りを見渡される。そして、私の姿を見つけると、顔を真っ赤にして、こちらに切っ先を突き付けながら怒鳴られた。

「分かっておらんではないか！大体なんで妾の考えていることが分かるのだ！」

「ということは、凶星ですか？」

「うぐっ」

「凶星なのですね？」

「う、うるさあーい！妾が何を考えていようと妾の勝手じゃー！」

ムキー！と顔を真っ赤にしたまま、手をバタバタさせて叫んでくる。その際に太刀も振り回しているので結構危ない。まあ当たらなければどうということでもないのですが。

「なるほど・・・あの三匹がああ反応をするのも分かる気がしますね」

羽衣狐様に聞かれない程度に呟く。端正な顔立ちをした美女がそんなことを逐一していれば、なるほど配下の忠誠心も上がるだろう。・
・忠誠心といっても良いのか不安だが。

「なんか言ったか？」

「いえ、何も」

猜疑心あふれる眼でしばらくこちらを睨んだ後、溜息をついてもとの位置に座られる。もちろん太刀はしまわれており、小さくなった扇で自らを仰ぎながらこちらに喋りかけてこられた。

「此方^{いづち}としては協力をするのもやぶさかではない。確かに最近の間どもの動きが活発になってきて、妾^{めかけ}の傘下の者どもが何匹かやられておるからの。ここらで身の程をその身に叩き込むのも悪くない」
ただ、と間を開けて不機嫌な表情で言葉を続けられる。

「あの小僧と短い間でも共闘するのが気に食わん。・・・あのクソガキめ、よりによつて妾^{めかけ}の事をババアじゃと！？妾はまだ若いわ！
！それに妖怪^{やまが}の間では年月を経た者が強者なのじゃ！生まれて間もないクソガキに言われる筋合いはないわ！」

息を荒げて主張する羽衣狐様。その眼は血走り、九本の尾はすべて毛を逆立てている。鋭い牙がチラチラと見えるあたりから、若干本性が出てきているのが分かる。

前も言った通り、羽衣狐様とぬらりひよんの間はすこぶる悪い。何百年にわたって殺し合いをしている仲だ。御館様の頼みとはいえど、簡単には了承しがたいのだろう。短い間でも、殺し合いを演じてきた相手と手を取り合うのは躊躇するだろう。

御館様と羽衣狐様がクソガキ扱いしていることから分かるように、ぬらりひよんは三大勢力の中でも比較的新参だ。しかし、その力は羽衣狐様とほぼ互角であり、その力に惹かれて集まってきた若い妖怪も少なくない。年月を相応に経た妖怪も、その力に魅せられ傘下

に入っていくのだという。その結果、若いながらも大きな勢力を持つているというわけだ。

羽衣狐様はそれが気に入らない。年月を多様に経たからこそ、新参の妖怪に力で並ばれるのが嫌らしい。まあ、その気持ち分らないでもない。私も、彼女と同じ立場なら相応に嫌っていただろう。ちなみに御館様は気にしてないらしい。強ければ良いとのこと。

「妾のは・・・ちょっと内気なだけじゃ・・・」

今度はご自身の胸のあたりを見て落ち込まれた。どうやら彼女の尊厳に関わることも言われたのだろう。何がと言わないが。話が進まないで、こちらから話しかける。

「意気消沈しているしている所申し訳ないのですが・・・」

「こつちから話しかけてもそつぽを向く恥ずかしがりやなだけなのじゃあ・・・」

駄目だ。完璧に変なツボに入って話を聞いていない。

「あらら、誰かと思えば鬼童丸じゃないか」

後ろから新しい声がする。ふと振り返ってみると、蛇が纏わりついている髑髏どくろを胸に抱えた少女が立っていた。彼女は狂骨といって、羽衣狐様の側近でもある。

「いまさら、だがな」

「しょうがないだろ？私だって仕事してたんだよ」

眼が明後日を向いている。

「本音は？」

「寝てた」

「寝てて良いのか？」

「良いんだよ、やることないし。・・・で、今日は何の用なんだい？」

將軍再説明中・・・

「ふーん。確かに、人間等最近煩いしねえ。ここらで一つ暴れるのもいいかもね。ま、あたし等はお姉さまに従うだけだけど」

「ああ。・・・狂骨、羽衣狐様をどうにかしてくれ。話がでкин」

「お姉さま？・・・ああ、いつもの発作ね。ちょっと待っというて」

いつも？いつもこんな光景がここでは見られるのか？少し心配になってきた。

私がそんなことを考えていると、狂骨が俯いてブツブツと呟いている羽衣狐様の耳元に口を寄せて何か囁きはじめた。小声なのであまり聞き取れない。

「うっ、どうして妾の胸はこんななのじゃ・・・」

（お姉さま？大丈夫ですよ。お姉さまは十分魅力的ですよ？）

「じゃが、どうせあ奴も大きいほうがいいのじゃ。妾にはどうしようもないのじゃ・・・」

（大丈夫ですって。鬼蜘蛛様はそんな方じゃありませんよ）

「・・・本当か？」

（本当ですよ。それに、仮に大きいほうが良いとしてもお姉さまの魅力で『そっちのがいい』と思わせれば良いだけですよ）

「・・・無理じゃ。他の者どもならば骨抜きにする自信があるが、あ奴は無理じゃ。前にすると頭が真っ白になって何を言いたいのかわからなくなる・・・それに、会う機会なんてほとんど無いではないか」

（無いのなら、作ればいいんですよ。鬼蜘蛛様の頼みを聞く代わりに、なにかその様な要求をすればいいのですよ）

「いいのか？それは妾のみの願いであろっ？」

（いいえ、私たち全員の願いでもあるのですよ。お姉さま？私たち

は、全員がお姉さまの恋を応援します！)

「狂骨・・・お前・・・」

何やら感動している様子だが、どうかしたのだろうか。

「しかしどうすればいいのだ？」

(この戦いが終わった後、鬼蜘蛛様を一時期借りるというのはどうでしょう？滞在している間に親しくなっておけば、少なくともお姉さまに好意を持ち、あわよくばそのまま此処に一居座 いすわらせることも不可能じゃありません。)

「そ、それは・・・無理じゃ。言つたろう、妾はあ奴を前にすると頭の中が無茶苦茶になると」

(なら、宴会をここで開かせてもらうというのはどうですか？大勢でどんちゃん騒ぎをして、浮かれている状況なら多少はマシになると思いますよ)

「うむ・・・そうかもしれない・・・よし」

話が終わつたらしい。何かを決意したような眼をした羽衣狐様は、一つ呼吸を置いて話しかけてこられた。

「鬼童丸。この話、条件付きなら乗ってやろう。短期間でもあの小僧と協力するのは癪に障るからの。部下たちも納得いかんだろう」

まあ、そうだろう。いくら御館様の頼みでも、長期間殺し合いを演じてきた相手と手を結ぶのは流石に無理がある。

「わかっています。して、条件とは？」

「うむ。この戦争が終わったら、妾たちのところで宴会を開かせてもらう。恐らく、この戦争で多くの同胞が散るだろう。だからこそ、我らの力というものの誇示せねばいかん所だと妾は思っている」

「・・・なるほど。流石に、相手の力を見誤られるほどではないか。『油断なき余裕』を持ち合わせているからこそ、三強の一角を占められているわけだから当然と言えば当然なのだな。」

「・・・あ奴らの力を過少評価などせんよ。殺^やられた部下どもの中には、妾の下^{もと}から出て勢力を作り出せる力を持った奴もおった。そ奴らを、まるで塵^{ちり}のように消し飛ばしていった連中に舐めてかかつては、こっちが死ぬだけじゃろうて」

だが、と羽衣狐様は続けられる

「死ぬ気などせんよ。妾も最前線に出る。場合によっては、『九本目』まで出す必要もあるかもしれないが・・・仕方あるまい。『あれ』を使うのには抵抗があるのだからな。」

とにかく、そんな状況を戦い抜きボロボロになったように見えても宴会を開き、なおかつ最強の勢力であるお主らと呼ぶことによって他の連中に見せつけるのじゃよ。

『あいつらにはまだ余裕がある。ヘタな手出しはこちらが死ぬ』とな。

まあ、そんなことを考えるほどに余裕のある状況になるとは思えん

のじゃがな。一応の保険じゃよ」

言われてみれば確かにそうだ。御館様が仰おつしやつた通り、人間と妖怪の総力戦になるのは必至。そのどさくさに紛れて、名を上げようとす
る馬鹿がいるかもしれない。そんな時に、三強を一打倒 うちたお
そうと動くかもしれない。羽衣狐様としては、無駄な血を流した
くないのだろう。三強と言っても、戦争の後なら必ず疲弊している。
私だって死んでいるかもしれないし、牛鬼兄弟や鬼神殿だって死ん
でいるかもしれない。

そんな状況で他の妖怪が攻めて来たら？

最悪、勢力そのものが瓦解がかいしかねないし、生き残っても『攻撃され
た』という事実により、他の妖怪に舐められて次々と襲いかかつて
来られるだろう。

羽衣狐様としては、負けるつもりは無いにしろ、面倒くさいのだろ
う。だから先手を打って、牽制するつもりなのだろう。

そうとするのなら、相手が御館様というのが一番好都合なのだろう。
最強と名高い御館様を招く事が出来るだけの余裕があるということ
を見せつけられるのだから。

御館様が羽衣狐様の立場でもそうする・・・いや、『舐められても、
次々と戦えるんならいいかもな』とか言いながら虐殺していくのが
容易に想像がつく。間違っていないと断言できないところが御館様
の恐ろしいところだ。

「わかりました。御館様に確認させてもらいますので、少々お待ち
ください」

「うむ。断ることなぞ無いとは思うがな」

「交渉は終わったか？鬼童丸」

向こうの私が話し終えた折に、御館様が話しかけてこられた。

「はい」

「で？条件が何か吹っかけられたらろう？」

「はい。羽衣狐様は、『戦いの後の宴会は、こちらで主催させてもらう』とのことでした」

「宴会？・・・ああ、なるほど。確かに効果的かもしれんな」

「先々の事を考える余裕があるからこそその選択でしょう。其処らの雑魚どもなら、目先の利益しか求めないものですから」

「そうだな。しかし、戦争に宴会は付き物だが、別に他の連中な

らほつといても良いだろうに。襲ってきたら襲ってきたらで潰せばいいじゃねえか。力を見せつけて、なおかつ暴れられる。・・・おる？一石二鳥じゃね？」

「御館様、誰もが御館様と同じ思考である訳ではないということをお忘れなく」

「まあそうだけだよ。・・・酒が切れた。回天！」

「・・・なに？」

御館様の呼びかけに答えるように、薄紫色の髪をした褐色肌の女鬼が近づいてきた。髪は後ろで纏めており、普段はくつきりしている瞳は酒が回っているせいか少し閉じ気味になっている。さらしを巻いた胸元がはだけている着物を着ており、背中に大きく『鬼』と書かれた上着を羽織っている。

回天と呼ばれた少女は、鬼と人間が交わった末にできた半人半鬼である。母方の方は既に他界しており、今は鬼である父方の所にいる。年が近いことも相まって、楓様の良き友となっている。まだ年齢が100に満たないが、その戦闘力には目を見張るものがある。全体の線は細い方なのだが、華奢な見た目からは考えられないほどの怪力を持っている。

「酒が切れたから、代わり持ってきてくれ。こいつの分もな」

「やっぱり」

そう言い返した回天の手には徳利が握られていた。

「気が利くじゃねえか」

「回したから」

何をだろっ？そう思いつつ、御館様の酌を受ける。御館様曰く、
『気を回した』らしい。・・・そろそろ本題に入らなければ。

「で、この条件を呑むのですか？」

「呑まなきゃどうしろって？不利益になることなんぞ無^ねえんだから
よ」

「何の話？」

「こつちの話だ。知らなくてもいいぞ」

「そう」

そういった回天は、別の場所に去って行った。楓様の所にでも戻ったのだろう。

「では、そう伝えておきます」

「おうよ。同じ酒を飲むんなら、美人さんに酌してもらった方が美味いだろうしな」

「・・・それは素ですか？」

「何がだ？」

「・・・いえ、何も」

私は今、御館様の無頓着さを目の当たりにした。あんなことを素で言うことができる所が、御館様の御館様たる由縁なのだろう。あまり気にしないでおう。今更だが。

「御館様は、条件を呑むそうです」

「そうか！・・・いや、わかった。下がってもよいぞ」

いきなり大声を出されたので、少々驚いてしまった。不覚。

「ねえ、鬼童丸。鬼蜘蛛様は他に何か言ってなかった？」

傍らにいた狂骨が聞いてきた。

「他に？・・・ふむ」

これと言ってもよいものか。言ってしまうと、絶対にややこしいことになるが・・・まあいいか。言った後すぐに此处から消えればいいだけの話だ。

「他は、『同じ酒でも、美人に酌してもらった方が美味しい』と仰っていました。では、私はこれで」

消える瞬間、一瞬呆けていた羽衣狐様が顔を真つ赤にさせて卒倒するところと、それに慌てて支えようとする狂骨の姿が目に移り、すぐに立ち去ってよかったと後になって思うのだった。

「誇示云々が本音なのか、それとも単に恥ずかしいのか。前者なら何ともないが、後者の場合はどうなのだろう？『素直になればいい』と言ったら、怒られるだろうか？」

『そんなに簡単になればたら苦労せんわ！』とかいいながら、太刀で切りかかれる所が思い浮かぶ。

本当に、そろそろ気づかれたらどうですか？御館様。

第十二話　「おい、まだお前なのか？」

ええ、その様です

羽衣狐　交渉

長かった。すごい長かった。

感想、指摘、批判、誤字、批判、脱字、罵倒などありましたらお気軽に頂ければとおもっております。

あと、無いとは思いますが、クロスや後の展開のリクエスト等ございましたら、メッセージボックスの方によりしくお願いします。

次の展開、ぬらりひょん側を書くべきか否か、それが問題だ。

というわけで、こんな駄作者を、今後ともよろしくお願いします。

<追記>5月22日　活動報告にてお知らせがあります。よかったらのぞいてみてください。

第十三話　『い』と『ゐ』って何が違うのか分からない　兎　贈り物　く

ども、Mr・Xです。

ようやく、前に進めそうです

第十三話　『い』と『ゐ』って何が違うのか分からない　兎　贈り物

「ん、やっぱ残しといった方が良かったか？」

何してるかって？永琳に紹介する為の物件を探してるんだよ。いつ帰ってくるか分からんからな。今のうちに用意しといった方がいいんでねえの？っつゝ事。

まあ、不動産屋なんかある訳ねえから自分で作るかどうかしないといけないんだがな！

ん？『破壊した事実』をまた破壊すればいいじゃねえかって？それができてりや苦労しねえよ。能力使ったための妖力がねえんだよ。戦争で人間の数が激減したからな。主要都市の連中は俺が皆殺しにしたし、他の所でも、羽衣狐・俺（鬼童丸）・ぬらりひよんの連合が殺しまくったからな。

人間を皆殺しにしなかったのかって？アホか。そんなことしたら『俺らの供給源が無くなって、妖怪までもが死ぬだろうが。』

とにかく、妖力の源泉である『畏』を作り出す人間の数がホンの僅かしかなくなったから、妖力が回復する量がものすごく少ねえんだよ。これは、俺以外の連中にも言えることなんだがな。ま、妖怪の数まで減ったからバランスはとれてるがな。予定通りだ。

「にしても、宴会は楽しかったな」

羽衣狐の屋敷に行って騒いだ連中は、戦争がおっぱじまる前に比べたらゴミみたいな数しかいなかったが、死んでいった連中の分まで

騒いだから、奴らも安心して地獄に行けるだろう。むしろ地獄にしか行けないだろうがな。今頃の地獄では、人間・妖怪入り乱れて大混雑だろうな。ちなみに楚天丸は山で留守番をしていた。戦争中に負った怪我が治らなく、歩くこともできない状態だったので涙目で俺たちを見送る羽目になっていた。つくづく面白いやつだ。

それにしても、宴会中は羽衣狐が妙だったな。俺に声をかけようとしては口ごもり、また言いかけて口ごもりと繰り返してたし、俺の方から声をかけてやったら

『ひゃい！？』

とかいう想像もできないような声を発したしな。拳句の果てには失神しやがった。そんなに俺が使った杯が嫌なのか？あいつ。そういえば、顔が真っ赤だったな。病気か？だったら悪いことしたな。・なんだ？なぜ俺をそんな目で見る？前にも永琳に言われたことがあるが、朴念仁ってどういうことだ？あ、おいコラ逃げんな！

「・・・まあどうでもいいか。それよりも先にやることやらんとな」

さて、家さがしを再開するとしますk「御館様、失礼いたします」

「・・・だからな？いきなり現れるなど何度も言ってるだろうが。俺の心臓がまた一つ潰れたぞ」

「潰れたところでなんら被害がない上に、即座に再生するので問題ない。と一応突っ込んでおきます」

「気分の問題だ」

「そうですか」

「・・・んで、何の用だ？山なら鬼神たちに預けてきたから問題はないはずだが？」

「そーいや言ってなかったか？俺、根城にしていた山を飛び出してきてるんだよ。まあ、山を放ほつぱり出してきた訳じゃなく鬼神に任せきたわけだから、実際にはまだ俺の山なんだがな！誤解するなよ！もし他の妖怪どもが出張ってきたら俺の名前を出してもいいと言つてあるし、最後の手段として俺が出張るからな！」

「いえ、山のことに関しましては御館様の意向道理に進んでおり、なんら問題はありません」

「んじゃ、何の用だ？」

「回天が『取りに来て』と伝えてくれと」

「・・・何をだ？」

「・・・忘れたのですか？」

「・・・おお！アレができたのか！」

「できなければ『取りに来て』などと言わないはずですが？」

「鬼童丸よ・・・最近冷たくなってないか？」

「そんなことはありません」

「ならいいや」

回天に頼んだ“アレ”というのは、俺専用の武器だ。回天のお袋さんは優秀な鍛冶師だったようで、娘である回天もその技術を受け継いでおり、長年その技術を研磨してきたとなれば一流の鍛冶師にもなれるというものだ。

んで、俺が頼んだ武器というのはズバリ『剣』だ。ん？「日本人なら日本刀だろ！」だと？まあわからなくてもないが、俺の意見を言わせてほしい。まず刀というのは斬ることに特化した物だ。当然使い手にも相応の技術が必要だし、刀というのは総じて折れやすい。俺なら一振りでへし折る自信があるね。何も斬らずとも振っただけで折れるぜ。それに対し剣は「叩き割る」という使い方をする。そのため刀ほどの切れ味は無いにしろ、耐久力があるから折れにくい。俺の場合だと、単純に振り回すだけでもかなり酷いことになる訳で。

ま、そういつたことで俺は剣を選んだのだよ。両刃の。

材料？元・未来都市の残骸をあさったものと俺の腕一本ですが何か？文句でも？

「ひと段落したら取りに行くって伝えといてくれや」

「なるべく早く来てほしいらしいですよ」

「んあ？何故に？」

「押さえておくのが大変だとか」

「ああ、わかった。なるべく早くいくわ」

「わかりました。ではこれにて」

そういつて瞬時に消える鬼童丸。出たり消えたり忙しいやつचना

「なんとという竹林」

俺はいま、ただっ広い竹林の中にいる。行けども行けども進んでる気がしない。最初は、微弱な妖力が漂ってくる方向に向かって進んでいたら、いつの間にか竹林の前に来てそのまま突入していったという。最初に頼りにしていた妖力さえも消えており、いま俺は八方塞がりというわけだ。

要は迷子になったわけだ。いい年こいて迷子とか悲しすぎんだろうがよ。空を走ろうにも妖力が足りないし。クソッ、こんなことなら調子こいて腕に全力こめなけりゃよかった！もうチヨイ残しておけばよかった！俺の馬鹿っ！

「・・・現実逃避してもしようがねえや。とりあえず進んでみつか」

不思議なことに、この竹林には分かれ道らしきものがある。『左に進めば何とかなるの法則』という先人の知恵を実践する時が来たようだな！これで怖いものなど何もない！

「お、さつそく分かれ道だ。左へ行くしかあるまい」

そうして俺は、左へ左へとどんどん進んで行った

「先人ばねえ」

14回目くらいの曲がり角を左に曲がってちよつと進んだところに、なんかでかい日本屋敷みたいのがあった。羽衣狐の屋敷ほどではないにしろ、なかなかの大きさだ。なんでこんなところにあるのが不思議でならないが、まあそれは置いておくとしよう。

「どれどれ、じゃまするぜい」

ふむ、なかなか整っているじゃないか。こっちは・・・居間だな。こっちは・・・風呂か？なんであるんだ？まあいいや。んでこっちが・・・台所、か。やけに綺麗だな。にしもなんだ？ぶつ壊したはずのもんがなんであるんだ？能力がここだけ届かないなんてあるのか？

「む、手紙か？手紙だな？手紙ですな」

これぞ鬼蜘蛛三段活用！・・・そんな目で俺を見ないでくれよ。悲しくなるじゃないか。というわけで、やたらと広い庭に面している縁側に落ちていた封筒を破き、中にあった手紙を読む。

「どれどれ・・・『頑張ってる君へのプレゼント。返品は受け付けません。by創造神』・・・果てしなく胡散臭いな。まあ貰えるもんは貰うときですかね」

道理で、あの未来都市にあったような物があるわけだよ。お兄さん納得。

さて、疑問が解消したところで・・・

「そろそろ出て来たらどうだ？いるのはわかってんぜい？」

庭にある、でかい石の陰に隠れている奴に声をかける。一瞬びくりとした気配がしたが、出てくる様子がない。ふむ、この妖力・・・最初に辿ってきた妖力と酷似してんな。つかそいつそのものだな、こりゃ。

「取って食おうなんぞ考えてねーから安心しろよ」

「・・・ほんとに？」

帰ってきたのは、幼い少女の声だった。俺は声の主を安心させるために、さらに言葉を繋げる。

「ああ。食っても大した事にならねーからな。意味がない」

「・・・」

俺の言葉を信用したのか、ゆつくりと出てくる小さな影。その正体は・・・

「・・・兎？」

兎の耳を生やした少女だった。

「正確には、その前に妖怪がつくけどね」

警戒心バリバリの幼女が、こちらを睨みながらそう答える

「なるほど、人化するほど生きた兎か。化け猫ならぬ化け兎だな」

「そういうこと・・・ところでお兄さんは、この家の主？」

「まあ、そういうことになるな。それがどうかしたか？」

「いや別に。ただ、この竹林の中にいきなりこんな屋敷ができればびっくりするわけだよ。現に、他の仲間はビビッて近づかないし。代わりに私が見に来たら、お兄さんがいたというわけ」

「ふむ、偶然か」

「そ、偶然」

偶然か・・・まあいいや。

「お前さんは、どこに住んでるんだ？」

「へ？そりゃあ近くにある巢だけど」

「そか。んじゃあ一緒に住まねえか？」

「・・・へ？」

「いやなに、入居予定の奴はいるものの何時になるか分からないのでな。一人で住むのにも広すぎるし、何よりつまらん。そこで、さっきの発言に繋がるわけだ。他の仲間も別にいいぞ。」

「いや、一緒に住もうなんて言われても困るんだけど」

「何事も経験だぜ？」

「や、経験て」

「それにだぜ？お前さんは妖怪にしては力の弱い部類に入るし、お前さんの仲間の中でそのレベルまで達している奴なんかいないだろう？そんな中でちょっと力の強い妖怪に襲われたらお陀仏だぜ？」

「むう、まあそれはそうだけど。お兄さん強いのか？」

「俺の名前を知らねえ奴なんていないだろうよ。そもそも数少ない

し」

「・・・そんなら、いいかもね。お兄さん面白そうだし」

「そうだろ？何事も面白ければそれで良しなんだよ」

「それじゃ、よろしくね」

「おう、よろしく」

差し出された手を握り返す。握手といったやつだ。・・・ふむ、それにしても

「お前さん、軽いよな」

「なに、いきなり。そりゃあ見た目に似合うくらいには軽いよ？」

「そうかい・・・よつと」

「え、ちよつ」

ふむ、なかなか良い乗せ心地だ。良いんでねえの？重すぎず、軽すぎず。楓に勝るとも劣らない乗せ心地だ

「・・・なんで私は頭の上に乗せられてるの？」

「いや、なんかな。お前さんを見てると、乗せたくなつたんだ。むしろ乗せなければならぬという使命感というか、なんというか。・・・俺はこうあるべきだという確信があつてだな」

「・・・変なの。まあいつか、私もなんか乗り心地が良いし」

「そうだろう？・・・おっと、まだ名前を聞いてなかったな。なんつーんだ？」

「結構今更だと思っけどね。私は因幡てゐ。好きなように読んでくれていいよ」

「そうか、よろしくな。てゐ」

「うん、よろしく」

「ところで、お兄さんの名前はなんて？」

「俺か？俺は鬼蜘蛛っつーんだ」

「へえ、鬼蜘蛛・・・鬼蜘蛛！！？」

「うお！？頭の上でいきなり大声をだすな！」

「そりゃ無茶つてもんだよ！？え、お兄さんってホントに鬼蜘蛛？同じ名前の別人じゃないの！？」

「鬼蜘蛛なんて名前の妖怪なぞ俺以外しらねーよ。それに、後が恐ろしくて誰も俺の名を語らねーとおもっがな」

「・・・嘘でしょ。私、『妖怪王』の頭の上に座っちゃってるの？」

「何か問題でも？」

「大有りだよ！」

第十三話 く 『い』と『ゐ』って何が違うのか分からない 兎 贈り物 く

これで、少しは進んだでしょうか？

リアルで風邪気味なのでクオリティとしては底辺を突き破っている
と思いますがご了承ください。

評価、感想、批評、意見、質問等あれば気軽に書いてください。作
者が喜び狂います。

では、今回はこの辺で。次回でまたお会いしましょう。

あ、結構前に書いたのですが、活動報告も覗いていってくださいと
うれしいです。

ではノシ

六月二十八日、訂正 道理 通り 訂正してくれた比呂様、あり
がとうございます！

追記 活動報告にて、重要なことがあります。ぜひのぞいていつて
ください。物語構成におけるアンケートをやっております。

第十四話 食事と狐と時々娘。 グロ注意 鬼蜘蛛、親になる (前書き

どうも、お久しぶりです。 M・Xです。

今回は割とグロ注意です。 苦手な方は即まわれ右を推奨します。

・・・いいんですか？それでは、第十四話 食事と狐と時々娘。
グロ注意 鬼蜘蛛、親になる をお楽しみください

「腹が減ったなあ、おい。めっちゃくちやに腹が減ってるんだが」

「ほお？あたひふあふえんふえんだひえど」

「そりやお前、毎日毎日人参三昧で暮らしていんだろうが。今も俺の頭の上で人参食ってるからじゃねえか。つーか食べながら喋るんじゃないよ。髪にカスが落ちるだろうが」

「ゴクン　ふいゝ。ていうか、兄ちゃんも色々食べてるよね？なんでお腹すくの？昨日の夜だつてイノシシ一匹丸ごと食べてたじゃない。こーんなにでつかい奴をさ」

そういつて、両手をいっぱいに広げてどれくらいの大きさだったか主張するてゐ。その拍子に手に持っていた人参を地面に落とすしそうになり、慌てて掴み直したせいで今度は自分が落ちそうになる。どうにかして安定したようだが、その時の行動のせいで俺は深刻な被害を被ったのでその報復をすることにする。

頭に座っているてゐの額めがけて、親指で押さえつけていた中指を開放する。人呼んで、対人型用鎮圧兵器“でこぴん”をくらわせてやる。

「おらっ」

「つつつつ！？」

バチィ！という小気味よい音が響き渡り、頭の上でてゐが身悶えて

いるのが分かる。

「はっはっは、いい気味だ」

「い、いきなり何するのさ！？頭が割れるように痛いんだけど！？」

「さっき落ちそうになった時に、俺の髪を引っ張っただろ？それに
対する報復だ」

「そんなことで私にでこぴんしたの！？」

「ほう・・・もう一度食らいたいらしいな。髪の毛の恨みは恐ろしいぞ？」

「ごめんなさい」

そんなやり取りからしばらくして、ようやく痛みが引いたのである
うてゐが話しかけてきた

「それで？」

「何がだ」

「さっきの話。あれだけ食べてまだお腹減ってるの？」

「いやな？食欲的な意味じゃねえんだよ。なんていうか、本質的な
意味で腹が減ってたんだよ。やっぱりアレだな。久しく人間食ってねえ
からだな。最後に食ったのって何時だったか？」

「たしか、すっごい昔に人間の集落を襲ってからそれっきりじゃない

「かつたつけ？」

「・・・覚えてねえな」

「それぐらい昔だつてことだよ。ところで、本質的な意味ってどういうこと？ 私たちだつて妖怪だけど、別に人間なんて襲わなくても人参があれば生きていけるよ？」

「あゝ、それはだな。お前ら妖怪鬼と俺みたいな妖怪バケモノとはそもそもの成り立ちが違ふんだよ」

てゐ達みたいな所謂いわゆる妖獣という奴は、けもの獣が長い年月を生き抜くことで妖力を得るタイプと、他の獣や人間などを食い続けることで、食った生き物の力を取り入れて成るタイプの二種類がある。その成り立ちゆえに、それまで自分が続けてきた生き方をすることで自らの力を保つことができる。妖怪になったが故に必要な『畏』も、人間が日常生活の中で出す『畏』で十分に補うことができる。

しかし、人間が抱く『畏』が己の存在全てという、いわば『無』から作り出された純粋な妖怪にはそれが無い。其処に存在し続けるには更なる『畏』を得る必要がある、それにもっとも適しているのが人間を襲うという行為なのだ。得ることのできる『畏』が結構な水準で安定している。他の妖怪を襲つて喰らう方法もあるが、襲う妖怪の方が自分と同等かそれ以上でなければ成立しないし、自身が無事でいられるとは限らない。その分成功した時の見返りは大きいし、相手によつては自分の格が上がる事もあるが。

かといって、自分より弱いモノを喰らつても意味がない。想像してみたい。持っているひょうたん瓢箪を酒で満杯にしたいのに、杯の一杯だけこがすきで足りるだろうか？ 言ってみればそういうことだ。大量に食べば

何とか持つだろうが、それでは現状維持が精一杯なために妖怪としての進歩が止まる。この世界は弱肉強食というものが確立しているためにすぐに他の強者に蹂躪されるのがオチだ。

俺みたいに強くなりすぎると、釣り合うだけの妖怪の数がずっと制限されてしまったためにその選択肢が出てこない。その代わりに妖力や『畏』が薄くなるということはあまりないのだが、今回の場合だとそれが当てはまらない。かつての戦争で人間を皆殺しにしなければ、恐怖を骨の髄までしみこませた人間を残すことで俺たちへの『畏』を忘れさせないようにするための物だったのだから。

此处で引つかかるのが、あれだけ『負』の感情を本能レベルで染み込ませたのにもかかわらずに今回のような事が起きているということだ。戦争後の暫くの間は、人間を襲うまでもなくかなりの満足感を得ていた。それが最近になって人間への飢えが生じてきた。この俺がそう感じるのだ。他の同胞たちも感じているだろう。感じてなければおかしい。

しかし、これは別段異常ではない。むしろ、いままで襲う必要がなかったことが異常と取るべきだろう。妖怪が人間を襲うことを必要とするということは、両者の関係が正常になることなのだから。妖怪は、負の捌け口となる代わりに力を。人間は、死と恐怖を感じる代わりに負の捌け口をそれぞれ得る関係へと。

しかし、今までのパワーバランスが俺たちに過度に傾いていたものを正常に戻すということは、俺たち負と同等の正がナニか出てきたことになる。それが以前は、前世でもお目にかかれなかったぐらいの技術だったのだ。この世は常に表裏一体。今まで出てこなかったことがおかしいと言えはおかしいのだが、この変化はつい最近の物だ。そんな期間で、俺たちと同レベルの力を得るというのはなかなか不思議な

事だ。いったいどんなもんなのか・・・

「兄ちゃん！」

「うお!？」

「さっきから呼んでたのに無視しないでよ！」

「ああ、すまん。ちよいと考え事をしていた」

「まったく・・・で？」

「んあ？」

「外にでるの？お腹すいてるんでしょ？」

そうだった。俺は今腹が減ってるんだ。忘れとった。

「・・・そうだな。あんまり難しいこと考えてもじゃあねえや。ちよいと出かけてくるわ」

「うん、いつてらっしゃい。お土産よろしく」

「そうだな、生首か何かを持ってきてやるよ」

「ごめん、やっぱなし」

竹林から出て、人間が居そうな方角へと進んで行く。途中から森に入ったがそれがやたら広がったため、途中からめんどくさくなつてある一点を指して全力で走ったら、森の中のなかに何とも特徴的な道ができた。大木とかをなぎ倒して進んできたから、森が途中から割れたようになってる。空から確認してみた。相変わらずスベツクが馬鹿みたいに高い体だな。森を抜けた俺の前にはただっ広い平原が続き、見渡すと川やら森やらがある。つと、そんなことを考えていたら村っぽいものを発見した。・・・村つつうか集落だな、ありや。住居らしき物も見えるが・・・ありやなんだったっけかな？えらい昔に勉強した記憶がかすかにあるんだが・・・まあいいか

「どうせ、俺の胃袋に収まっちゃうんだからよ」

男は殺すだけ、女子供が狙い目だ。男の肉は固くてお世辞にもうまいとは言えない。かといって不味くもないがな。女や子供は肉が柔らかく、腸はちわたもなかなか美味い。処女だとさらに美味くなり、共通の旨味の出し方として、散々恐怖を与えてから殺して食うとそれはもう格別な味がする。満足感も得れて一石二鳥だ。なんの満足感だ

って？俺あな、性別関係なく苦痛に歪む顔や絶望した表情なんかを見ると、なんていうかな、こう、クルものがあるんだよ。やめてくれと懇願する表情、屈辱や激痛でぐちゃぐちゃになった表情、あゝやべ。想像するだけでゾクゾクするわ。

・・・話がそれたな

「さあて、楽しい楽しいお食事会の時間ですよー？」

歩いて、集落のちょっと前まで来た俺。集落の入り口には門番らしき男が二人立っており、手には槍を携えている。なんか髪型が面白い。頭の両脇でクルクルにまとめてある。これが普通なのか？っていかやばいでしょう。人間を見ただけなのに猛烈なまでの衝動が湧き上がってくる。

早く喰いたい

[illegible]

そんなことを考えながら入り口まで来たところで、例の二人に槍を突き付けられて警戒心バリバリの声をかけられた。やめてくれよ。その槍へし折って心臓抉り取りたくなるだろうが。その顔ぐちゃぐちゃにしたくなるだろうが。

「この村に何をしに来た！理由がなければ通すことはできません！」

229

たくなるだろうが。

「俺か？俺あな・・・」

お前らを喰いに来た妖怪だよ」

言うが早いが、右側の男の頭に裏拳をブチ当てる。パン！という音とともに頭が弾け飛び、あたりに脳髓がぶちまけられ、男の首から勢いよく血が噴き出す。快感。

「なっ！？」

驚愕のあまり硬直した男の顔を掴み、地面に勢いよく押し付ける。数十センチほど地面に陥没し、血だまりが出来上がる。悦楽。

やばい。気持ちいい。もう我慢できない。

集落の方で、こちらの惨状に気付いたのか悲鳴が上がる。どこかに逃げようとする気配がする。

「させねえよ」

鬼蜘蛛式闘技場きつりく

俺の手から放たれた無数の糸が集落全体を覆い尽くしていく。それにつれ、人間エサどもたちの悲鳴が一段と濃くなる。ああ、気持ちがいい。これこそ正に妖怪の本質だ。正に俺だ。

「楽しませてくれよお？」

「お前で最後だな？」

「ひっ」

俺の目の前には、一人の若い女が地べたに座っている。綺麗な顔は恐怖と涙で崩れており、ガタガタと震え、他の人間の血で所々赤く染まっている。壊れる一歩手前にいることがわかる。周りには人間だった物の残骸が散らばっており、地面は血の赤で染まっている。良い光景じゃねえか。襲った人間の中には、他の人間とは違う異質な『力』を持っている奴もいたため俺にとっては嬉しいことだった。あっさり終わると思ったら、そいつらがなかなかの抵抗を見せたからだ。

もぎとった女の腕をかじりながらそう考える。あ、これ美味え。予

想外に美味かったので、その場で全部口の中に放り込み咀嚼する。
目の前にの女に見せ付けるように。

「う・・・ああ・・・」

何度も同じような事をみせつけていたために、もはや吐く気力もな
いらしい。これの前には、赤ん坊を生きたまま踊り食いたからな
目も虚ろになっている。それもそうか。誰だってそんなモン見せつ
けられたら、気力なんて根こそぎ奪われるだろうな。

「なあ、なんでお前だけこんな目にあってるかわかるか？」

「あ・・・」

「お前はいわばデザートな訳だ。これ以上ない絶望を味あわせ、最
後の最後まで殺さない。そうすることによって、味を最後まで高め
ると言うわけだ」

ここでポイントなのが、壊れる直前で止めることだ。壊れてしまっ
たら、それまでの積み重ねが無駄になってしまう。その点からいえ
ば、今回は合格だろう。

「さて、そろそろ楽にしてやろう。仲間の下へ送ってやるよ」

瞬時に元の姿に戻り、女を丸ごと口に放り込む。噛み潰した瞬間、
なんとも言えない味が俺の口に広がった。しばらくその味の余韻に
浸ったあとに、人間の姿になる。満足も満足、大満足だ。久々に人
間の肉を食ったせいかな、何とも言えない高揚感が俺を包んでいる。

「よし、食事も終わったし帰るか」

俺は満足感を感じながら、人間の血で染まった集落を後にするのだ
った。

帰るだけなのだから後は空を走っていけば良いかなとも思ったりしたのだが、『遠足は帰るまでが遠足です！』という言葉がふと思い浮かんだのでまた歩いて帰ることにする。そう決めて歩き出したのは良かったが、完全に家がある方角を忘れてしまった。俺のバカ。

「かといって今更空を飛ぶのも癪だしな・・・」

一度決めたことを再度ひっくり返すのは趣味じゃない。しかし、当てもなく彷徨うのは嫌だな。彷徨ったところで戦えるわけでもなしに・・・いや待てよ？案外良いかもしれん。もしかしたら、あの集落みたい骨のあるやつが居る所に行けるかもしれん。そしたらまた暴れられるじゃないか！

・・・待て待て。それじゃあてゐが心配するじゃないか。あの竹林にだって、てゐ達じゃあ抵抗すらできない奴らだっているんだぞ。俺が居るから襲われないんだから、長時間出でて帰って見たら家全体が血まみれでしたなんて洒落にならん。せつかくの暇つぶし相手が居なくなっちまう。

「まさに究極の選択・・・！」

ぐぬぬ、どっちも捨て難い・・・一方はある意味捨てるのと同義だ。しかし、これから先の事を考えるとだ。俺みたいな奴とバカな事をやる物好きがこれから先現れるとは考えにくいが、逆に強い奴とこれから先でも戦える事ができる可能性は高い。とすると、

「・・・家に帰るかあ。名残惜しいが」

とりあえずは、来るときに通った森でも探すかね

歩くこと一時間ほどでようやく森を見つけた。森と言っても多数あったのだが、幸いなことに目印を付けてきたので一発で分かった。無自覚で付けたんだがな！つーか改めてみるとホントに割れているなコレ。まあそんな事はどうでもいいので、自作の道を進んで行く。道の脇には、根っこから倒れている木やら幹が粉碎されている木な

どが無造作に放置されている。

「ふむ、我ながらいいい仕事をした物だ。・・・あら？なんだアレ？」

道の先に青白く光る何かが居る。在るのではなく居ると感じた理由は、そいつから視線を感じるからだ。害意や敵意などは感じられなためそんなに危険ではないと思う。あっても潰せる。そいつに興味を抱いた俺は、そのまま歩いて近づいていった。そんな俺をことさら怯えるようなこともなく、じい、と見つめてくる何か。ある程度近づくと、光で邪魔されて見えてなかった輪郭が見えてくる。メートルほどの大きさであり、犬のような体にふさふさの尻尾。負けず劣らずふさふさの体毛に、若干細長い顔。狐が座り込んでこちらを見ている状況らしい。よく見ると体が透けており、気配も相まってこの世のものではないと見られる。そんなのが、俺に何か言いたげに見上げてくる。

「どうした？俺を見ても洒ぐらいしか出てこねえぞ。今の俺はなかなか気分が良いからな」

俺がそう話しかけると、その狐はおもむろに立ち上がり、道の脇へと進んで行く。俺が後姿を見ていると、狐はこちらに振り向いて、暫く此方を見つめた後、さらに進んで行く。・・・ついてこい、とな。普段だったら無視して帰るところだが、なぜかこの時無性に気になったため付いていくことにする。

十数分だろうか。さほど遠く歩いた気がしない程度の所で狐は立ち止まり、俺の方を向いてから、視線を誘導するようにある方向を見

る。そちらに目を向けると、屈まなければ通れない位の小さな洞穴があった。

「洞穴くわいづつがどうかしたのか？」

俺がそう尋ねると、狐は洞穴の中に入っただけで、ここまで来たのだから俺も入ってみるが、入り口と同じく内部も狭いために屈みながら進む羽目になった。中は暗かったが、前を歩いていく狐の光でさほど気にもならなかった

ちよつと進んだところで、少し大きめの空間に出た。狐の光が空間を照らし、奥の方に黒い影が見えるのが分かる。先導していた狐はその影のすぐそばまで行ったところで止まり、こちらに来いと言わんばかりに見つめてくる。

「だから何だつてんだよ」

促される（？）ままに近づいていき、光で照らされた黒い影をみてみると、そこには狐が大きな体をまるめて横たわっていた。何かを守るかのように死んでいるその姿は、隣でこちらを見ている半透明な狐とそっくりだ。

「こいつ、お前なのか？」

「クウ」

肯定するかのように一鳴きする。改めて、こいつの生前の姿を観察する。特に外傷は見受けられないため、衰弱死したのが原因だろうか。しかし、なんでこいつが俺をここに連れてきたのが分からない。死ぬ一歩手前の状態や、死んだ後魂が体を離れなければどうに

かすることもできるが、こいつの場合魂が離れて彷徨っている状態なのでもうどうしようもない。自分でもわかってるはずだ。じゃあなぜ？

俺が言いたいことを読み取ったか、霊魂状態の狐は自分の体を広げ始めた。何かを守るような体制は、まさしく守っているものだった。中から出てきたのは、およそ生きてる気配がしない子狐だった。ろくに食っていなかったのかその体はやせ細っている。いや、気配が薄いだけで生きてはいるか。しかし、その命は消えかけであり、すぐにでもこの世とのつながりが切れてしまいそうなほど細い。・・なるほど。

「俺にコイツを救って欲しいってか？」

「クオン」

肯定の意を示す親狐。良い親じゃねえか、俺もそんな親が欲しかったぜ。・・んなことどうでもいいか。

「やれるっちゃあやれるがな、できるかどうかわかんないんだぜ？それでもいいのか？」

今度は鳴かずに、頭を下げてくる。

「いいだろう、今日の俺はご機嫌なんだ。やってやろうじゃねえか」
そう言い放ち、その子狐の上に手をかざして集中する。イメージするのは、一本の細い糸。妖力で作り出したそいつを、今まさに消えかけの命へと繋ぐ。

よし、つながった。後は死の淵から引つ張り上げるだけなのだが、つながっている相手の『生きようとする意思』が強くないと糸が切れてしまう。死者をも『意思』によって甦らせることのできる禁忌の技であるので、二度目は無い。無いのだが、この子狐、存外に『意思』が強い。この分だと成功しそうだ。

「うらっ！」

気合一発、一気に引き上げる。生きるのに十分なレベルまで引き上げたところで、糸を切る。其処には痩せ細った小さな狐の姿はなく、健康的な寝息を上げている幼女・・・幼女！？

「えっ！？ちょ、なにコレ！？どういうことよ！！？」

訳が分らず親の方を見る。親狐はとても満足そうな顔でこちらを見つめ、お礼を言うかのように一つ鳴いた後、スウツと消えていった。完全に消える瞬間に、目をとっさに覆ってしまふほどの光を放って行った。目を開けてみるとそこは森ではなく、我が家がある竹林のすぐ手前だった。お礼のつもりだろうか・・・いやいや、礼なんかいらねえからね！？コイツどうすんのよ、めっちゃ気持ちよさそうな顔で寝てんじゃん！何故か服着てるし、てっぺんに角みたいなのが二つついてる帽子がぶってるし、俺にどうし」

「ふにゃあ・・・（あくび）」

どうし・・・

「うにゅ・・・（口を閉じてもぐもぐ）」

ど・・・

「むう・・・（ちいさく口を開ける）」

・・・やだ、なにコレ可愛い。

「す、少しくらいなら・・・いいかね・・・？」

コワレモノを扱うかのように、恐る恐る指でその幼女の頬を突いてみる。すごく・・・ぷにぷにです。何回かぷにぷにしていると、その小さな手で指を握られた。なんかすげえほっこりする。どうしよ、にやけが止まんねえ。こんなとこあいつに見られたら大爆笑されるか、世界の終りのような顔をされることだろう。

「・・・よし、うちの娘にしよう」

俺はあどけない寝顔を浮かべている少女を抱え上げながら、竹林の中の家へと進んで行くのだった・・・。

「ただいま」

「おかえり……ってどうしたの、それ」

「……拾った」

「はぁ!？」

「今日から家の娘だ」

「ち、ちょっと!?!意味が分からないんだけど!」

「分かっていい。俺の娘だ」

「そっいつ問題じゃない!」

今日も鬼蜘蛛家は平和です

ついカツとなってやりました。反省も後悔もしていません。これから鬼蜘蛛は親馬鹿路線まっしぐらです。

それと、今回は主人公が本物の妖怪であることを主題として書いてみました。やっぱり主人公が妖怪であるために食人は避けて通れないと筆者は思うわけです。否定するつもりは微塵ありませんが、最近の『主人公妖怪化』の主人公が人間臭すぎると筆者は感じます。もうチョイ妖怪であることを押し出した方がいいんじゃないかと思っています。

もちろん好みは人それぞれですし、人間味があるということが良いと感じる方も多いと思います。もしこの話をみて、気分を害された方がいらつしやいましたら、ここで謝罪させていただきます。申し訳ございません。

しかし、この後もこういう作風でいこうと思いますので、苦手な方はご注意下さいませ。

それでは、また次のお話で会いましょう

ノシ

第十五話 　　娘と娘と戦争と・・・戦争！？ヒヤッホオイ！　諏訪大戦前編

ども、M r・Xです。

結構早めに書きあげましたので投稿いたします。

この小説には娘への愛情が詰まっています。ご了承ください。

それでは、第十五話 　　娘と娘と戦争と・・・戦争！？ヒヤッホオイ！
諏訪大戦前編 　　をお楽しみください。

第十五話 く娘と娘と戦争と・・・戦争！？ヒヤッホオイ！ 諏訪大戦前編 く

「御館様、失礼しま・・・おや？」

「ありや？鬼童丸じゃないか」

「これはてゐ殿。御館様はどちらに？」

「あゝ、兄ちゃんなら娘と一緒むすめに空の散歩にいったよ。今さっき出かけたばっかだからまだ帰ってこないんじゃないかな」

「そうですか、ありがとうござ・・・娘？」

「やっぱ食いついた。娘と言っても、正確には“義娘”むすめだけどね。娘と言わないと怒られるんだよ。発音的には変わらないのにだよ？やっぱ兄ちゃんあんは真正の親馬鹿だね。娘狂いといってもいいかも」

「詳しくお願いします」

「うわあ〜！高いい！」

よう諸君。鬼蜘蛛だ。今、藍^{らん}を頭に乗つけて絶賛空中散歩中だ。ん？ああ、藍^{らん}っていうのは前拾った娘の名前だ。可愛いだろう？名前からしてすでに可愛さが溢れんばかりだろう？可愛いのは名前だけじゃあないんだぜ？将来美人になること間違いないの顔！透き通るような肌！きらめく金髪！ふりふりの尻尾！これだけでもう愛くるしさが滲み出てるだろう？想像できるだろう？特に尻尾なんか、感情がそのまま動きとして表れるからもう愛らしくて仕方ねえんだよ！

・・・なんだその顔は。娘はやらんぞ。嫁になんぞ絶対ありえんかな。特にお前らなんか『藍』つつ名前に既に反応したからな。藍が愛らしいのはわかるが、残念だったな。真正面から堂々と邪魔してやる。相手の男にドロップキック食らわせてボコして半殺しにした後に鬼哭砲で消し飛ばしてやる。存在ごと破壊してやる。交際の条件として、俺との殺し合いで生き残ることを条件にしてやる。んで、元の姿で本気で戦ってやる。

「おとーさん？どーしたの？」

「ん？いいや、なんでもないぞう。それよりどうだ、気持ちいいか？」

「うん！とーっても！」

「そりゃあ良かった。ホントに良かった。生きてて良かった。あんまりはしゃぎすぎるなよ？帽子が落ちるぞ」

「だいじょーぶ！落ちないから！」

「はは、藍はホントに可愛いなあ」

「ほんと！」

「ああ、本当だ。藍は可愛いぞお」

「えへへ」

俺の頭の上で照れたように笑いながら　くてん　と頭を傾^{かし}げる藍。
喜びを表すように、ぱたぱたと揺れる尻尾。娘の可愛さで俺の精神
がヤバイ。崩壊しそう。もうゴールしてもいいよね？むしろもうゴ
ールしてるよね？この川の向こう側に一つ跳びしちやいたいのです
が。行つていい？逝^いっちゃっていい？

「ねーねーおとーさん」

「うおい！？」

ハッ！？危ない危ない、あと少しで新しい世界にトリップする所だ
った。

「？　どうしたの？」

「い、いいや、なんもないぞ」

「それよりも！下にあるのってなに？なんか動いてるの」

「ん？」

藍が指さした先にあつたのは、以前襲撃した集落よりもさらに大規模なものだった。ちよつとした町一つぐらひはあるんじゃないかな。ひととき大きな建物を囲むように無数の住居があり、人間がせわしなく動いている。その大きな建物には人間が列をなしており、最後尾がその集落の入り口くらいにある。他の人間とは違う服装をした・あれは、女か？女が応対している。えらく態度がでかく感じる。倍くらいの背丈をした男が跪ひざまづいている所に、何事か声をかけている所が見える。

「あれは『人間』だ」

「ニンゲン？」

「そうだ。俺たちのえ・・・ご飯だ」

危ねえ危ねえ、汚い言葉は藍の教育に悪いからな。気を付けないと。

「ごはん？おいしいの？」

これまたくてんと首を傾げて聞いてくる藍。可愛い。抱きしめたい。頬ずりしたい。

頬が緩むのを隠す気がない俺は、ニコニコ（実際はにやにや）しながら答える。

「美味しいぞ。美味しいが、まだ藍には早いな」

「えー」

ぶくり と頬を膨らませて不満を出す藍。その顔も可愛い。膨れた頬を突きたい。思わず許しそうになるが、まだ幼い藍にはシヨックが強すぎる。それでトラウマになったりして、これから先に人間が喰えないようになるのが一番怖い。ほぼ死んでる状態から俺の妖力でもって引きずり上げた事によって、“在り方”が俺と似通ってしまった。だから生きるためにはどこかで人間を襲わなければいけなくなってしまった。ぶっちゃけ藍が妖狐になったのも俺の妖力が原因だし。まあそれで今の可愛い藍がいるんだがな。

「ごめんなあ」

色んな意味を込めて謝る。本当にごめんな。

「むー」

ぽかぽかと俺の頭を叩いてくる藍（その姿も愛らしい）を宥めながら、下の様子を観察する。相変わらずごちゃごちゃとしているが、幾分かは列の人数が減ってきたようだ。気が付けば、外を出歩いている人間の数も減っている気がする。

ていうかなあ、あのでかい建物から異質な“力”を感じるんだよな。前襲った所にいた骨のあった人間とはちよつと違った感覚なんだが、良く似ている。それだけなら別に良いんだが、力の量が凄いんだよな。俺が人間の状態で本気出したとき位はあるんじゃないかな。力の質も高いし。

ソワリ

やべ、体が疼いてきた。俺のナ力で狂気が蠢く。暴走しそうになったが、今ここで暴れるとなると藍が危ない。傷一つ付けるつもりは毛頭ないが、万が一ということがある。とっさに藍の笑顔で中和を図る・・・終了。あっけなく狂気が引いていく。藍すげえ。ナデナデしたい。

「っ！？」

「ふあっ？」

そんな事していると、下から尋常じゃない圧力を感じた。俺を圧倒するレベルではないが、それでも並大抵の連中だったら精神が圧迫されて体が動けない状態になるだろう力。とっさに藍を腕の中に庇った俺の反射神経を褒めてやりたい。驚いて下を見てみると、並んでいる人間がすっかりいなくなり、^{ひとけ}人氣がなくなった所で、なぜか目玉が二つ付いた帽子らしき物をかぶった小柄な少女が建物から出てきたのが見えた。・・・ありや人間じゃねえな。さっきまで建物の中にあつた“力”がその少女からあふれ出してやがる。あれは俺たち妖怪と同じ『化け物』と呼ばれる存在だ。

そんな馬鹿みたいな力を持つ少女は、何かを探すかのようにキョロキョロと周囲を見回している。目当ての物が見つからなかったのか、首を傾げている。そして何気ない動作で上を向く・・・上？

「・・・」

「・・・」

バッチリ目があつた。あちらさんは此方を凝視しており、一向に目をそらす気配がない。敵意や殺気等はないが、探るような目つきだ。

地上と距離が結構あるし、今の俺は何処にでもいる普通の人間だ。家を出る前に自らの『妖怪であること』を破壊して『人間であること』を上書きしてきたから間違はなく一般人だ。

そんな一般人な俺をいまだに凝視している少女。いったい何が気になるのだろうか？ 化け物である少女からしてみれば、唯の人間であるはずの俺なんぞに興味を持つことなんざ無いと思うんだがな。

そこまで考えた俺は今一度その少女を観察しようと目を凝らす。・
・あれ？ なんか大きくなってる？

とそこで藍が話しかけてきた。瞬間的に頭を切り替えて藍との会話に集中する。

「おとーさん、さっきからどうしたの？」

「ん？ いや、ちょっと下が気になってな。」

「下？」

「ほら、そこだ」

俺の指さした方を覗き込む。落ちやしないかとヒヤヒヤしたが、特にバランスも崩さずに身を乗り出した。あの少女が居るであろう場所には藍の後頭部があるし、ぱたぱたと動く尻尾に邪魔されて見えない。ものごつつ可愛い。後姿もとってもキューティクル。生きて良かった。あれ？ さっきも言ったなこれ。

とそこで藍の声が聞こえ、意識が戻される。何処からかは秘密だ。

「ねーおとーさん。女の子がこっち来てるよ？だれ？」

「うんにゃ、知らないな。それより、こっちに来てる？」

「うん、もうすぐそこにいるよ」

「ん？」

藍の頭の上から覗き込むようにして下を見る。ありゃ、ホントにすぐそこまで来てるよあの嬢ちゃん。とりあえず敵対意識は無いようだからそのままにしておくが、もし藍に傷を付けようもんあら八つ裂きにしてやる。

その少女が目の前まで昇ってくる。改めて見てみると、なかなか可愛いじゃねえか。藍には到底及びはしないがな！そもそも前提からしてありえないしな。

つとまあこんな事は一応おいておこう。あとでじっくりとつぷり討論しようじゃないか。

「で、貴方達は何者？此处で何をしていたの？」

探るような目つきを止めずに言及してくる目の前の少女。その体からは得体のしれない“力”があふれ出しており、有無を言わせない圧力を感じる。感じたところでどうにもならんのだがな。それより、なにあの帽子。俺をガン見してるんですけど。あ、まばたきした。いよいよもってなんだこれ。

「うんとね、わたしは藍ってゆーんだよ！こっちはおとーさんなの！えっとね、わたしはおとーさんといっしょにおさんぽしてたの！」

「空の上で？」

「うん！」

なんとも無邪気で可愛い受け答えをしてくれる娘。もうお父さんは満足です。いや、満足してねーや、やつぱり。まだ心残りあるわ。殺し殺され喰い喰われの戦場で死にたい。全身血みどろになって、そんでもって藍に看取ってもらおう。それがいい。

「それで？」

「あ？」

いい感じに思考が纏まってきたところで横やりが入る。目の前の少女からだ。

「本当の目的は何？」

「目的い？藍が言っただろうが。親子で散歩だ。それ以外にはねえよ。そもそもこんな唯の人間捕まえて何してたか聞くなんでどういうことじゃ」

「ただの人間が妖獣つれて空中散歩なんてありえないでしょ、加護を受けているでもないのに。よく化けたね、妖怪さん」

あら、ばれちったよ。なんでこうすぐばれるかね。永琳しかり、今回しかり。ま、んな事どうでもいいか。

「俺が妖怪だとわかってどうするつもりだ？こちらら散歩しに来た

ただだからな。つーかお前こそなんなんだよ。妖怪の中にはお前みたいな“力”を持つてるやつなんざ見たことねえんだが」

「・・・貴方、それ本気で言ってる？」

「おうとも」

「・・・はあ、警戒してたこっちが馬鹿みたいじゃないか。わかった、とりあえず下に降りないかい？ここじゃなんだか落ち着かないんだよ」

言うが早いが、少女は下に降りて行つた。こっちとしてはこのまま立ち去るといふ選択肢もあったわけだが、藍がずいぶんと乗り気なため行くとする。もしかすると、コイツが“反対側”かもしれない。

そいじゃ、行くとしますかね

地面に降りた俺と藍は、少女に導かれてデカイ建物の中に入っていた。なんか空気が取っ付き辛い。変な視線が全方向から感じられるし。

少しばかり歩いたところにある客間らしき所に座らされた。目の前には例の少女が座っており、膝の上には藍が座っている。興味が至る所に向くらしく、あっちこちに視線を動かしている。そんなでもって何か言いたげに少女を見、そのあとに俺を見上げてくる。・・・なるほど

「なあお前さん、ちょいとばかりし娘を離していいかね？どうせこの娘には関係のない話だろう？」

「いいよ別に。保護者の貴方ぐらいしか知らなくてもいいと思うし。変に弄られなければ」

「だとさ、藍。ほどほどにな？」

「うん！ありがと、おねーちゃん！」

喜びを全身で表し、さっそくそこかしこを歩き回りだす藍。ちょこちょこと歩く後姿がまた愛らしい。やべ、鼻血でそう。

「さて、本題に入ろうか。私は洩矢諏訪子。神様と、この国・・・『洩矢の国』の王をしてる。あ、貴方の方は別にいいよ。たぶんもう会うことは無いだろうし、これからするのはちよっとした忠告だから。それと、とりあえず私としては貴方を殺すつもりはないよ。国民に手を出すというのなら話は別だけど。」

神、か。なかなか面白そうだな。それに、“反対側”である可能性も高まってきたな。確かめてみるか。

「ふむ、その前に質問してもいいか？」

「なに？」

「お前・・・神様って言ったよな？神様つーのはなんだ、俺たち妖怪みたいなもんか？」

「んゝまあ大本は同じじゃない？貴方達妖怪は恐怖を、私ら神様は信仰をそれぞれ人間から得てるし。でも、『無意識の恐怖』よりも『意識的な信仰』の方が力の質は良くなるから、貴方達は下に見られている事が多いね。例外は在るけど」

ますます面白い。目の前の少女　洩矢諏訪子レベルの存在がゴロゴロいるということか？楽しそうだ。

「私はこの国全域の土着神を纏め上げているから、国民すべての信仰が私一人に向けられてるの。そのおかげでそこら辺の神様よりは全然強いから、心配しなくてもいいよ。私ぐらいの神様なんてそうそう居るもんじゃないから」

俺の思案顔を別の方向に解釈したのか、安心させるように話しかけてくる。がっかりした。まさか一度持ち上げて落としてくれるとは、洩矢の神はなかなかの策士というわけか。

「で、もういい？本題に戻るよ？」

「ん？ああ、いいぞ」

忘れてた。忠告だったか？鬼童丸からは報告が来てないから、別に心配することは無いと思うがな。親切から来てるようだし、聞くだけ聞いてみるか。

「結構前の事なんだけど、此処から西に行ったところに“大和の国^{やまと}”が起きたの。最初は小さな国だったけど、強力な神の支援を得て周りの国を飲み込みんであつという間に大きな国になった。今もまだ勢力を広げているという情報もある。あたりの神や妖怪の領域なんかを手当たり次第に飲み込んで、この国めがけてね。私が言うのもなんだけど、私の国は巨大だ。大和の連中に引けを取る気なんてさらさらない。間違いなく大規模な戦争が起こる。」

戦争。この単語を聞いただけで体の芯が疼く。俺にとって、闘争は何よりも格別なモノだ。そんなものが近くで起き、自分が当事者でないと言ふことはだ。生殺しだ。どちくしょうめ。

「私は、貴^{妖怪}方達とはよき隣人で居たいんだよ。妖怪が居て恐怖をまくことで、私^神たちへの信仰が増える。要は共存だね。すでに国内の妖怪たちには通達を出してあるんだよ。『巻き込まれて死にたくない』」
「あんな外に出てろ。邪魔はしない」ってね」

「ふん。お前さん、変わってるじゃねえか」

大抵の奴らなら排除しようと動くもんだがな。妖怪を下に見てるなら尚更だ。自らを信仰している人間に力を見せつけ、より多くの信仰を集めるには格好の相手と見るのが普通じゃねえのかな？俺だつたらそうするが。

「他の神からよく言われる。だから最近成ったばかりの連中は困るんだよ。無闇矢鱈^{むやみやたら}に藪を突くと、蛇どころか龍が出てくることを知らない奴らばかり。そんな話はまだ聞いてないけど、いつ出張してくるか分からない状況で危険を冒すなんて真似ができるわけない。甘く見過ぎなんだよ。ヘタすりゃこっちが殺されるってのに」

心底呆れたように話す諏訪子。つまりはアレだ、強大な力を持つ諏訪子をして慎重にならざるを得ない力を持つ奴が居ることだ。さあ、盛り上がってまいりました！ぜひとも詳しく聞かなければ！聞いた後そいつに喧嘩売りにいかなければ！

「なあ」

「何？」

「その、龍ってどういうことだ？」

「ん、やっぱり知っておいた方がいいかな。龍ってのは、さっき言った“例外”って奴。はるか昔から、それこそ神ですら知らない時代から存在し続ける化け物。人妖間で大戦を繰り広げ、妖怪側に勝利をもたらした三匹の大妖怪。一匹は消息を絶ったみたいだけど、残る二匹は依然として自らの居住に残っている。私でも迂闊な手出しはできない。殺されるつもりは無いけど、それでも大きな痛みを被っちゃうから」

「・・・うん？なんか聞いたことあるような気がするんだが？」

「一匹は、ここから東に行った所に居るぬらりひょん。三匹のうちで一番若い・・・って言っても私よりかはずいぶん年上なんだけどね。奴良組と呼ばれる独自の勢力を築き『囚われ^{とら}ない程度の能力』なんていう能力を持ち、いつの間にかそこにいて、いつの間にかいなくなる。こちらの攻撃は掠りもせず、手にした刀によっていつの間にか斬られているらしいわ。」

んん『俺は何者にも囚^{みな}われない。丁度、水面に映る月を捉えることができるように。だから、お前の攻撃は掠りもしない。わかるか

「デカブツ」なんて舐めた真似をしてくれたから、“能力の存在”を破壊してぶん殴ってやったのは覚えてるが、いつの間に奴良組なんて作ったんだ？『ぬら孫』の世界じゃあ無いはずだが・・・。

「最近組員を募集しているらしいから、気に入られれば安全は保障されるんじゃないかな？」

安全の保障どころか喧嘩売ってくるがな。負けたことねえけど

「一匹は、反対に行つた所に居る羽衣狐。三匹の中で唯一の女性妖怪で、絶世の美貌を誇るらしいわ。最も多くの妖怪を傘下におき、西方一帯の妖怪の主でもあるらしい。妖獣の頂点に君臨する彼女は能力を持たず、単純な力だけでのし上がったの。能力を持たずして能力もちと互角以上に渡り合える羽衣狐は、その美貌も相まって求心力がとてつもなく高い。そのおかげで物量なら三匹随一であり、すぐ近くに大和の国があるにもかかわらず未だに侵攻はされてないみたい。あいつらにもそれぐらいの頭はあるみたいだね」

さらつと毒を吐く諏訪子。まあ確かに、あの小僧の能力を意にも解さず太刀や扇でぶつ叩く女だからな。この前なんか、槍の先端が刀みたいになった得物を振り回して山の一角を裸にしたし。しかしなあ、なんであいつは俺との闘争を嫌がるんだろつか？毎回顔を真っ赤にして拒否しやがる。嫌われてんのか俺？

「ここから遠いし、大和の国を通ることになるから危険が付きまとう。あまりおススメできたもんじゃにね」

つか、この話の流れってあれじゃね？俺の予想と全く違うし、絶対聞いたことある話の予感がするんだが。

「最後の一匹は、この国の近くにある山を拠点としていた鬼蜘蛛。巨大な体躯と四本の腕を持ち、血に染まった髪の下にある顔は地獄の悪鬼のようだと伝えられているわ。その戦闘力は他の二匹を遥かに凌駕し、人間側に傾いていた戦況を一匹で覆したとか。人間の根本的な恐怖を作り上げたともいわれ、一部の国では神に祭り上げられているわ。とある伝承では、

『四本腕の鬼を見かけたら決して動くな。息をするな。悟られるな。死にたくなければ過ぎ去るまでまて。それは鬼ではなく“災厄”だ』

とまで言われているの。流石に言い過ぎだとは思っけど、三匹のうちの筆頭格であるのは間違いないみたい。まあでも、羽衣狐やぬりひょんとは違って目撃情報は無いからもう死んだと考えてもいいかもね」

すまないが、まだ生きてるよ。しかもお前の目の前に座っているよ。だが、面白そうなので黙っておく。あとでばらしたらどうなるだろうか？

「それでもまだ、山に残っている配下の妖怪たちは侮れない。数こそ少ないものの、鬼童丸や牛鬼兄弟、果ては鬼神までいる。そんな所にちよっかいかけれる馬鹿はいないと思うけど、大和の連中がかけたりしたら万々歳だね。敵の敵は味方。もしかしたら共闘できるかもしれないし、そしたら随分と楽になるんじゃないかな。たぶん無理だと思うけどね」

いやあ、たぶん出来るんじゃないかな？あいつ等も喧嘩好きだし。決めるのは俺じゃねえんだがな。今はあいつらに預けてる状況だし、あっちで何とかするだろ。

「わぁ〜！」

声のした方に目を向けると、いつの間にかこっちに戻ってきていた藍が目を輝かせて俺を見上げている。可愛い。

「おとーさんって、すごいんだね！」

すごいすごい！と尻尾を揺らしながらはしゃぐ藍の頭を撫でてやる。そのまま抱きしめたいくらい可愛い。どうしよう、俺の貧弱な語彙じゃもう『可愛い』しかでてこねえや。

「・・・お父さん？でも、あれ？ここにるのが親・・・え？あれ？」

良い具合に混乱している諏訪子。そのうち目が渦巻きみたいになるんじゃないか？

少しばかり落ち着いた様子の諏訪子は、意を決したように表情を硬くしながら藍に質問した。

「えっと、藍ちゃん？貴方のお父さんって、鬼蜘蛛っていつの？」

「うん！」

「お父さんは、今どこにいるの？」

「え？なんで？ここにいるよ？」

「いーよ。んで、何を伝えたらいいのよ？」

「では、『御館様に会いたいと言う者が来ているので、一度こちらに帰ってきていただけませんか』とお伝えください」

「りょーかい」

「では、失礼いたします」

第十五話 く娘と娘と戦争と・・・戦争！？ヒヤッホオイ！ 諏訪大戦前編 く

どうでしたでしょうか。ちょっと無理矢理感がありますが、目をつむっていたけると幸いです。

今回の話は、ズバリ諏訪大戦編です。後二つぐらいを予定しています。はろはろ衛星様のご要望に応じて、ケロちゃんルートを通らせていただきました。神奈子ルートを希望していた読者様、すみませんでした。

感想、指摘、批評等大歓迎でございます。ぜひともお願いいたします。

それでは次のお話でお会いいたしましょう

ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3642m/>

東方破壊録

2011年9月21日16時57分発行